

君は朝日のように眩し  
くて

藤井 悠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは音楽の中に生きる一人の少年とギターに魅入られた一人の少女の物語である。

# 目

# 次

## 第一章

出会いは何気ない日常から	115	ナカナ イナ カナイ
ロツクな花との再開	1	貴女と私は rock & crazy
青薔薇の覚悟と現れる壁	1	文化祭はエンジョイすべし
蒼い風と朝の花は古郷では	1	文化祭パニック
捨てたい過去と捨てられない過去	1	心の風向きは変わりやすい
47	36	彼女と彼はもういちど
	26	蒼生の居場所
	17	115
94 87 78 69 56	1	106

## 第2章

B a n G	D r e a m !	Returns
永遠の仲間たち	194	179
六花とロツクなデート?	173	162
目の前の花は何よりも甘くて	153	138
夢見るアイドルと蒼い風	125	125
仲間の大切さ		
夕焼けに思いを馳せて		

214 205

194 179 173 162 153 138 125

106

ロックに咲け

抵抗の意思

それは鍵

ごめんよりありがとう

蒼生は大忙し [前編]

流れる星に魅せられて

蒼生は大忙し [後編]

——

彼女達は彼女達らしく、俺は俺らしく。

256

249

240

228

R o s e l i a に

音の本流

たまにはこんなのも

嫉妬そして欠落

特別

言葉は呪い

解決のち土砂降り

333

327

320

308

296

286

279

268

# 第一章

## 出会いは何気ない日常から

俺の名前は風神 蒼生（かみかぜ あおい）。

羽丘学園の2年生である。去年までは女子学園だつたのだが、入学者希望数が少なくなつてきていることで今年から共学となつたそうだ。

俺は2年生だから関係ないと思うだろうが俺は最近になりこの地域に引っ越してきたので羽丘に転入したのだ。なのでこの学年の男子が俺しかいないのだ。  
だから正直ちよつと馴染めてないところもある。

だが全員と言うわけでもない。というのも自分の趣味のおかげなのだが。その趣味  
というのが・・・

香澄「ねえ、ちよつとわからない小節があるんだけどーー」

蒼生「んー？ はいはい、どこがわからんないんだ？ 香澄？」

たえ「あとで私も教えてー」

蒼生「あいよー」

そう、俺は音楽が好きでギターをやつているのだが、引っ越して間もない頃、ここ

ライブハウス「CIRCLE」に来て弾き語りをした所、ここNSTAFFの月島まりなさんという人に今この辺りで勢いのあるガールズバンドのライブを見て欲しいと言われた。

そして言われるがままそのガールズバンドのライブを見たのだが、俺は確かにそれぞれのバンド、個性はそれぞれ違うものの確かに惹き付けられるものがあつた。だがしかし俺はまりなさんがどういった目的で俺にこのライブを見せたのか、その真意が分からなかつた。

ライブ後まりなさんに声をかけられて、ストレートに何故俺にあのライブを見るよう勧めたのか聞いてみたすると、

まりな「君は何年ギターやってるのかな?」

と返された。質問を質問で返すなアアアと、どこぞの殺人鬼みたいな事をいいそうになつたがここは抑えて、

蒼生「・・・一応7年間やっていますけど」と返すと衝撃の答えが帰ってきた。

まりな「うんうん!道理で一人の弾き語りであそこまでお客様を盛り上げることができるわけだよね。そこでお願ひなんだけど、さつきキミが見てきたガールズバンドにキミの音を届けて上げてくれないかな?」

蒼生「・・・はい？」

いや普通急にこんなこと言われたら誰でもこうなるだろう。  
てか音を届けるつて何?とか、なんで俺?とか色々な疑問が浮かんできて更に混乱し  
始めて来たところでまりなさんが、

まりな「ほら、今つてガールズバンドつてかすごく流行つてるしCIRCLEとして  
も腕のいいガールズバンドが増えてほしいんだよ。駄目かな?」

確かにこのCIRCLEはガールズバンドを応援しています!みたいなCMみたいなポスターが入り口に貼つてあつたのでそれは理解しているんだがそもそも俺にメリットがあるわけでもないし・・・

まりな「もちろんそれを引き受けてくれた時は我がCIRCLEのバイトとしてやつ  
てもらいたいからお給料も出るけど・・・」

蒼生「やります!」

まりな「ありがとうございます!助かるよ」。じゃあ日程は明日相談して決めることにしよう  
か。」

正直断つて帰ろうと思つていたがお金様が絡んできたなら話は別だ。最近金欠だつ  
たしバイトも探そうと思つてたので、しかも自分の好きな音楽のことに関われるという  
最高の環境が整つていて。これを断る手はないだろう。

まりな「あ、ちなみにそれぞれのグループにはキミ自身がお願ひに行つてね。」

蒼生「・・・え？」

そして俺は5つのガールズバンドのいわゆるサポートー的な位置付けでアドバイスをすることになったのである。

だがしかしサポートをするには自身で全5バンドに許可を取らなければならぬらしい。

方向性もあのライブを見る限りだとバラバラなので全部が全部うまく行かない可能性もあるがそこはそうなつたときに考えよう。

まずR o s e l i aというグループだつたがまず第一印象は『真面目』だと思つた。どう真面目かというとサボる事は決してありえない、自分たちの音を極め続けるといったイメージである。ちよつとびっくりしたのがリーダーの湊さんという人に

友希那「まずあなたの音を聞かせて頂戴。」

と言われ側にいた冰川さんという人に

紗夜「そうですね。まずあなたの音を知りたいです。」

結局この二人のオーラに押され一曲披露したら

友希那「・・・」

紗夜「・・・」

そして他の3人もポカーンと微動だにしていない。もしかしてまずつたかなと思つていると、

友希那「驚いたわ。ここまで音が出せるなんて・・・」

紗夜「はい驚きました。」

そして今まで何も言つてなつた3人も

リサ「うん☆アタシも♪ビリビリ来たね♪」

あこ「あこもです！りんりんもだよね？」

燐子「うん・・・私もだよ・・・あこちゃん。」

友希那「皆今日から蒼生がこのR o s e l i aのサポートをする事に反対のある者はいないわね？」

「「「はい！（うん！）」」」

と言う訳でR o s e l i aからは承諾を頂いた。

次にハロー、ハッピーワールド！と言うバンドの所に行つた。このバンドの印象は『笑顔』だった。

なんでもこのバンドは「世界を笑顔に」をモットーに活動しているらしい。だからこのメンバーの雰囲気も明るい。明るいのだが・・・

「こころ「あなたが蒼生ね。待つてたわ！あなたも私達と世界を笑顔にしましょう！」」

蒼生「部屋入つて早々これですか・・・」

明るすぎるのだ。蒼生には少々元気すぎるのかも知れない。まあ最初から歓迎され  
てるのは良いのだがこれはこれで苦労しそうだ。

??? 「すいません苦労かけて。ほらこころ少し離れなよ。」

蒼生「いやいや全然大、丈夫・・・」

俺がそこで目にしたのは・・・

蒼生「・・・クマ?」

ミツシエル「ああ、あたしはこのハロー、ハッピーワールドでDJやつてますミツシエ  
ルでーす。」

こころ「そうよミツシエルはこのハロー、ハッピーワールドーの守護神よーところで  
美咲はどこかしら?」

花音「だからこころちゃん。美咲ちゃんはここに・・・」

はぐみ「何言つてるのさかのちゃん先輩。みーくん今ここにはいないじやん。」

薰「きつと忙しいんだよ。優い・・・」

花音「ふえ〜〜」

ミツシエル「いいですよ花音さん。もう諦めてるんで。」

蒼生「・・・なんか察せたよ」

とどのつまりこのミッシェルがその美咲と言う娘なのだろうがこの3人は気づいてないのだろう。・・・馬鹿かな？

「こころ「何はともあれ今日から蒼生が今日からハロハピでサポートしてくれるのは皆賛成よね？」

「「「うん！（ああ）」」」

ハロハピは後から苦労しそうだな・・・

次はP a s t e l ? P a l e t t e s のところに行つた最近人気になつてきた『アイドル』バンドである。何気に俺もファンであつたりする。今日は特別にC I R C L E に来てもらつたらしい。ガチガチになりながらドアを開けると、P a s t e l ? P a l e t t e s

は全員集合していた。いや今までもそだつたが相手は芸能人な訳で、それでいて何気に自分もファンである為に今までに無い緊張が走つてゐるのである。すると、

彩「えーと、君がまりなさんが行つてたサポーターの人？」

蒼生「はい!!神風 蒼生です！」

なんか面接みたいになつてしまつたが問題ないだろう。・・・あれ?なんかくすくす笑われてるけど。

千聖「もしかしてファンの方ですか？」

蒼生「え？ あ、はい。そうです。」

まさか向こうからそう来るのは思つてなかつたので素つ氣ない返事になつてしまつた。すると、

彩「え！？ほんとに？じゃあじやあ、私の事わかる？」

蒼生「え？丸山彩さんです・・よね？」

彩「うん♪まんまるお山に彩りを♪Pastel?Pallettesふわふわピンク担当、丸山彩です！」

Wow、まさか生で見れるとは俺今日死ぬんじゃないのかな。

日菜「ねえ、まずはあたしたちの演奏聞いてもらおうよ。んでその後この人の演奏も聞こうよーそれが一番るん♪つてくるよー」

るん♪つて日常でも使つてるんだ。

つてかなんで俺が弾くの？

千聖「ごめんなさいね。日菜ちゃんこう言い出すと多分もう聞かないから。お願いできるかしら？」

蒼生「あー、はい。わかりました」

そしてお互に披露し合うと、

日菜「すごい！るるるん♪つてきた！」

麻弥「ホントにすごいですよ！」

イヴ「アオイさんの演奏にシビレました！ブシドーです。」

千聖「ブシドーは関係ないと思うけど、でも凄い演奏だつたわ。私達がCIRCLEに来たらあなたにサポート、私達からお願ひしたいくらいよ。」

o h、千聖さんにここまで言つてもらえるなんて：：俺ギターやつてて良かつた（涙）彩「じゃあ皆は蒼生君がサポートしてくれるつてことで大丈夫？」

「「「はい！（ええ）」」

次はAfterglowと言うバンドの所に行つた聞いたところこのバンドは幼馴染5人で結成したらしい。つてことは一番交渉が厄介かもしれない。なんでかつて？そりやあ、

蘭「あたし達はあたし達のいつも道理演奏するだけ。あんたなんかいらない。」

こうなると思つたからだよ。幼馴染つてことはそれなりに固い『絆』で結ばれているだろう。

そこに見知らぬ他人が介入しようとしているのだ。

当然いい気分なんかしないだろう。

つぐみ「ちょ、ちょっと蘭ちゃん」

モカ「いやー今日も蘭は平常運転ですなー」

ひまり「ちょっとモカ、今はそんなこと言つてる場合じや。」

この焦り方を見る限り美竹は怒らせるとめんどくさいらしい

蒼生「つてか青葉おまえもなんかフォローしてくれよ・・・」

モカ「え、そう言われましてもなう。モカちゃんそもそもあおくんがどんな演奏する  
か知らないからなう。」

いい忘れていたが青葉と俺は同じクラスなのだ。あいつが俺の昼飯のパンをパクつ  
た所から始まつてなぜかそこそこ仲良くなつたのだ。多分パン好きつて共通点だけで。

巴「でも言われてみればそうだな、なあ今から蒼生のギター聞かせてくれないか?」  
まあそうなるよな。と言う訳でまたここでも一曲披露することになつた。そして演  
奏し終えたら、

蘭「・・・」

モカ「・・・」

つぐみ「・・・」

ひまり「・・・」

巴「・・・」

あれ?なんかデジヤヴつてない?

つぐみ「凄い・・・」

モカ「これはなかなか工モいですなー」

巴「蘭、これは文句ないんじやないか?」

蘭「・・・分かつた。でもあたし達の音を乱すようならすぐ辞めてもらうから。」

モカ「蘭は素直じや無いなー」

蘭「ちよ、モカ!//」

何とかなつたみたいだな。とりあえずこのバンドでもやつてけそだな。

ひまり「じゃあ皆!頑張ろうね!せーの、えい、えい、おー。」

「「「「・・・」「」」」

最後にpoppin', partyの所に行つた。このときだけはCIRCLEではなく「市ヶ谷家」とのでかい家の蔵の中にいた。

このバンドはリーダーである戸山香澄が過去に自分が感じた『キラキラドキドキ』を見つけるために結成したバンドなのだそうだ。

そして俺がこの部屋に入つて思つたことが1つあつた。それは・・・

蒼生「変態がいる・・・」

香澄「変態じやないよおー。おたえーーーー」

たえ「香澄は変態だよ。」

香澄「違うつてばー。」

りみ 「大丈夫だよ。香澄ちゃんは変だけど変態じやないってばあ。」

沙綾 「なんかこのやり取り、前にもあつたね。」

蒼生 「あつたんだ。」

しかもなんか安易に想像できちゃうし。

有咲 「すみません。騒がしくて。」

蒼生 「いえいえ。俺が発端ですし。」

沙綾 「いつも一番有咲が騒いでるよね。ねー有咲」

有咲 「そんなことねーし！！・あ」

蒼生 「えーと、まあ賑やかなのはいいことだしね。」

たえ 「それで蒼生は私達をサポートをしてくれるんだよね？」

蒼生 「そのつもりだけど。」

たえ 「でも一回私達の演奏を聞いてほしい。」

沙綾 「そうだね、その後蒼生の演奏も聞きたいかな。」

蒼生 「分かった」

そして互いに演奏し合つた。・・・ハロハピだけやつてないな。

あの空気なら無理もないか。

香澄 「凄い！」

蒼生 「うお!」

有咲 「おい香澄、びっくりさせんなよ。でもホントにすごい演奏だつたな。」

りみ 「ホントにすごかつたよ。かつこよかつた!」

たえ 「震えた。ギター私より全然上手。」

蒼生 「ありがと。一応どのバンドの演奏も聞いてきたんだが、バンドごとに違う味があつて良いよな。」

香澄 「私もそう思う! でも私達もつとキラキラドキドキしたいから私達のサポートしてくれる?」

蒼生 「おうよ、任せとけ」

「「「「よろしく(お願ひします)」「」」」

と、こうして色々なバンドを回ってきたわけだけど今はポピパのこと教えている。

ギターのことは詳しく指摘できるが、キーボードに関しては俺はちよつとピアノをやつた事があるくらいなので多少の指摘しかできない。

ベースとドラムに関してはズレた場所と音がズレたという事しか言えなくて細かいことは言えないのだがその大雑把な指摘だけでも皆一生懸命にやつてくれるのでこちらとしてもとてもやりがいがある。

そして気づけばだいぶいい時間になつていた。

蒼生 「そろそろ終わりにしようか。」

香澄 「もうそんな時間かー。」

りみ 「また明日だね。」

たえ 「蒼生も、またよろしく。」

蒼生 「ああ。にしても皆の飲み込みが早くて助かるよ。」

沙綾 「そうかな? 私は教え方がいいからだと思うけどな?」

蒼生 「そうかな?俺は思つたこと言つてただけだから?」

有咲 「思つたこと言つてついつい口が滑つたとかは勘弁だかんな。」

そしてみんなで笑つたあと、それぞれ帰宅準備を済ませた。

りみ 「またね、有咲ちゃん。」

たえ 「また明日ー。」

香澄 「じゃあねー。」

沙綾 「またね有咲」

有咲 「・・・」

なんか寂しそうにしてる。すると、

有咲 「・・んあーー、私もコンビニー！」

付いてくるみたいだ。あんなにツンツンしてでもやっぱりこのポピパが好きらしい。

有咲「だあーーー、笑うなーーー！」

みんなコンビニのことを口実に出てきた市ヶ谷のことが可笑しかつたり、可愛かつた  
りで、笑つてゐるんだろう。その後他愛のない話をしていると突然花園が、

たえ「ライブやりたいね。」

と言い出した。それにすばやくポピパメンバーは便乗していた。

香澄「いいねー私もライブやりたーい。」

りみ「予約も取らないとね。」

たえ「駐車場でやつてみたい！」

香澄「かつこいい!!」

有咲「いや絶対大変だろ!?」

沙綾・蒼生「アハハ。」

なんで事を言つていると急に正面から。

???「あの、PoPip...Poppin, partyさんですよね!？」

そしてちょっと同様氣味に答えたのは香澄だつた。

香澄「え?、はい」

???「助けてください!」

そしてもう一步その娘は前に出てきて、

??? 「G a l a x yのライブに出てくれませんか？」

（つてあれ？この声もしかして？）と思っていた矢先その娘はもう一步前へ出てきて、街灯の光ではつきり見えた。

（間違いないあいつは・・・）

蒼生「もしかしてロツク？」

ロツク？「蒼生さん!?」

# 口ツクな花との再開

りみ 「すごいね、初めての場所なのに堂々としてる。」

有咲 「おい、見てばつかないで説明聞けよ！」

沙綾 「ごめんね、朝日さん。」

六花 「いえ、ボビパさんの出番は最後なのでのんびりしていて下さい。」

香澄 「お客様凄いね！」

六花 「はい！皆さんのおかげでリニューアルオープニング大成功です！」

有咲 「それより蒼生と朝日さんが知り合いだつたとはなー」

蒼生 「しかし口ツクはこつち来てたのかー。引っ越したってのは知つてたがまさか同じところに引っ越してるとは思わなかつたなー」

そう俺は【朝日六花】と引っ越す前でも知り合つた。あだ名は口ツクで一つ俺より年下。

二人で仲良くギターの腕を磨き合い競い合つて來た。

俺が引っ越すタイミングで口ツクも引っ越すというのは知つてたが、まさか同じ場所に引っ越して來たとは思わなかつた。

六花「私もびっくりしました。でもまた蒼生さんとギター出来るんですね！」

蒼生「／＼／＼そうだな。」

実は俺は六花のことが好きだ。引つ越すと決まつたときはかなりショックだつたが、またこうして会えたことだし、「また一緒に入れますね。」って言つてくれたし、また楽しくなりそうだな。・・・え？ 「また一緒に入れますね。」なんて言つてなかつたつて？ ほつとけ。

そんなことを考えていると、楽屋のドアがバツと開いて

こころ「ハッピー、ラツキ・・あら？」

はぐみ「わあアア」

ハロハピの元気印のふたりが飛び出してきた。

香澄「はぐ？ こころん？」

はぐみ「あれ？ かーくん？ ここ楽屋だ？」

こころ「あ！ ステージの扉かと思つたわ。」

すると楽屋にまた一人の姿が現れた。

薰「儂い・・・」

なんてこつた。美咲さん風に言う所の三バカがおバカな形で揃つてしまつたようだ。あれ？ なんか牛込がおかしくないか？

沙綾 「ハロハピ出番次だよ？」

六花 「ご案内します。」

「こころ 「ええ、それじやあ・・? あら? 花音とミツシエルがいないわ?」

はぐみ 「迷子だー?」

「こころ 「花音くく、ミツシエルくく。」

六花 「すみません、行つてきます。蒼生さんもまたあとで。ハロー、ハッピーワールド! サーーン!」

薰 「またね、子猫ちゃん達。」

香澄 「大丈夫かな?」

数分後三バカラは観客に運ばれながらステージに到着するというなんともハロハピらしい出来事にポピパメンバーと俺は苦笑いしていた。するとまた扉が開き、

蘭 「あつつい」

ひまり 「ぷはあ、5キロくらい減つたかな?」

巴 「減つた減つた、10キロくらい減つたよ。」

ひまり 「もう、巴適当なこと言つて!」

つぐみ 「まあまあひまりちゃん、そんなに気にしなくても。」

Afterglowのメンバーが戻ってきた。

香澄「お疲れ様。すつごいカッコよかつた。」

蘭「あ、ありがとう／＼。まあいつも道理だけど。」

モカ「あっれー、蘭顔赤いよ！」

蘭「暑いだけ／＼」

巴「ボピパは最後だけ？」

沙綾「そう。香澄が大当たり引いて。」

有咲「当たりか？」

香澄「当たりだよー」

蘭「当たりかどうかはともかくトリは大事だから。所で神風。さつきのライブだけど。」

蒼生「ああ、そうだな。まず蘭は・・・」

Afterglowの一人一人に今日の出来高とアドバイスをして、全員が終わつた  
とほぼ同じタイミングで、

友希那「Roseliaです。今日はよろしくお願ひします。」

蘭「リハ来てませんでしたけど、本番大丈夫なんですか？湊さん。」

友希那「問題ないわ。リハはこちらで済ませてあるし、丁度熱くなつてる。」

そして湊さん率いるR o s e l i aはステージに向かつた。  
そしてポピパも準備ができたみたいだ。

蒼生「じゃあお前らも行くか。」

「「「「うん!!」」」

そしてステージ裏に付くと

あこ「それでは皆の者!バイバーイ。」

燐子「あ、あこちゃん!」

丁度R o s e l i aが終わつたみたいだ。

そしてポピパのメンバーをステージに上がる。

ポピパがMCをしている間にR o s e l i aにアドバイスを済ませると、

六花「蒼生さん!」

蒼生「ロツク!」

ハロハピの案内やらなんやらで姿を消していたロツクがここに來た。

蒼生「仕事は?大丈夫なのか?」

六花「はい!なのでここでポピパさんの演奏を見ることにします。」

蒼生「そつか・・・なあロツク?」

六花「はい?なんですか?」

蒼生「引っ越す前さ、受験シーズンのちょっと前くらいから引っ越したいって言つたけどもしかして？」

六花「はい！受験前にSPACEでポピパさんのライブを見たんですけど、それに憧れてこつちに出てきたんです。」

蒼生「そつか。高校は？」

六花「羽丘に通っています。」

蒼生「え？そつかそつか。同じ所なんだな。」

六花「蒼生さんも一緒になんですか！？だったらまた一緒にギター練習できますね♪」

蒼生「それいいな！でもうるさすぎると生徒会やら風紀委員やら飛んでくるから向こう程はできないと思うけど。そういえば六花はお国言葉はあまり出さないんだね？」

六花「こつちで住むならあまり出さない方がいいと思いますし。・・・偶に出ちやいますけど。」

蒼生「ハハ、俺もだよ。お！そろそろポピパはじまるぞ。」

そしてポピパのHappy Happy Party！も終わつた所で今日の出演バンドがステージの上に上がつた。ちなみにロックは号泣している。余程ポピパの演奏が聞けて良かつたのだろう。

紗夜「最後に1つ、告知があります。」

お？ あのことここで言うつもりか？

友希那「私達R o s e l i aは来週主催ライブをやるわ。」

香澄「主催、ライブ？」

あこ「R o s e l i aのR o s e l i aによるR o s e l i a大共演！皆の心して待つが良い！ほら、りんりんも。」

燐子「う、うん。自分達で主催するのは・・・緊張しますが・・・が、頑張ります。」

リサ「みんな来てねー☆」

実は主催ライブを勧めたのは俺だ。R o s e l i aのレベルならかなり良い仕上がりになるはずだし、何よりR o s e l i aの目標の為にも必要な段階であると思う。

紗夜「以上です。他に告知があるものは？」

するとなんだかポピパが主に戸山がそわそわしている。なんか嫌な予感が・・・

香澄「はい！私達もライブします！」

やつぱりこうなつた・・・絶対勢いとやる気だけで何とかしようとしてるよ。だがしかしここでやると言われてしまつた以上俺もサポートしなくてはならない

(・・・腹くくるか。)

「「「「poppin, party、ライブします」」」

盛大な告知の後俺はガールズバンド達と別れロックと帰宅していた。

蒼生「じゃあ今は伯母さんの家で働きながら?」

六花「はい。でも毎日番台と掃除の仕事で家賃もゼロにしてもらつてあるんです。」

蒼生「それでG a l a x yでも働いて、バンドメンバーも探してると・・・何と言うか相変わらず凄い行動力と言うか、ロックらしいな。」

六花「でも蒼生さんはここでもバンドは組まないんですね?」

蒼生「ああ。サポートでも忙しいし、基本弾き語りとか一人でやるのが好きだからさ。」

あ、ロックは別だぞ?」

六花「はい!あ、私こっちなので。」

蒼生「おう、じゃあまた明日な。」

：：明日から楽しくなりそうだな。だがしかし1つだけ不安なことがある。それは、

ポピパの主催ライブどうしよう

でもやつぱり・・・

六花Side

今日久しぶりに岐阜県で友達だつた蒼生君に再開できた。まさか学校まで同じとは思つてなかつたけど、とても嬉しい。その・・・蒼生さんは私の憧れの人だから//

つてなんか恥ずかしくなつてきちゃつた。でも・・・

蒼生・六花「明日から、楽しみだな。」

# 青薔薇の覚悟と現れる壁

友希那「出演バンドの時間の振り分けとチケットノルマはこれくらいかしら?」

蒼生「そうですね。ただノルマがちょっと多くないですか?」

リサ「こここのライブハウスの人がこのくらいは入れてほしいってさー。まあそこはアタシに任せといて☆」

今俺はR o s e l i aの主催ライブの打ち合わせをしている。  
と言つてもほとんどは決まつてしているので、今は確認と段取りを確認しているだけだ  
が。

蒼生「じゃあお客様の確保は今井さんにお願いします。氷川さんと俺で出演バンド  
に時間を伝えます。後の3人で今の条件でいいかライブハウスの人々に確認を取つて下  
さい。」

リサ「オッケー、じゃあ早速言つてくるね。」

友希那「じゃあ行くわよ。燐子、あこ。」

燐子・あこ「はい!」

蒼生「じゃあ俺たちも動きましょうか?」

紗夜「そうですね。では神風さんはこのバンドをお願いします。」

蒼生「了解です。」

～30分後～

リサ「ただいま。今大体半分くらいの人数が誘えたよ。」

蒼生「早!？」

どんな交渉したんだ?まあ早く集まるに越したことはないから良いけど。

友希那「私も戻ったわ。これで大丈夫だそうよ。」

紗夜「分かりました。こちらも全バンドに確認と了承を頂きました。」

蒼生「よし、とりあえず今日はここまですれば大丈夫だろ。まだ少し時間もあるし

セットリストの曲一回通して解散かな?」

「「「「はい!（ええ）」」」

そして各々帰宅し、俺も帰路を辿つて、花咲川女子学園の前を通ると見知つた連中が  
出てきた。

香澄「あ!蒼生だ!やつほー。」

蒼生「ポピパじyan。今から帰宅?」

沙綾「うん。主催ライブの事とか色々相談してたらおそくなっちゃつて。」

あんなに唐突な主催ライブ宣言だったからな。R o s e l i aよりも準備する時間

は少なくなるだろしな。

まあそこは自分で撒いた種だし、俺もサポートはするつもりだが出来るだけ自分達でやつてほしい。

比べる訳ではないが Roseilia も殆どは自分達でやつてたわけだし。  
りみ「そういえば、明後日に Roseiliaさんの所に主催ライブでられるかお願  
いしに行くことになつたんだけど。」

蒼生「・・・え？」

有咲「あー、ほら、まだ私達主催ライブのイメージもできてないし、気合でやるつて  
言つたみたいなものだからな。そしたら燐子先輩が出てみないか? つて誘つてくれ  
さ。」

なるほど白金さんが出演枠を増やせるかどうか相談してたがそういう事だつたのか。

蒼生「そうだな。イメージを掴むのは大事だしな。まあ湊さんも分かつてくれるとは  
思うけど真剣にな?」

香澄「うん！」

全く元気と気合ならどのバンドにも負けてないんだがもうちよつと後先考えて行動  
してほしいな。

（2日後）

香澄 「よろしくお願ひします！」

りみ 「お願ひします！」

有咲 「し、します！」

そして一昨日の言葉どおりポピパの3人がR o s e l i a に出演許可をもらいに来た。

リサ 「元気いいねー。」

燐子 「友希那さん。どうでしようか？」

あこ 「あこは大賛成ですよ！ 友達と一緒にの方がたのしいし。」

友希那 「あこ、遊びじゃないのよ。貴女達も、R o s e l i a のライブに半端な熱はないらしい。覚悟はできる？」

「「「はい!!」」

友希那 「なら、決まりね。p o p p i n , p a r t y に正式に出演をお願いします。

引き受けてくれる？」

「「「はい！」」

蒼生 「以外にあつさりしてましたけどいいんですか？」

友希那 「ええ、p o p p i n , p a r t y は決して技術は高くないけれど・・・」

リサ 「けれど？」

そこまで言い湊さんは着席して黙つてしまつた。あとは察せと言うことなんだろう。  
とここで違うところから声が聞こえた。

まりな「ちよつと！なんでCIRCLEじやないの？うちでも主催やつてよ。」

友希那「さ、練習に行くわよ」

なんと、華麗なスルー。Rosseliaどころかポピパも完全スルーだし。

・・・後でフオローしとくか。

友希那「蒼生も行くわよ。最後の仕上げをするから。」

蒼生「分かりました。まりなさんもポピパもまた後で。」

（数日後）

今日はとうとうRosseliaの主催ライブの日だ。昨日から徹夜で会場の準備を  
進めていた。

そして一区切りついたところで全員で楽屋に休憩に入る。

リサ「後は音チェックと出演バンドの挨拶くらい？」

紗夜「そうですね。もう少し休憩していくも・・ふわあ・・良いと思います。」

蒼生「皆さんお疲れでしょう？少し寝てもいいですよ？」

なんせあの氷川さんが欠伸をしてしまうくらいだ。みんなの疲労もかなりのものだ

ろう。

蒼生「つてあれ？」

誰からも返事が帰つて来ない。見てみると既に皆撃沈（熟睡）していた。つてあれ？俺もなんか・・意識が・・

結局20分後に来たポピパに助けられて、俺を含めた全員目を覚ました。

リサ「やっぱー。普通に意識失つてたわー」

沙綾「もしかして今日も寝てないんですか？」

蒼生「まあ仕方ないんだけどね。」

紗夜「ライブ当日のセットティングもこちらがする約束で会場費を安くしてもらつていますので、仕方ないことですが。」

友希那「恥ずかしいところを見せたわね。」

その瞬間どこからか着メロが聞こえた

リサ「もしもし？はい、今日はお世話になります。」

どうやら今井さんだつたらしい。

リサ「え？入り口？はいはーい、今外出ますねー。」

蒼生「俺もちよつと外の空気吸つてくるー。」

そして外に出るとロックがコチラに向かつてきていた。

蒼生「ロツクじやん。ライブ見に来たのか?」

六花「はい。ポピパさんが取り置きしてくれて。」

蒼生「なるほどね。そつちの娘は友達?」

明日香「戸山明日香です。」

戸山?もしかして・・・

蒼生「君、もしかして?」

明日香「はい、戸山香澄の妹です。」

なるほど。言われてみれば顔も似てるな。見た感じこの娘の方がお姉ちゃんっぽいけどな。

蒼生「そつか。まあ楽しんでいつてくれよ。どのバンドもいい感じに仕上がってるはずだからさ。」

なにせあのR o s e l i aが主催するライブに来るのだ。半端なバンドは絶対來たりしないだろう。

六花「分かりました。それではまた後で。」

蒼生「ああ、またな。つて俺もそろそろ戻らなきやな。」

戻つたら丁度R o s e l i aがステージの最終チェックを終えて開場の準備をしているところだった。

蒼生「湊さん。後はやつておきますからR o s e l i aの最終準備をしてて下さい。」

友希那「分かつたわ。皆、行くわよ。」

そして開場時間になり、山ほどの人がこのライブハウスに詰め込まれた。

俺は舞台袖からライブを見ている。主にギターを聞くためだ。参考になるところは参考にしている。そうしている内にポピパの出番になつた。G a l a x yの時より完成度の高いH a p p y H a p p y P a r t y! だった。

ポピパの出番も終わり、裏で労いの言葉をかけていると、不意にステージが暗くなり観客席がざわつき始めた。

R o s e l i aの出番が来たようだ。メンバー紹介するだけでボルテージが上がつていくのが分かる。そしてB L A C K S H O U Tのイントロが聞こえると歓声は更に大きくなる。

R o s e l i aも今出来る完璧な具合に仕上がつている。

そして全ての演奏を終えると今日一番の歓声がステージに響き渡る。そして横にいたポピパは全員驚愕の表情を浮かべていた。

R o s e l i aのメンバーを労いながら楽屋に戻ると、ポピパのメンバーが駆け寄つて來た。

友希那「お疲れ様、今日は助かつたわ。」

紗夜「R o s e l i a のライブは参考になりましたか？」

香澄「はい！」

戸山らしい返事だつた。だがすぐにしゅんとなつて

香澄「でも同じ事出来るかなつて・・・」

蒼生・友希那「同じこと？」

思わず俺も呟いてしまつた。この考え方は・・・

香澄「でも、絶対ライブします。いつか、R o s e l i a の皆さんみたいに。」

友希那「・・・その努力に意味はあるの？」

香澄「え？」

他のメンバーも同様驚いている。だがしかしこれに関しては俺も同意見だ。

友希那「p o p p i n , p a r t y 。貴女達、主催ライブをする覚悟が足りていな  
い。」

蒼生「ちよつとつけ加えさせてもらうと、メンタル的な面でも、気持ちの整理もまだ  
足りてないものはある。」

「「「「・・・」」」

その言葉を聞きポピパメンバーは押し黙つてしまつた。

友希那「ところで蒼生、今日のライブはどうだったかしら？」

蒼生「それよりも今は帰宅準備をした方が良いと思います。時間も押してますし、移動しながらでもアドバイスはできますから。ボビパも急いだほうがいいぞ？」

香澄「は、はい。」

友希那「分かったわ。皆すぐに準備して頂戴。」

・・・確かに次の練習はボビパだつたよな。自分達に足りないものは自分達で見つけないといけない。でもまあ・・・ヒントくらいなら出してやるか。

俺みたいにならない様に。

# 蒼い風と朝の花は古郷では

蒼生「そうか、やっぱり・・・」

明日香「はい。お姉ちゃん家でも元気なくて。」

俺は今は昼食を取りながら明日香に Roseilia の主催ライブの後のポピパの様子を聞いていた。

偶々通りかかった明日香を呼び止め話を聞いているのだが、戸山はいつもの平常運転というわけではなさそうだ。他のメンバーも同様だろう。

ちなみになんで明日香は名前呼びかと言ふと姉と判別しづらいからだ。

蒼生「ありがとう。時間かけて悪かつたな。」

明日香「いえ、気にしないで下さい。それではまた。」

そして俺は明日香の背中を見送りながら他の事を考えていた。と言うのも主催ライブがあつた日のことである。

／＼主催ライブ後／＼

蒼生「・・・このくらいかな、今日は皆さんお疲れ様でした。とりあえず今日は家でゆっくり休んでください。」

リサ「なんか蒼生つて中学の先生みたいなこと言うんだね。」

あこ「わかるわかる。あこの去年の担任がそんな先生だつたもん。」

友希那「リサ、あこ、主催ライブが終わつたからと言つて氣を抜かないように。まだ

ここはR o s e l i aが通る通過点に過ぎないのよ。」

蒼生「まあまあ今日くらい良いじやないですか。」

紗夜「でもまた明日から、サボつてる暇はありませんからね。」

リサ「わかつてるつて☆」

あこ「あ、あこだつて明日からまたちやんとやりますよ。ね！りんりん。」

燐子「そ、そうだね。」

友希那「じゃあ明日はC I R C L Eに5時集合でいいわね？」

「「「「はい！（うん！）」」」

蒼生「でも無理だけはしないで下さいよ。今朝の楽屋みたいな状態はシャレになりませんからね。」

そんなこと言つてもきっとR o s e l i aは無理をしてでも頂点を目指そうとするだろう。

しかしメリハリはついているので誰かが活動限界になつたり嫌気が刺すなんてこともないだろう。

・・・このバンドなら本当に頂点を取れるかもな。

なんてことを考えていると、不意に前から声がした。

?? 「湊 友希那さん、ですね？」

そこに立っていたのは赤毛の小柄な少女だつた。

友希那「誰？」

チユチユ「フフ、始めて。私はプロデューサーのチユチユと申します。」

友希那「プロデューサー？」

蒼生「つまりあなたはこのRoseliaをスカウトしに來たと？」

チユチユ「貴方は？」

蒼生「俺はRoseliaのサポートーをやつている神風 蒼生という者だ。」

チユチユ「そうですか。それでは貴方も一緒に来ませんか？ Roseliaの手伝いをしているという事は貴方も腕が立つのではないか？」

確かにギターには自信がある。だがしかし、

友希那「待つて頂戴。私達は貴女について行くとは言つてないわよ。」

チユチユ「え？」

友希那「おそらく蒼生も同じのはずよ。」

蒼生「そうだ。確かにギターには多少の自信はあるが、俺がサポートをしているのは

Roseliaだけじゃない。1つのバンドの都合で動くわけにはいかない。」

チユチユ「・・・んでよ。」

ん?なんて言つたんだ?

チユチユ「なんでよ! Roseliaも貴方も私のプロデュースでPerfectな  
バンドになれるのよ!」

友希那「それでも私達にはプロデューサーは必要ないわ。皆、行くわよ」

チユチユ「ちょ、ちょっと待つてよ〜〜」

「現在」

そんな事があつたのだ。多分しばらくは俺やRoseliaに付きまとつてくるだ  
ろう。

まあ湊さんは何度も言い寄られたからといって折れるような人じやないから大丈夫  
だろう。

それより今はポピパだ。主催ライブをすると宣言したままゲッソリされても困る。

・・・どうするべきか。やっぱり自分達らしさが大事なのを気付かせなければ行かな  
いのだが。

いや、待てよ。あいつが行けば・・・

「放課後」

俺はある人物を探して羽丘の中を探し回っていたそして校舎の出口でその人物の声が聞こえた。

リサ「先生にプリント出せた？」

友希那「ええ」

六花「し、失礼します。」

その声とほぼ同時にロツクが駆け込んできた。

蒼生「いで!?」

六花「きやあ！・・・いつてて、あれ、蒼生さん!?」

蒼生「よおロツク。怪我はないか？」

六花「は、はい何とか。そういうえば？蒼さんはなんでここに？」

蒼生「ああ、それはな・・・」

（数十分後）

今俺は市ヶ谷家の蔵の中にいる。そしてその後、戸山とロツクが遅れてきた。  
ポピパのメンバーはロツクを歓迎しているが肝心のロツクはガチガチに緊張している

た。

六花「はわわわわ」

沙綾「好きなパン食べていいよ？」

六花 「は、はい。」

りみ 「紗綾ちゃん家のパン美味しいよ?」

六花 「は、はい・・・」

有咲 「戸山さんの相手は大変だつたでしょ?」

六花 「い、いえ。光榮で・・・」

その瞬間、花園がロツクのシユシユを指さした。

六花 「きやあ!!」

たえ 「星!」

有咲 「おい、びっくりさせんな。」

すると今度は右方向からギターの音が聞こえてきた。

有咲 「うわあ!? びっくりさせんな!」

香澄 「えへへ〜」

どうやら戸山がランダムスターを弾いた音らしい。  
するとロツクが、

六花 「見てもいいですか?」

戸山のランダムスターを興味津々に見ていた。

香澄 「うん!」

六花 「わあ～。でらトキントキンだあ～。」

お？久しぶりに聞いた。ロツクのお国言葉。

香澄 「トキントキン？」

有咲 「つてなんだあ？」

りみ 「もしかして名古屋の人？」

六花 「あ、岐阜です。」

たえ 「岐阜つて真ん中にあるよね。」

六花 「え？」

蒼生 「真ん中？」

都道府県の位置的な話？

有咲 「気にしなくていいぞ。」

沙綾 「いつ来たの？」

六花 「今年の3月です。」

りみ 「家族と離れて寂しくない？」

六花 「偶に寂しいけど電話するので大丈夫です。それに、蒼生さんもいますし。」

蒼生 「まあ俺に関しては偶々だけどな。」

沙綾 「蒼生も両親と離れて來たの？」

蒼生「俺は親の仕事の都合でよく引っ越すんだよ。岐阜にも、元々住んでたんじやなくて引っ越してきたんだ。まあ多分今回が最後になるけどな。」

有咲「え? なんでだ?」

蒼生「うちの父さんもバンドやつてて、あちこち飛んでつてたんだけど、今年外国に出てさ。それで母さんがもうちよつと安定した職に付かなかきやいけなくなつて、それがこの地域で見つかつたんだ。」

香澄「蒼生もバンド組んでたの?」

蒼生「!? それは・・・」

六花「蒼生さん、無理して言わなくてても。」

蒼生「いや、大丈夫だ。・・・バンドは組んでたよ。『W i l d B a b y』って言うんだけどな、俺はギター&ボーカルやつてたよ。全員で4人のバンドで仲も良かつた。それなりに大きい大会にも出てたりしてた。でも俺が引っ越す前にメンバー内で喧嘩しちやつてさ。理由は・・・主催ライブが原因だった。」

「「「「?」」」」

蒼生「主催ライブを開くつて決めてから皆、勿論俺も含めてそりやあ皆で来る日も準備に明け暮れたさ。でもな、主催ライブの一日前にバンド内で緊張からか喧嘩になつてしまつてな。主催ライブは結果から言えば失敗だつたよ。そこからはもうメンバーとは

一回も話してないな。」

沙綾 「そんな事が・・・」

蒼生 「だからな、俺はポピパには同じ思いをしてほしくないんだよ。」

香澄 「なんか、変な事聞いてごめんね？」

蒼生 「良いよ良いよ、過去の話だしさ。ほら、それよりロックには何も聞かないでいいのか？」

香澄 「そうだね。六花ちゃんはどうしてこつち来たの？」

六花 「それは、去年の夏にSPACEのラストライブを見に来たんです。私も地元の友達とバンド組んでたんですけど、高校受験でできなくなってしまって。悩んでいた時に閉店するつて知つて、今行かないと絶対後悔するつて思つて親に内緒で見に来たんです。」

「「「「え?」」」

六花 「ステージの上の皆さん、楽しそうで。やつぱり、バンドやりたいって思いました。聖地は無くなつても、きつとここなら見つかるつて。」

沙綾 「旭湯さんから通うなら花女の方が近い気がするけど。」

六花 「親に迷惑かけないように特待生制度のある羽丘にしたんです。」

香澄 「特待生！」

六花「人生で1番勉強しました。」

こいつらには言わないが実は俺も特待生だつたりする。

有咲「んで、住み込みしながらライブハウスでバイトもして、バンドメンバーも探し  
てる。」

沙綾「ロツクだね！」

りみ「あ！だからもしかして蒼生くんが六花ちゃんをロツクって呼ぶのつて？」

六花「はい！地元でのあだ名がロツクでした。」

たえ「ロツクはなんでG a l a x yでバイトしてるの？」

蒼生「そういうやそれは俺も気になつてたな。」

有咲「確かに、わざわざあんなきつそくなどこ・・」

六花「あはは・・どんなところかなつて入つてみたら店長さんが1人ですごく大変そ  
うで、つい、手伝いますつて。」

蒼生「ロツクらしいな。」

六花「でも、いきなりリニューアルオープんライブの出演バンドさんを探すことに  
なつてしまつて、バンドやつてる友達いなかつたし、色々なスタジオやライブハウスに  
行つても声掛けられなくて。そうしたら、先輩達を見つけて。また、ポピパさんに助け  
てもらいました。久しぶりにポピパさんのライブ見たらやつぱりキラキラで、夢じやな

かつたつて感動して、ポピパさんがまたライブするつて聞いたときは夢見たいつて思いました。こつち来て色々難しいこともいっぱいですが、来てよかったです。本当にあります。」

すると花園があの曲の1小節を弾いていた。  
たえ「ピツタリの曲あつた。」

するとポピパは俺とロツクを残し全員前に出ると。

香澄「キラキラだとか夢だとか、sing girls」

そしてロツクのためのライブが始まつた。いや正確にはライブとは言えないかもしないがそれでもロツクは、楽しそうに聞いている。

そしてサビ前のカウンタダウンの所、この曲で1番盛り上がる所だろう。俺自分自身のテンションが上がつてゐるのがわかる。そして2番に入るところで、ふとロツクを見るとどこか遠くを見ているような目をしていた。まるで昔のことを考えているような。そんなことを考えてたら俺も少しずつ昔の記憶が蘇つてきた。

# 捨てたい過去と捨てられない過去

（一年前）

蒼生 「悪い、遅れた。」

蓮 「遅えぞ、全く。」

天音 「それより、急がないと練習時間なくなりますよ！」

海斗 「そうだな。よし、じゃあ入るぞ。」

今日は Wild Baby の練習日だった。

ギター＆ボーカル 神風 蒼生

ベース 神代 蓮

キーボード 神代 天音

ドラム 瞳 海斗

の四人で結成されたバンドだつた。ちなみに蓮と天音は兄妹である。

蒼生 「すいませーん。予約していた Wild Baby ですけど？」

スタッフ 「はい。では3番の部屋をお使いください。」

蒼生 「ありがとうございます。じゃあ行くぞ！」

海斗「おいおい、遅刻したのはお前だからな?」

蒼生「分かつてるつて。でも大事なのは量より質だぜ?」

天音「蒼生さん分かつてませんよね?」

蓮「まあいつものことだがな。」

そんな他愛のない話をしているともう部屋に付いた。

蒼生「もう主催ライブも近いからな。細かく調整してこうぜ。」

「「おう! (はい!)」」

その返事で皆の気合が入るのを感じる。いい傾向だ。

このメンバーなら主催ライブも想像以上の結果を残せるだろう。

この時はそう思っていたのに・・・

♪3時間後♪

蓮「うし! 今日はこのあたりにしどくか。」

海斗「了解。そうだ、蒼生ちよつとここが気になつたんだが。」

蒼生「ん? 何処だ?」

天音「兄さん。私もここが分からなくて・・・」

蓮「ん? どれどれ?」

そして各々の確認に入る。時間になりライブハウスを出ると、全員でファミレスに行

くことになつた。

蒼生「じゃあドリンクバー4つとベーコンピザとミ○ノ風ドリアを2つ、ターメ○ツクハヤシライスを2つお願ひします。」

店員「かしこまりました。ごゆつくりどうぞ。」

そして各々飲み物を取りに行くと主催ライブの話になつた。

蓮「やつぱりサイ○リヤだよなー。ところでセツトリストの事なんだけさ。」

海斗「ああ、どんなのにしたんだ?」

天音「最初から最後まで激しい感じで行きます。」

蒼生「そうだな。トリだし1番客も熱くなつてるだろうからいいんじやないか?」

天音「後は海斗さんの体力が持てばいいんですけど?」

海斗「それは大丈夫だ。常に家でドラム練習してるし。2時間くらい休憩無しで。」

蓮「それはそれで心配だが本人がいいならいいだろう。」

蒼生「後1週間くらいだからな。気を引き締めていくぞ!!」

「主催ライブ前日」

蓮「海斗。今少しズレたぞもう少しゆつくり。」

海斗「わ、悪い。」

蒼生 「天音。今音外しただろ。」

天音 「す、すいません。前日なのに・・・」

蒼生 「いや、大丈夫だ。・・・皆！少し休憩にするか！」

天音 「す、すいません・・・」

蒼生 「いや、気にするな。焦つたところで結果は変わらないからな。それよりも今は落ち着いて切り替えることの方が大事だ。」

海斗 「本当、すまないな蒼生。お前も緊張してる筈なのに・・・」

蒼生 「気にするなってそれよりさ・・・」

蓮 「・・・なあ、もうそんな悠長な事言つてる場合じゃないんじやないか？」

蒼生 「どういう事だ？」

蓮 「ライブは明日だぞ？それに明日のライブはただ主催ライブをやるつてだけじゃない。お前のW i l d B a b yとしてのラストライブなんだぞ？」

蒼生 「分かつてるよ。だからこそだよ。確かに今日は主催ライブ前日だが、さつきも言つたように緊張や焦りで結果は良くなるわけじやないだろ？」

蓮 「そうかもしれないけどさ！明日なんだぞ！お前このままの中途半端な演奏で良いつて思つてんのか！」

蒼生 「そ者は言つてないだろ！ただ落ち着いていこうつてだけの話をしているとじや

ないか！」

天音「ち、ちょっと2人共やめてください！」

海斗「そうだよ。俺が言えることじや無いのかもしれないけど今はそんなことで喧嘩してる場合じゃないだろ！」

そこからの空気は最悪だつた。こんな空気で質の良い練習もできるはずもなく、解散となつた。

翌日の主催ライブ、決して盛り上がらなかつたわけではないのだがまるで、1つ1つの音が孤立している感じで全くまとまりを感じられなかつた。

そしてその日から俺は引つ越す日まで彼らの顔はいちども見ることはなかつた。  
「現在」

そして今ちょうどポピパの演奏が終わつた。

・・・ちょっと過去を考えすぎたかな？なんて思つていながらロツクの方を見たら静かに涙を流していた。

六花「す、すみません。色々、思い出しちやつて。」

香澄「わあ！ごめん。大丈夫？」

全くロツクらしいな、なんて思いながら微笑んで居ると、

香澄「あれ？なんで蒼生も泣いてるの？」

蒼生「え？」

手を自分の頬に触れさせると確かに水滴が付いた。無意識のうちに昔のことを思い出して泣いてしまったのだろうか？

蒼生「わ、悪い。俺も、その、昔組んでたバンドの事思い出しちゃってさ。もう大丈夫だから心配するな。」

六花「私ももう大丈夫です。・・・私、諦めません！私もバンド組んでライブします！いつかポピパさんと同じSTAGEに立ちたいです。」

香澄「うん。私もライブしたい。」

たえ「私も。まだ足りないけど、届くってわかつたから。」

有咲「はあ、腹くくるかあ。」

りみ「私も怖いけど、頑張る！」

沙綾「香澄。あんなに凄い主催ライブは簡単に出来ないよ？真似出来ないし、真似しないでいいと思う。・・・主催ライブやろう！」

香澄「うん！やる~~~~~」

有咲「だあ、まだやるつて事しか決まってないからな！」

・・・良かつた。上手く行つたみたいだな。

（放課後）

六花 「そういえば、蒼生さんはなんでここに？」

蒼生 「ああ、それはなちよつとロツクに用があつてな。」

六花 「私ですか？」

蒼生 「実はな放課後下校するときにこのへんによつて欲しいんだけど。」

六花 「いいですけど・・・なんですか？」

蒼生 「お前なら教えてあげられるからだよ。」

六花 「??分かりました。よく分からぬいけど行つてみます。」

いやいやどつちだよつて言いたくなつたがややこしい言い方をしたのは俺だしあえてツツコまない事にした。

これでポピパが気づけばいいんだけど。

(現在)

俺は今六花と2人で帰宅している。

蒼生 「ポピパのライブはどうだつた？」

六花 「はい！やつぱりいつ聞いてもキラキラしてて、最高でした。蒼生さんが放課後

にお願いしたのつてポピパさんに合わせる為だつたんですか？」

蒼生 「・・・まあそんなところだ。」

半分違うがそこは言わぬが仏だろう。

六花「・・・あの、ちょっと失礼なことをお聞きしますけど。」

蒼生「ん?なんだ?」

六花「もし蒼生さんはもう一度Wild Babyとしてライブ出来ると言われたらやりたいですか?」

蒼生「・・・そうだな。あのライブは未練たらたらで終わっちゃつたからな。1回だけ、贅沢を言わせてもらうとやりたいって思うよ。」

六花「そうですか。ありがとうございます。答えてください質問を答えていただいて。」

蒼生「気にしなくて良いよ。もしもの話だろ?」

そしてその後は一切この話題に触れることなく他愛のない話をしながら帰宅した。

六花「じゃあ私、ここなので。」

蒼生「そうか。銭湯で住み込みしてるんだつたな。今度客として来よつかな?」

六花「お、お待ちしています!」

蒼生「はは、ああ楽しみにしてるよ。じゃあね。」

六花「はい、また明日。」

Wild Babyか。・・・今頃あいつらどうしてるかなあ?

今日私は蒼生さんにポピパの演奏を聞かせてもらつた。それを聞いて私は今一度バ  
ンドを組むという覚悟を決めたのだ。  
だがそれとは別にもう1つ決めたことがある。

六花 「またお金ためないかんでなあ！」

# 六花とロックなデート？

今日突如弦巻からハロハピ×俺に集合がかけられた。

どうもポピパが主催ライブをすると決めてから困つていて笑顔じゃないから、笑顔にしよう。という理由でライブをするらしい。

「じゃあ香澄達を笑顔にするライブを開くわよ！」

はぐみ「かーくん、家のコロッケ大好きだよ？」

薰「兎を連れて行くのはどうだろう。たえちゃんは兎が好きなんだろ？」

はぐみ「あのね！おたえ、モーテインが好きなんだって！」

花音「それも兎かな？」

はぐみ「わかんないけど！」

いや分からないうなよ！

ちなみにモーテインとはギタリストの中では有名なギタリストだが、知らない人も少ない訳ではないだろう。

ミツシエル「えっと、花園さんだけじゃなくてポピパの皆を笑顔にしないと。」

花音「チョココロネを持つていつたらどうかな？りみちゃん好きでしょ？」

「こころ」「もう書いたわ。」

はぐみ「さつすがこころん！」

蒼生「チョココロネ!?あの二重に三角形が書いてあるやつが?!」

ミツシエル「神風さん。いつもの事だよ・・・」

蒼生「いつもなんだ・・・奥沢も苦労してるな。」

ミツシエル「全くだよ。それよりライブに話を戻さないと。」

「こころ」「皆の意見はわかつたわ。」

そしてホワイトボードに何やら書き込んで、

「こころ」「こういうことね！」

薰「つまり、そういう事か。」

はぐみ「そつかー！」

花音「そう、なのかな？」

いや、どうなんだよ！今弦巻はホワイトボードに羽みたいなやつと三日月みたいな何

かを書いただけだぞ？！

ミツシエル「つて、どうやってまとめればいいんだよお。」

「こりやあ奥沢も苦労するな。まあ落とし込めちやう奥沢も奥沢だけどな・・・

「ころ 「香澄は飛びたいって言つてたわ。」

蒼生「なるほど、それで羽と三日月か。まあステージ上で宙吊りになつて飛ぶ演出は偶に見るし変ではないと思うけど。」

薰「翼よ、あれがパリの灯りだ！ん？」

急に瀬田産の顔色が悪くなつたがどうしたんだ？

薰「つまり、飛ぶのかい・・・」

「ころ 「飛ぶなら、空がいっぱい広がつてる方がいいでしょ？あたし達、空を飛ぶの！」

薰「すまないが、もう1回言つてくれないか？」

そしてさつきより若干大きな声で、

心「あたし達、空を飛ぶの!!」

薰「シエイクスピア曰く、私の勘が当たつてしまつた！」

蒼生「あのーもしかして瀬田さんつて？」

花音「うん高所恐怖症で高いところが・・・」

蒼生「なんかベタだけど、本当にこのライブをやるとしたら致命的じゃないか？」

「ころ 「香澄はやりたいのよ！」

はぐみ「そうだよ。かーくんの笑顔のために飛ぼう！」

ミツシエル「熊には、熊危うきに近寄らずつて言葉があつてね。」

おい、なんか間違つてるぞそれ。

薰「熊に追われて退場、儻い▣」

蒼生「瀬田さん、それなんかもうわけが分からなくなるので、一旦落ち着きましよう？」

はぐみ「楽しそうだね！」

花音「小さい羽なら演奏の邪魔にならないよね！」

蒼生「え？ 松原さんも乗り気？」

花音「うん！ 頑張る！」

ミツシエル・蒼生「〔え――――!?〕

こころ「やれば分かるわ。出来ない事なんてないのよ！」

いやいや、大体貴女お金様の力で何とかなさるおつもりですよね？

薰「そ、そうだよこころ。シェイクスピア曰く、何もしなければ何も起こらない。つまり、そういう事さ。」

瀬田さんが立ち直つたようで何よりだがこのライブ、どうなるんだ・・・

蒼生「じゃあ俺はもう行くぞ。奥沢さん、今日のこと出来るだけこれにまとめといたんで後で参考にして？」

ミツシェル「あー、ありがとう。いつもまとめるのに時間使うからさ・・・」  
と言つてもほぼ後半のことしか書いてないが、話し合いの内容的にしようがないだろ  
う。

「今日はありがとう！とつても助かつたわ！」

はぐみ「またねーあつくん。」

薰「それじやあまた会おう。」

花音「い、いつもごめんね？」

ミツシェル「ホント、お世話になります・・・」

松原さんと奥沢はずつと苦労していきそعدان。なんだかんだ本人達が楽しそうだ  
から良いけど。

じやあ俺も家に帰るか。

六花Side

今日蒼生さんに会おうと思つて家に行つてみたけど居なかつた。サポーターの仕事  
が忙しいのかな？

はあ・・・今日こそはあの事を言うつて決意してきたのに。

六花「はあ・・・」

蒼生「ため息なんかついてどうしたんだ？」

六花 「うわあああ！」

蒼生 「S i d e o u t」

蒼生 「ちょっと大袈裟すぎない？」

家に戻ると玄関前にロツクが居たので声をかけたがなぜかびっくりされてしまつた。

六花 「な、なんでここに!?」

蒼生 「俺ん家だから。つてかいくらなんでも慌て過ぎ。ほら、深呼吸して？」

六花 「すう、はあ・・・はい。もう大丈夫です。」

蒼生 「なら良いんだけど。そう言うロツクこそなんで俺の家の前に？」

六花 「あ、あの、その・・・蒼生さんに用があつて。」

蒼生 「ああ全然いいけど。上がつてくれ？」

六花 「え？ い、いえ、大丈夫です。あのどちらかというとすこし歩きながらの方が多い気がします。」

蒼生 「気がしますって・・・まあいや。じゃあ行こつか。」

つて待てよ。男女2人でお出かけ・・・

これつて俗に言うデートつてやつなのか!?

蒼生 「／／／」

六花 「どうかしました？」

蒼生「いや、ちょっと暑くてさ。大丈夫だ。」

六花「はい、なら良いんですけど。」

・・・あんまり意識しない方が良いかもな。ただでさえデートなのに相手はロックだからな。あたふたしてると変な心配されちゃうからな。

蒼生「んでどこ行くんだ?」

六花「細かい行き先は決めてないんですけど、商店街の方に行こうと思つてます。」

蒼生「分かった。寄りたい所があつたら行つてくれ。」

♪15分後♪

蒼生「じゃあ紅茶とチーズケーキを。」

六花「私はカフェオレとモンブランをお願いします。」

つぐみ「はい、かしこまりました。」

今俺達は羽沢珈琲店に来ている。Afterglowの羽沢の父さんが経営しているらしく、羽沢も手伝いをしてるそうだ。

蒼生「そういえばロックとこうやつて2人でゆっくり話す時間つて向こうでも無かつたよな。」

六花「はい。基本ギター練習か、ちょっと世間話するくらいでしたね。」

蒼生「まあそれはそれで楽しかったけどな。」

六花 「でも、こうしてゆつくりする時間も欲しかったので。」

蒼生 「だから外に誘つてくれたのか？」

六花 「え？ あ、はい。」

ん？ なんか今視線がズレなかつか？ 気のせいいか。

つぐみ 「お待たせいました。」

蒼生 「ああ、ありがとう。」

つぐみ 「そういえばこの前蘭ちゃんか言つてましたよ。『蒼生の方にギターの音、悔しいけど凄かった。出来るならもう1回、いや何回でも聞いて技を盗みたい』って」

蒼生 「そうか。じゃあ今度のAfterglowの練習の時はギター持つてけばいいか？」

つぐみ 「うん。お願ひね。」

そして羽沢は接客に戻つた。

蒼生 「つと、ごめんな。ひとりぼっちにして。」

六花 「いえ、大丈夫です・・・」

ちよつと元気がない。ちよつとまずかつたかな？

蒼生 「ロツク。俺のチーズケーキちよつと食べる？」

六花 「え？ でもそれは蒼生さんが・・・」

蒼生「ひとりぼっちにしちやつたしらせめてものお詫びつて事で。」

そして半ば強引にロックの皿の上に乗せる。

六花「あ、ありがとうございます！」

蒼生「良いって良いって。お詫びなんだからさ。」

そしてロックは美味しそうにモンブランとチーズケーキを頬張つていた。

六花「どうかしました？」

蒼生「いや、可愛いなつておもつて。」

六花「え？」

蒼生「え？」

やばい。自爆してしまった。自分の体温が急上昇しているのがわかる。ロックを見ると、おなじく茹でだこの如く真赤になつていた。

蒼生「い、いや今のはそう言う意味じゃなくてなんていうか、その・・・」

六花「い、いえ。気にしていないので大丈夫です。」

蒼生「あ、ああ。悪い。」

ロックに変な氣を使わせてしまった。ちょっとだけ空気が変になるのを感じる。

蒼生「た、食べ終わつたか？」

六花「は、はい。」

蒼生「じゃあ俺会計済ませて来る。」

六花「い、いや私も払います。」

蒼生「気にしなくていいよ。こういう時は男が払うつて相場が決まってるんだよ。」

六花「・・・ごちそうさまです。」

しばらく考えていたようだつたが、従うことにしてもらひ。

蒼生「次はどこ行く?」

六花「そうですね。次は・・・」

そこからの時間はあつという間だつた。スーパーに行つて晩御飯の食材を買つたり、肉屋さんに新米夫婦とからかわれ2人揃つて顔を真つ赤にしたり、山吹ベーカリーのパンに舌鼓を打つたりしてた。

そして、

蒼生「もう遅いしこの辺りでお開きにしようか?」

六花「あ、あの、最後に一つだけ寄りたい場所があるんですけど。」

（5分後）

六花「ここです。」

蒼生「公園?」

ロツクに連れてこられたのは小さな公園だつた。

蒼生「なんで公園なんだ?」

六花「ちょっと憧れてて。」

そう言つてロツクは歩き始めた。そしてブランコに腰をかけると、

六花「蒼生さんも。」

と言うので隣のブランコに腰をかける。

蒼生「なるほど。確かにちょっと良いかもな。」

六花「ですよね。・・・あの蒼生さん、少しお話しても良いですか?」

蒼生「話?全然良いけど?」

六花「ありがとうございます。・・・蒼生さんは私達が初めて会つた日のことを覚えてますか?」

蒼生「ああ。ライブでの共演だよな。」

六花「はい。お互いの音に惹かれて、ギターの話をよくするようになつて、それ以外の話もするようになつて、そうしているうちに蒼生さんの音だけじやくて蒼生さん自身に惹かれているのに気がついたんです。」

蒼生「え?」

今、なんて言つたんだ?

六花「ただ話してるだけで楽しくて。誰にでも優しくて、ギターも上手で・・・えつ

と、その、

そしてひと呼吸おいて何かを決意した顔になつて、

六花「す、好きです！」

蒼生「!!」

六花「蒼生さんのこと、ずっと好きでした。」

蒼生「・・・」

六花「・・・蒼生さん？」

蒼生「ロツク。」

六花「は、はい。」

蒼生「俺、最初な。こんな小柄な娘があんな力強くて痺れる演奏ができる、そのギヤップとギターの腕に惹かれた。でもな色々話して朝日六花という人を知つていく度胸にある違和感が訪れたんだ。」

六花「違和感？」

蒼生「俺も、最初は気のせいだとおもつてた。でも徐々に確信していくつたよ。この気

持ちは・・・恋なんだつて。」

六花「え？」

蒼生「俺、俺はな、ロツク、いや朝日六花、お前の事が好きだ！」

六花「・・・うつ」

蒼生「ロック!? なんで泣いて・・・」

六花「ごめんなさい、嬉しくて。ずっと両思いだつたんですね。」

蒼生「ああそうだな。・・・なあロック。その、なんだ。俺と付き合つてくれないか？」

そしてロックは涙を拭いて満面の笑みで

六花「はい！」

そうして六花は目を閉じて背伸びをしてきた。

蒼生「ろ、ロック!? ・・・良いのか？」

無言で頷く。そして俺は少し屈んでロックの唇に意識が吸い寄せられる。

そして夕日が移す二人の陰が1つになつた。

# 目の前の花は何よりも甘くて

俺は公園を出たあと、もう空は暗くなつていたので六花を家まで送る事にした。

蒼生 「ロツク。その、ごめんな。」

六花 「え？ どうしてですか？」

蒼生 「告白つてさ、男の方からするもんだろ？」

六花 「気にしないで下さい。私がしたかつただけなので。」

・・・いい娘過ぎるでしょこの娘。こんな娘に好かれるつて俺つて恵まれてるなう。

六花 「あの、蒼生さん。」

蒼生 「ん？ どうした？」

六花 「えつと、本当に私で良かつたんですか？」

蒼生 「どういう事だ？」

六花 「私から告白しておいて失礼ですけど、蒼生さんの周りには私よりも魅力的な

人が沢山いるじやないですか。それでも私で良いのかなつて。」

蒼生 「・・・はあ。」

六花 「あ、蒼生さん？」

蒼生「あのな、ロツク。さつきも言つたけど俺はロツクを好きになつたんだぞ? ロツクは他の奴らの方が魅力があるつて思つても俺にとつてはロツクが一番だぞ?」

六花「えへへ~」

蒼生「ロツク?」

なんかロツクが緩んだ顔で二ペヽつとしてるんだがどうしたんだろう?

六花「すいません。幸せで~」

蒼生「フフ、そうか。・・・ありがとな。」

六花「どうしてですか?」

蒼生「もし六花が告白してくれてなかつたら、今感じてる幸福感はお互い無かつただろからな。」

六花「じゃあ蒼生さんも幸せですか?」

蒼生「さつき言つただろ・・・ああ幸せだよ。あと、その。」

六花「??」

蒼生「す、好きだぞ。六花の事//」

六花「え? あ、えーと、その・・・わ、私もす、好きです//」

2人で初々しさ満点の会話をしているとロツクが住む旭湯に着いた。

蒼生「あ、着いちやつたな。」

六花「そ、そうですね・・・」

蒼生「・・・」

寂しいけど楽しい時間とは過ぎ去ってしまうものだそれにまた明日学校で会つて話せば良い。

蒼生「またな、ロツク。また明日。」

そう言つて別れを告げ自分の帰路に着こうとすると何かに袖を引っ張られた。見えてみるとロツクが俺の袖を掴んでいたのだ。

蒼生「ロツク?」

六花「・・・たくありません。」

蒼生「え?」

六花「離れたくありません!折角お互いの気持ちも分かつて、幸せで!だから、その・・・まだ蒼生さんと一緒に居たいです!」

蒼生「ロツク・・・」

・・・俺だつて一緒に居たい。まだこの幸せを噛みしめていたい。ロツクに言わせてばかりじや駄目だ。俺もなにか考えないと。

・・・そうだ!

蒼生「なあロツク?旭湯つて何時まで開いてる?」

六花 「え？あと1時間半くらいです。」

蒼生 「そうか。じゃあ風呂入つてから帰ろつかな。」

六花 「え？」

蒼生 「だから旭湯で風呂入つてくよ。良い？」

六花 「はい！」

ロツクの顔に笑顔が戻った。早めに風呂切り上げてロツクと話す時間増やさないと  
な。

六花 「叔母さん、戻りました。」

六花叔母 「お帰り六花ちゃん。そつちの人は？」

六花 「え、えっと・・・」

蒼生 「こんばんは。お風呂入らせにもらいに来たんですけど。」

六花叔母 「そうかい、ゆっくりしてくと良いよ。」

蒼生 「ありがとうございます。」

チラッとロツクを見るとホツとした顔をしていた。やっぱり恋人同士とは言いにく  
いのだろう。

六花 「ご案内します。」

蒼生 「ああ、ありがとうございます。」

（20分後）

蒼生「ふう、いい湯だつた。」

六花「蒼生さん、お風呂どうでしたか？」

蒼生「すげえいい湯だつたよ。また来よつかな。」

六花「本当ですか！ぜひ来てください！」

六花叔母「六花ちゃん嬉しそうだね。」

蒼生「どうも、とても良いお湯でした。」

六花叔母「ありがとね。またいつでも来なよ。所で六花ちゃんとはどういう関係？」

六花「え、あの、その//」

そんなに顔赤くしたらほほ答え言つてるようなものだ。

もう隠しようもないでの正直に言うことにした。

蒼生「その、六花さんはお付き合いさせて頂いてます。」

六花叔母「そうなのかい、六花ちゃん？」

六花「は、はい。」

六花叔母「そうかいそうかい。どうか六花ちゃんの事、大事にしてやつてね。」

蒼生「はい！」

六花叔母「ところで六花ちゃんとはどこまで行つたんだい？」

六花「な、何を聞いてるんですか!?」

蒼生「そうですよ、まだ付き合って間もないんですから。」

六花叔母「そうかい、六花ちゃん、ちゃんと親にも報告するんだよ?」

六花「わ、わかりました。」

六花叔母「そうだ、掃除は私がやつておくから彼氏さんを部屋に上げておやり。」

六花「え、でも・・・」

六花叔母「彼氏さんも居るんだし今日くらい良いよ。」

六花「あ、ありがとうございます。」

蒼生「ありがとうございます。」

そして俺はロックをに自室に案内してもらう。

六花「何もない所ですけど、どうぞ。」

蒼生「ありがとう。お邪魔します。」

そして俺はロックが用意してくれたクツシヨンに座る。

蒼生「ん? ロック座らないのか?」

六花「私は、その・・・ここに。」

そしてロックは俺の横に座ると、ん?俺の横?

蒼生「ロック?」

六花 「あの、駄目ですか？」

蒼生 「いや、ダメじゃないよ。ちょっとピツクリしただけ。」

六花 「ですか・・・あの、蒼生さん。」

蒼生 「何？」

六花 「ちょっとだけ甘えても良いですか？」

蒼生 「勿論だよ。おいで。」

するとロックは俺の腕に抱きついて頬ずりしてきた。

俺もロックの頭を撫でてやると、

六花 「はう！」

こんなの我慢できねえ！理性のリミッターが外れちまう。

六花 「でらたまらん！」

たまらんのは俺だよ！何この娘、抱きしめたくなるじやねえか。

六花 「キヤ！」

蒼生 「え？」

いつの間にか俺とロックは抱き合っていた。どうやら思つてた事が行動に無意識に  
出てしまつたらしい。

蒼生 「ごめん今離すから。」

するとロツクは俺の体に手を回して來た。

六花「もうちよつとだけ・・・駄目ですか？」

ゼロ距離＆上目遣いで聞いてくる。これで駄目つて言えるか？否、いないだろう。俺は肯定をする代わりに抱きしめる力を少し強くした。

六花「ん／＼えへへ。ありがとうございます♪」

蒼生「こちらこそ。・・・ロツク」

六花「はい？ つてええ！」

俺はロツクの顔に自分の顔を近づけた。わかりやすく言うとキスをしようとしていた。

六花も目を瞑りこちらに顔を近づけてくる。

そして後数ミリで距離がゼロになるという所で、

ブルルルルルル

蒼生・六花「うわあ！」

どうやら俺の電話が鳴つてしまつたらしい。母親が帰りが遅いから心配してかけ

てきたと思うのだが、空氣を読んでほしかつた・・・

とりあえず電話に出てもうすぐ帰る事だけ伝えると電話を切り、

蒼生「ごめんロツク、そろそろ時間が・・・」

六花 「そうですか・・・また明日学校で会いましょう。」

蒼生 「じゃあ、お邪魔しました。」

六花 「あ、ちょっと待つて下さい。」

蒼生 「どうし・・んん／＼／＼

突然口ツクに唇を唇で塞がれた。

六花 「あの、さつきは出来なかつたので・・・」

蒼生 「あ、ああ。ありがとう・・・お休み。」

六花 「はい。お休みなさい。」

そして家に帰つて就寝しようとしたが今日の濃過ぎる出来事に寝るのに1時間費やしたのであつた。

# 夢見るアイドルと蒼い風

今日はバスパレの練習日だ。バスパレの練習は、何回か見てるので最初の緊張は無くなつた。

全員揃うことは少ないが、一応全員との交流はある。ファンとしてはこれ以上嬉しいことはない。

ちなみに昨日まりなさんから連絡があり、バスパレが【WIFI】に出るとの報告が入つた。

規模としては結構大きなイベントの筈だ。バスパレとしてはここでは成功しておきたい所だろう。

そしてここで披露する曲はゆら・ゆらRing-Dong-Danceだ。彩さんと千聖さんのツインボーカル曲である。この曲は千聖さんがベースを弾きながら歌わなければならない。これはギター＆ボーカルをやっていたからわかる事だがかなり難しいことだ。

なので今は千聖さんにはベースだけやってもらい、千聖さんのパートは俺が歌つて彩さんに雰囲気を掴ませるようにしている。

蒼生「ふう、ちょっと休憩にしましようか。」

麻弥「はい。蒼生さんもお疲れ様です。」

千聖「ごめんなさいね、ほんとうは私が歌わないといけないのだけれど。」

蒼生「気にしないで下さい。今はベースの状態を上げることが最優先です。そういうえ  
ば日菜さん。最後の演奏、ちょっと走りがちでしたので気をつけてください。」

日菜「オツケー。それにしても蒼生くんの歌、るん♪ってくるよね♪。」

彩「うん。凄く合わせやすいし歌唱力も高いし。弾き語りしてたからかな?」

蒼生「多分そうだと思います。歌うこと自体は好きなので。」

ちなみにポピパ以外には俺が過去にバンドをしてた話はしていない。別に隠す気はない  
のだが、わざわざ言う事でもないので言わない事にした。

ふと千聖の方を見ると少し暗い表情をしていた。やはり、ボーカルの事も考えて  
いるのだろう。

蒼生「千聖さん、大丈夫ですよ。まだW.I.Fには時間があります。確実に仕上げてい  
きましょう。」

千聖「・・・ええ。」

千聖さん大丈夫かな? そういえばなぜ俺がバスパレのメンバーだけ名前呼びかとい  
うと、日菜さんが姉の方と紛らわしくなるから名前で良いの言つてくれたのだ。すると

他のみんなが日菜さんだけだと変だからとみんなが名前呼びを許可してくれた。

千聖「私、次の現場があるので先に失礼します。」

日菜「おつかれ～」

麻弥「お疲れ様です。」

彩「次の現場も頑張つてね。」

千聖「ええ、ありがとうございます。」

そう言つて千聖さんは次の現場へと向かつた。

蒼生「じゃあ俺達もそろそろ始めましょうか。」

「「「はい！」」」

～2時間後～

蒼生「今日はここまでですかね。お疲れ様でした。」

麻弥「お疲れ様でした。またよろしくお願ひします。」

日菜「またるん♪つてしようねー。」

イヴ「お待ちしています！」

蒼生「ありがとうございます・・・彩さん？」

彩「え？ な、何？」

蒼生「ボーッとしてましたけど大丈夫ですか？」

彩「う、うんちよつと考え方してただけだよ。」

蒼生「それなら良いんですけど。それじゃあ今日言つたところは各自自主練しておいてください。お疲れ様でした。」

そして俺はCIRCLEを出る。

蒼生「だいぶ汗かいたな。」

誰かと合わせて歌うことはバンド以来なので結構意識が多くて結構体力を使う。その為かなり汗ができるのだが・・・というのは口実で本当は、

～20分後～

六花「いらっしゃいませ。あ！蒼生さん」

蒼生「よおロツク。」

六花「結構汗かいてますね。またサポートーの仕事ですか？」

蒼生「ああ、だから入らせにもらいに来た。」

六花「どうぞ、ごゆっくり。」

そして俺は脱衣所に向かう。俺が旭湯に来た理由。汗を流したいのはウソではないのだがロツクに会いたいのでつい来てしまうのだ。付き合い始めてからだいぶ依存してしまつてゐる気がする。嫌な気分にさせないように気をつけないとな。

～20分後～

俺は風呂を済ませ脱衣所を出ると、ロックは休憩中なのか椅子に座つて扇風機の風に当たつていた。

そして俺に気づいたロックは俺に隣に座るよう、促すと

六花「最近よく来られますけどなにがありましたか？」

蒼生「いや、大丈夫だよ。実はね・・・」

そして俺はパスパレで千聖さんの代わりに歌つてることを話した。

六花「パスパレさんと一緒に歌つたんですか？すごいじゃないですか！」

蒼生「ああ、俺もそう思うよ。会つて話してたけでも奇跡に近いのにな。」

六花「蒼生さんって実は結構凄いこと任されてたんですね。」

それは仕事をやつていて実感している。同時に5つのバンドのサポートをする、特に Roseiliaの様な実力派やパスパレの様に芸能界で活動している人達を見るという事は責任重大だし、それぞれのバンドの特徴を元にアドバイスをしないといけないので結構大変なのである。

六花「蒼生さん、疲れてませんか？」

蒼生「大丈夫。ちゃんと寝てるし適度に休憩もしてるから。ロックこそ疲れてないか？」

六花「私も大丈夫です。忙しくなるのは朝と夜だけが殆どですし、その・・・」

蒼生「その？」

と聞くと俺に耳打ちで

六花「あ、蒼生さんに会えるので／＼／＼

蒼生「／＼／＼そ、そうか。あ、ありがとな。」

と言つてロツクの頭を撫でる。今は周りに客も居ないから大丈夫だろう。

六花「もつとお願ひします。」

すると六花は蕩けた声で頭を俺の方に寄りかからせた。

蒼生「ああ、いくらでも。」

そして片方の腕で抱き寄せてもう片方の腕で頭を撫でていると、

六花「あの、蒼生さん。」

蒼生「ん？ なんだ？」

六花「さつき千聖さんにベースに集中してほしいから蒼生さんが歌つてるって言つてたじやないですか。あ、撫でるのはやめないでください。」

蒼生「え？ ああ、ごめん。」

六花「えへへ。そ、それでですね、確かに弾きながら歌うのは難しいですからその練習方法はいいと思いますけど全員揃うのは少ないみたいですしWIFIまでの期間も考えるとそろそろボーカルの練習もした方がいいのかなって。」

蒼生「確かにそれはある。でもな、最近気づいた事なんだが、千聖さんが練習に来るときは前に来たときの修正点はほぼ完璧にしてくるんだ。多分皆に隠れて練習してるんだと思う。」

六花「何で隠れてなんでしょう？」

蒼生「多分プライド的な問題だろうな。」

六花「大変ですね。」

蒼生「ああ全くそう思うよ。」

六花「はい・・・あの蒼生さん。ちょっとお願ひがあるんですけど。」

蒼生「ん? どうした?」

六花「その、蒼生さんの頭を撫でてみたいですね//」

不安そうな子猫の様な目で俺にお願いをしてくる。というか俺の頭を撫でたい? 何この娘? 天使なの?

六花「駄目ですか?」

蒼生「そんなことないよ。ほら。」

するとロツクは手を伸ばし俺の頭をなで始めた。俺は撫でのをやめてないので撫であつてる形になる。

蒼生「ど、どうだ?」

六花 「髪の毛、柔らかいです。いつも手でかき上げただけで髪型が変わるのでもつと硬いかと思つてました。」

蒼生「そつか。ロツクの髪の毛もすべすべで気持ちいな。」

六花 「え？ そ、 そうですか？ その、 ありがとうございます//」

と言つて六花の顔が幸せそうに蕩ける。これを見て俺が1つだけ思つたことがある。

六花 「その、蒼生さん//」

そう言って目を瞑り顔を俺に近づけてくる。俺もそれに応える様に顔を近づけ、

六花「ん／＼／＼」

そしてそのまま撫でていた手を離し抱きしめた。六花も俺を抱きしめる。最近口づくからのキス要求が増えた気がする。恋愛にも慣れてきた証拠だろうが、肝心の俺は心臓バクバクで全く慣れなんて物はやつて来ない。

蒼生  
「ロツク。」

六花 はい？ きやあ！」

そして強めに抱きしめる。なにがぶはあだよ。可愛い過ぎるだろ。

六花 「えへへゝ蒼生さんゝ。でら嬉しいゝ」

蒼生「ああ、俺も嬉しいよ。」  
そしてしばらく俺たちは抱き合つてたのだった。

## 仲間の大切さ

六花 「それではまたいらして下さい。」

蒼生 「ああ、また来るよ。」

と言い、ほんの一瞬口付けを交わすと俺は旭湯を出た。

蒼生 「山吹ベーカリーでも寄つて行こうかな。」

小腹が空いたので山吹ベーカリーに行こうとすると見知った人影に会つた。

蒼生 「あれ？ 千聖さん？」

千聖 「あ、蒼生くん！？ どうしてここに？」

蒼生 「山吹ベーカリーに行こうと思って。それより千聖さんこそどうしてここに？ 現場があるので？」

千聖 「それは、その・・・」

なんだろう言い辛いことなのだろうか？ ん？ よく見ると千里の顔には所々の汗が見られる。最近暑くなってきたがまだ汗をかくような気温ではないはずだ。

蒼生 「もしかしてベースの練習してました？」

千聖 「!!え、ええ。・・・ 蒼生くん、お願ひがあるんだけど。」

蒼生「パスパレの皆に言つて欲しくないんですね？」

千聖「ええ。お願ひできるかしら？」

蒼生「分かりました。でもあまりオススメはしませんよ？」

千聖「分かってるわ。少しの間だけでいいわ。」

俺は無言で頷くと千聖さんは満足そうに俺に背を向けた。

俺は千聖さんにはああ言つた物の心の中の不安は消えなかつた。

（翌日）

イヴ「賄賂です！」

蒼生「賄賂ねえ・・・」

部屋にイヴさんが入ってきて、今日の昼に千聖さんが花園に何かを渡してゐるのを見た  
と言う。

そのタイミングで、

千聖「おはようございます。」

蒼生「ち、千聖さん！？」

千聖「どうしたの？」

イヴ「あ、あの、その、拙者これにてドロンします!!」

そしてソファーアの下に隠れようとすると日菜さんに捕獲されてしまう。

そうしている間に麻弥さんと俺で訳を説明すると、

千聖「お菓子をあげただけよ。」

と言われてしまふ。明らかに疑わしいが言つたら言つたでグループ内分裂になりかない。ここは抑えておこう。

蒼生「じゃあそろそろ始めましょうか。」

ここは話を切り替えるのが最善の策と判断し、練習を開始した。

しばらく練習すると彩さんが、

彩「千聖ちゃん。良かつたら本番みたいに練習しない？」

千聖「え？」

この答えにおそらく千聖さんはイエスとは答えないだろう。今は自分のベースを仕上げたがつてはいるし、その為に隠れて練習までしているのだ。

彩「やつぱり2人で歌う曲だから、大変だつたら歌だけでも・・・」

千聖「それじゃあ本番みたいにならないわ。」

彩「でも私、千聖ちゃんと・・・」

千聖「嫌よ!!」

ついに感情が爆発してしまつた。お互に思う所があり、すれ違つてしまつたのだろう。

千聖「ジ、ジめんなさい。今のは・・・」

彩「ううん。私、顔洗つて来るね。」

そう言い彩さんは走つて部屋を出てしまつた。その後をイヴさんと麻弥さんが追う。

日菜「あーらら」

千聖「・・・私、撮影に戻らなきや。」

蒼生「・・・千聖さん。」

千聖「何?」

蒼生「その、何というか、彩さんも千聖さんとパスパレを思つて行動してたんです。それだけは分かつてあげてください。」

千聖「ええ、分かつてるわ。」

♪数日後♪

麻弥「凄い雨ですねえ。」

イヴ「アヤさん、練習来てくれるでしようか?」

日菜「ズル休みはしないんじゃない?仕事だし。」

イヴ「このままじや駄目です。すれ違い続けてたら離れて行つてしまひます。なんと  
かしたいです。」

麻弥「ジブンも彩さんや千聖さんにはお世話になつてるので、こんなとき何が出来る

か分かりませんが。」

2人が言うことはよく分かる。俺もそれで Wild Babyと離れてしまったのだから。

イヴ「麻弥さんは沢山支えてくれます。」

日菜「うん。麻弥ちゃんは一番音安定してるし、頼りにしてるよ。」

麻弥「そうですか?フヘヘ。ではジブンは演奏でパスパレを支えます。」

イヴ「私も、パスパレの真を見せます!」

日菜「まあ、5人揃つてないと面白くないしね。」

こうして全員が仲間のことを思っている限りはメンバー壊滅はあり得ないだろう。そしてちゃんと見えてさえすれば・・・

部屋に入ると彩さんが声出しをしていた。

蒼生「早!？」

理由を聞くと自分ができていらないから千聖さんが歌つてくれないと考えたかららしい。

蒼生「彩さん。」

彩「何?」

蒼井「千聖さんは本当は歌いたいんですよ。あんなに必死に自分の気持ちを訴えかけ

るのも、W I F やバスパレに対する思いがあるからですよ。」

麻弥「ジブンもそう思います。じやなかつたらベースの弦があんなにくたびれるまで練習しませんよ。」

彩「日菜ちゃん、麻弥ちゃん、イヴちゃん、蒼生くん。行つてくる！」

そして彩さんは颯爽と外へ駆け出した。

蒼生「皆さんも行つてあげてください。これはみなさんの問題です。これ以上俺が出る幕はないですよ。」

麻弥「そうですね。すみません、失礼します。」

イヴ「私も、出陣です！」

日菜「じゃあ行つてくるね。」

「W I F 当日」

あの後皆は仲良く戻つてきて、ほぼ完璧な上体にゆら・ゆらR i n g—D o n g—Danceを仕上げた。

蒼生「じゃあまた後で、」

千聖「ええ、じゃあ皆行くわよ。」

「「「おーー」」」

そしてW I F は成功しバスパレの絆も深まつたのだつた。

・・・俺もこういうふうにできたのかな?

# 夕焼けに思いを馳せて

94 夕焼けに思いを馳せて

蒼生 「ゴーフエス？」

六花 「はい！商店街でのお祭りらしいんですけど。ポピパさんも出てくれるみたいで。」

蒼生 「そりや良かったな。でも何で俺に報告したんだ？」

六花 「はい。実は蒼生さんにお願いがあつて。」

蒼生 「お願ひ？」

六花 「ゴーフエスでのライブに出てくれませんか？出演枠と時間外余つちやうみみたいなので。」

蒼生 「・・・分かった。時間は？」

六花 「2曲分くらいです。」

蒼生 「分かった・・・それでき、ロツク。」

六花 「はい、何ですか？」

蒼生 「その・・・ゴーフエスさ、時間が合つたら一緒に回らないか？」

六花「はい！」

蒼生「ありがとう。じゃあまた後でな。」ギュツ

六花「はい、こちらこそありがとうございます。」ギュツ  
少しの間ハグをすると、俺は旭湯を出る。

（翌日）

蘭「巴、ちょっと走りすぎ。」

巴「ゴーフエスが楽しみ過ぎてさあ。」

聞けば宇田川は毎年この祭りで和太鼓をしているらしい。本人が好きでやつてる事  
らしいので楽しみなのだろう。

つぐみ「そろそろ、山吹ベーカリー閉まっちゃうんじやない？」

モカ「は!? パンが食べられない人生なんて！」

蒼生「急げ!! パンは待つてくれないぞ！」

蘭「分かってる、早く行こ。」

（30分後）

モカ・蒼生「おいひ〜」

つぐみ「なんか、二人共仲いいね。」

蒼生「パンの事だけだよ。」

モ力 「パン好きに悪い人はいないよ。」

結局俺達はパンで繋がってるだけだ。しかし1つ、この2人の仲で大きな事が起つてるので。それは・・・

山吹ベーカリーのパンの9割が俺と青葉の手の中に収められたことである。つぐみ「あ、ここにステージ組むんだって。」

蒼生 「へえ。」

これに限つては俺もただ事ではない。俺もこのステージで弾き語りをする以上俺もステージの雰囲気は知つておきたい。

蘭 「そういえば今回は神風もやるんだ?」

蒼生 「ああ、何気に久しぶりかもな。」

ひまり 「弾き語りだつけ?」

巴 「どれくらいやつてるんだ?」

蒼生 「この街に来てからだよ。引っ越す前でもギターはやつてたけどな。」

つぐみ 「バンド組んでたの?」

蒼生 「まあそんなとこだ。」

ひまり 「じゃあ蒼生も含めて、皆頑張ろーね。せーの、えい、えい、おー!」

「」「・・・」「」「」

ひまり「えー。巴と蒼生はやつてくれると思ったのに。」

巴「ここはいつも通りで。」

蒼生「俺はそんなガラじやないし。」

モカ「ひーちゃんひまつてる。」

そして皆で笑い飛ばしていた。その雰囲気がどことなく Wild Baby と似ている。ということは Afterglow も俺達みたいな言い争いがあつたのだろうか？ だとしたらどうやつて乗り越えたのだろう？

巴「蒼生？ どうした、ボーツとして。」

蒼生「いや、なんでもねえ。ちょっと久しぶりの弾き語りだから緊張しちやつてさ。」

モカ「無理ならうちらの時間にしても良いんだよー。」

蒼生「それは 100% ないから大丈夫だ。」

そして俺達はそれぞれ帰路についた。

「ゴーフエス当日」

蒼生「思つてたより大規模なんだな。」

六花「そうですね。賑やかですし屋台の数も豊富ですね。」

現在俺は六花と商店街を回っている。やはり商店街全体のイベントだけあつてかな

り血氣盛んである。

一番印象に残つたのが北沢精肉店の前でのハロハピのライブなのだが、弦巻がボールに乗りながらコロッケでお手玉という超人テクを披露していたのだ。一応コロッケは買って行つたのだが内心コロッケどころではなかつたのだ。

六花 「そういえば蒼生さんの出番は最後ですよね？」

蒼生 「ああ、だからそれまではゆつくりできるよ。」

六花 「本当ですか？」

蒼生 「勿論だよ。」

六花 「じゃあ、その・・・手、繫ぎませんか？」

蒼生 「いいよ。ほら、手出して？」

そして俺らは指と指を絡め合う。恋人繫ぎというやつだ。

蒼生 「じゃあ行くか。」

六花 「はい！・・・あれ？」

蒼生 「どうした？・・・ん？」

ここで空を見上げるとポツリポツリと雨が振り始めていた。

蒼生 「おい。これステージまずくないか？」

六花 「そうですね。急いだ方がいいかもしません。」

そしてステージに向かうと案の定。ピッパとAfterglowが機材を運び回つていた。

途中から俺とロックが加勢したことである程度早めに仕事は終わつたが雨が止む気配は無かつた。

沙綾「雨が、止むかな?」

りみ「一応、夕方には止むつて予報にはなつてるけど。」

つぐみ「良かつたらこれ使つて?」

一方羽沢は皆にタオルを配つて回つていた。俺達がありがたく使わせてもらつていると、

沙綾「もしかして、Afterglowつて野外ライブ慣れてる?」

つぐみ「そんなことないよ。」

ひまり「今慌ててもどうにもならないからね。」

蘭「何があつてもいつも通りやるだけ。」

六花「・・・Afterglowさんはなんでバンド組んだんですか?」

巴「私達は腐れ縁つていうか、幼馴染でさ。」

Afterglowは全員が離れ離れにならないように結成されたバンドらしい。

中学の時、美竹だけが違うクラスになつてしまい、全員で一緒にいられる時間が少なく

なつたのがキッカケらしい。

蒼生「・・・なるほど。それがお前達がいつも通りを大切にする理由か。」

巴「まあそういう事だな。」

六花「素敵です！」

蒼生「ああ、俺もそう思う。・・・お？皆、外見てみろよ。」

香澄「晴れてる！」

りみ「でもステージが・・・」

巴「モップあつたよな？」

つぐみ「うん、商店街の倉庫に。」

蒼生「じやあステージの掃除はAfterglowに任せて俺達は機材運ぶぞ！」

（20分後）

有咲「重！」

香澄「一回休もう。」

そうして一回全員が止まる。

六花「私が！」

そう言うとロツクはアンプの下に潜り込み持ち上げようとする。

香澄・沙綾「ロツク!?」

有咲「おい、危ねえって！」

りみ「口ツクちゃん!?」

蒼生「・・・はあ、しやあねえか。」

そして俺もアンプの下にはいると

蒼生「つたく、無茶すんじやねえよ。」

六花「蒼生さん・・・」

蒼生「ポピパは横から頼む。行くぞ！」

そして10分後に俺達は無事にステージにすべての機材と掃除が終わった。

蘭「晴れたね。」

巴「お守りのおかげかもな。」

つぐみ「あ、私も持つてるよ。」

モカ「えもうい」

ひまり「ん、盛り上がってきたね。皆、頑張ろうね！えい、えい、おー」

「「「・・・」」

ひまり「えー、こんないい雰囲気の時もやつてくれないのー。」

蘭「これも、いつも通り。」

そしてAfterglowはステージに出ていきY.O.L.Oを演奏したが、時間

の都合上、人グループ1つだけになつてしまつたのだ。

しかしその一曲でAfterglowの今までの時間が見えてくる感覚に誘われた。

蘭「ありがとうございました！」

そしてAfterglowが戻ってきた。

六花「それじゃあポピパさん、お願ひします。」

香澄「はい！」

沙綾「行つてくるね、ロツク。」

りみ「ロツクちゃん、ありがとうございます。」

六花「??」

蒼生「フフ。」

六花「え？ 蒼生さん？ 今のありがとうございます？」

蒼生「つまり、そういうことさ・・・」

六花「はい？」

一回言つてみたかつたんだこのセリフ。

蒼生「まあすぐ分かるよ。」

六花「えっと、はい。」

そしてポピパのHappy Happy Party!が終わる。

香澄「ここでお知らせです！poppin, partyの主催ライブは商店街のライ  
ブハウス、Galaxyでやることになりました！」

六花「え？聞いてません！」

有咲「言つてねえし。」

りみ「びっくりさせたくて。」

六花「サプライズ過ぎます。」

そう、ポピパはGalaxyでライブをする事になったのだ。口ツクには内緒にした  
いから言わぬでくれと頼まれていたのだ。

そしていよいよ俺の番になつた。

六花「じゃあ、お願ひします。」

蒼生「おうよ。」

そしてステージの前に立つ。前の2グループが残した熱をまだ感じる。

蒼生「神風 蒼生です。早速ですが行きたいと思います。・・・『ロキ』」

そしてギター一本で俺はロキを歌い始める。エレキで弾き語りをするにはもつてこ  
いの曲なのだ。サビに差し掛かると観客の熱さが激しくなるのを感じる。そして感想、  
ここはギターだけなのでギター・テクが物を言う。ここは指弾きに変えて速弾きにする  
ことで纖細な音を出す。そしてラストを歌い終わる頃には俺も客も最高のテンション

と熱さで終わることができた。

蒼生「ありがとうございました！」

そしてその後全員出てきて

「「「「ありがとうございました！」」」」

全員で挨拶する頃にはゴーフエスは終わる時間となっていた。

そして今俺は六花と帰宅している。

六花「あの、蒼生さん。」

蒼生「ん？ どうした？」

六花「アンプを運ぶとき、手伝ってくれてありがとうございました。」

蒼生「いいよいよ。俺が勝手に手伝ったんだし。六花こそ無理しないでくれよ？」

六花「はい・・・そういうえば蒼生さんの演奏、流石でした！」

蒼生「ありがとう。久しぶりだつたけど楽しかったな。」

六花「私も早くメンバー集めなきや。」

蒼生「ああ、頑張れよ。・・・ロツク、手出して？」

六花「はい、分かりました・・・あ、」

俺はロツクの手を取るとそのまま恋人繋ぎにした。

蒼生「さつきは途中で終わっちゃつたからさ。」

六花「そうですね。・・・えい！」

蒼生「うお!? ロツク!」

なんとロツクは手を放しそのまま俺の腕に抱きついてきた。女の子の匂いやら柔らかさやらで頭がおかしくなりそうだつた。

六花「すいません。昼間分も補給したかったので抱きついちゃったんですけど、駄目でしたか？」

蒼生「勿論いいよ。じやあ行こつか。」

そして俺達は幸せな岐路を迎るのだつた。

# ナカナ イナ カナイ

今日は市ヶ谷家の蔵にきている。

香澄 「主催ライブ会議。新曲作ります！」

蒼生 「イメージは固まつてんのか？」

香澄 「まだだけど？」

蒼生 「だろうな。出演バンドとやる日は？」

りみ 「夏休みは？」

香澄 「こころん旅行だつてー。」

たえ 「千聖さんたち、6月なら空いてるつて言つてた。」

香澄 「バスパレ出てくれるの？」

有咲 「てか凄くね？どんな交渉したんだ？」

たえ 「秘密。」

んだよそれ、聞いてねえぞ。バスパレが出る？

・・・よつしやああああああああ

有咲 「ん？ どうした？ そんなニヤニヤして。」

蒼生 「いや、なんでもねえよ。じゃあ6月の後半がいいんじやないか？」

香澄 「じゃあここだね。」

そして戸山が指したのは6月の最後の休日の日だつた。

蒼生 「ああ、それがベストだな。・・・そういうえば今年は花女と羽丘が合同文化祭するらしいな。」

りみ 「そういえば、今年の文化祭でポピパ一周年だね。」

蒼生 「へえ。」

じやあ結構最近組んだんだな。それであそこまで息を合わせられるのはかなり凄いと思う。

香澄 「・・・ライブしたいね。」

たえ 「一周年記念ライブ！」

有咲 「ちよま、主催ライブは？」

香澄 ・たえ 「どつちもやる！」

有咲 「はあ？」

蒼生 「・・・俺はアリだと思うけどな。」

有咲 「蒼生まで！ なんでだよ！」

蒼生「文化祭はポピュラの原点なんだろ？主催ライブをするにあたつて、原点を思い出すのは大事だし、俺もアシストするから。」

沙綾「私もやりたい、かな。文化祭思い入れあるつて言うか、今度は最初から出たいなつて。」

有咲「・・・」

そして全員の視線が市ヶ谷に集中する。

有咲「だあー、分かつたよ！』

そして皆はセットリストやら新曲やらの話になる。同時進行は大変だが、ちゃんと計画していけば大丈夫だろう。

「翌日」

俺達はGalaxyに主催ライブの日程を予約しに行つていた。

六花「はい、週末の土曜ですね。」

蒼生「おいおいGalaxy大丈夫か？予定ガバガバだぞ？」

沙綾「でも平日は入つてるみたいだよ？」

六花「・・・あの、なんでGalaxyなんですか？私は嬉しいですが、他にも場所

は・・・」

香澄「ロックがいるからだよ。」

沙綾 「私達の事、よく分かってくれてるし。」

有咲 「一度立つてからイメージも掴みやすいしな。」

六花 「えへ～。」

有咲 「ど、どうした？」

六花 「幸せすぎて～。」

蒼生 「じゃあよろしく頼むな。・・・花園？」

ふと花園の方を見るとステージ上に置かれていたドラムを見ていた。  
たえ 「・・・使い込まれてる。」

有咲 「おーいおたえ、そろそろ行くぞ。」

たえ 「あ、うん。分かった。」

香澄 「じゃあね～ロツク。」

沙綾 「よろしくね？」

六花 「はい！まかせてください。」

りみ 「じゃあ主催ライブの練習頑張らないとね。」

有咲 「じゃあ戻るぞ～。」

六花 「ありがとうございました。・・・蒼生さん」

蒼生 「ん？」

ロツクは周りをキヨロキヨロした後、小さく手招きした。

六花 「蒼生さん。その、今誰も見てないので・・・」

蒼生 「なるほど。分かつた。」

そして俺はロツクを抱き締めて頭を撫でる。

六花 「はあゝ幸せ〜。」

そしてロツクも手を回してくる。

蒼生 「ロツクは甘えん坊だな。」

六花 「う／＼／＼でも蒼さんが優しすぎるのがいけないんです。」

蒼生 「はいはい。でもロツクは特別だぞ？」

六花 「じゃあ証明してくれますか？」

そういう目を閉じたロツク。

蒼生 「！／＼／＼

俺はビックリしながらも、店長がこちらを見ていないことを確認して、そつと触れるだけのキスをする。

六花 「ん／＼／＼ありがとうございます。」

えへへゝなんて笑いながらそう言つてくるロツク。最後に俺はもうちょっと強めに抱きしめると

蒼生「じゃあそろそろ行くな。ポピパが待つてゐるだらうし。仕事頑張れよ。」

六花「はい！ありがとうございました。」

そして俺はG a l a x yをあとにした。

・・・そして次の日プチ事件が起こつた。

蒼生「合同バンド？」

日菜「そう！メンバーは集まつたんだけどバラバラなメンバーだからアシストがいるかなーって思つて。」

確かにメンバーは教えてもらつたが、見事に違うバンドから集められている。正直ポピパの事もあるし、悩んでいる。

日菜「んー、じやあ何かるん♪つてすることがあればやつてくれる？」

蒼生「るん♪つて來ること？」

日菜「じやあパスパレ全員のサインが入つたニューシングルは？」

蒼生「よし來た、引き受けましょう。」

物で釣られちゃしようがない。何せ文化祭までの間のサポートでパスパレ全員のサイン入りシングルだぞ。

え？さつきポピパがあるからつて言つてた？寝る時間でも何でも割いてやるわ（涙）

日菜「じゃあよろしくねー。」

蒼生「分かりました。でもせめて曲だけは完成させといてくださいよ。」  
オッケーと言うと日菜さんは走り去つてしまつた。

その日の夜ポピパの練習を済ませて駅前を通ると、

蒼生「あれ？ 花園？」

俺より少し早めに藏を出た花園がギターを取り出し何やら準備をしている。

蒼生「路上ライブか・・・」

花園は主催ライブまでに自分の腕を出切るだけ上げるため日々こうして路上ライブをしているのだろう。

そして花園が歌い始める。Time Lapseだ。ちらほらと通行人たちが足を止め、花園の演奏を聞いている。

たえ「ありがとうございました。」

そしてそのタイミングです花園のスマホが鳴る。

そしてその内容を確認したあと、花園が奏でたイントロは、

蒼生「・・・知らない曲だ。」

そして花園が歌い始めた。ゆつたりとバラードのような曲調で歌われている。そしてしばらくすると1人の大人びた女性が花園の歌に入ってきた。花園はびっくりして

いたが、構わず演奏を続ける。

蒼生「・・・あれ？」

考えてみればおかしい事が一つあつた。俺は今花園が歌つて いる曲を知らない。俺はロツク、アイドル、J—POPなど様々な曲を聴いて いる。その俺が知らないといふことはオリジナル曲なのだろうが、ならなぜ今入つてきた女のはこの歌を歌えるんだ？しかし花園は花園で懐かしむ様な喜ぶ様な表情で歌つて いる。

蒼生「まあいいつか。」

しかしこの歌の歌詞、別れを惜しまないで。という思いが込められた歌だが、それでもW i l d B a b yの事を思い出して しまう。俺も元は路上ライブをしていて蓮に声をかけられたのだ。そしてこの歌の歌詞とW i l d B a b yの最後がどうしても重なつてしまふ。そして気がつけば俺は一滴の涙を零して いた。

そして演奏は終わり、花園とその女性はどこかへ走り去つてしまつた。  
 ・・・できる事ならもう一度会いたい。しかしあの喧嘩の原因は俺にあるのであつて、  
 オレから許しを乞う資格はない。

しかし心の何処かで諦めきれない自分が居るのを感じた。

# 貴女と私は rock & crazy

蒼生「ただいま。」

俺は先程までポピパの主催ライブと文化祭ライブのアドバイスをしていた。いい時  
間になり今帰宅したのだが、

蒼生母「おかえり、蒼生。」

蒼生「どうした？出迎えなんて珍しいじゃないか？」  
蒼生母「まあ、いいから入りなさいよ。」

そして半ば強引に俺は家の中に入らせられた。そしてリビングには既に夕食の準備が出来ていた。

蒼生「何かあからさまに話がある雰囲気だな。」

蒼生母「まあ良いじやない。とりあえず、食べましょうよ。」

蒼生「・・・ああ、分かった。」

正直乗り気はしない。こういう時は大体ろくでもない話を聞かされたりするからだ。

蒼生「じゃあ、いただきます。」

蒼生母「いただきます。」

蒼生「それで、話つてのはなんだ?」

蒼生母「まあ話つていう話でもないんだけどね。最近小耳に挟んだんだけど、アンタが最近女の子と手を繋いだりしながら歩いてるのを見たつていう情報を仕入れたから本当かなうつて思つて。」

蒼生「・・・誰から聞いた?」

蒼生母「あら? その反応は図星なのかしら?」

蒼生「まずは質問に答えてくれ。」

蒼生母「近所の奥さんに聞いただけよ。」

蒼生「そうか。まあ結論から言うとその情報はあつてるよ。」

蒼生母「本当に? アンタも隅に置けないわねう。ところで相手つて誰なのよ?」

蒼生「・・・ロツクだよ。」

蒼生母「ロツクちゃん? ロツクちゃんも引っ越したのは知つてたけど同じところだったのね。・・・蒼生。」

蒼生「何?」

蒼生母「今度ロツクちゃん連れてきて頂戴。久しぶりにあつてみたいわ。」

蒼生「・・・良いけど変なこと言うなよ?」

蒼生母「それは保証できないわねう。」

つたくこの母親は・・・

（翌日）

蒼生 「つてことがあつてさ。」

六花 「蒼生さんのお母さんは相変わらずですね。」

蒼生 「相変わらず過ぎて困るよ。それでさ、今日家来てくれない？」

六花 「ええ!? 今日ですか!?」

蒼生 「嫌ならしいんだぞ？」

六花 「いえ、ちよつとびっくりしただけです。私も蒼生さんの家行つてみたいです。」

蒼生 「そうか、ありがとう。それで番台つてどれくらいで終わる？」

六花 「後30分くらいです。」

蒼生 「分かった。じゃあそのへんで待つてるな。」

六花 「分かりました。」

そして番台をしている六花と他愛のない話をしていると30分はあつという間に過ぎていった。

六花 「お待たせしました。」

蒼生 「全然大丈夫だよ。じゃあ行こうか。」

六花 「はい。」

そう言い俺達は手を繋いで俺の家へ向かつた。

そして家について、ロツクを家に上げる。

六花「お、お邪魔します。」

蒼生「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。」

そしてロツクをリビングに案内すると母さんはソファードでスマホをいじっていた。

蒼生「母さん、ロツク連れてきたよ?」

蒼生母「おかえり蒼生。ロツクちゃんも久しぶりね。うちの馬鹿息子がお世話になつて貰つてるみたいで。」

六花「い、いえ。蒼生さんにはいつも優しくして貰つていますので。そ、その、私の方こそお世話になつています!」

蒼生母「本当にロツクちゃんはいい娘ね。これからも蒼生の事よろしくね?」

六花「はい、こちらこそ!」

蒼生母「蒼生、折角ロツクちゃんが来てくれたんだから貴方の部屋に入れてあげたら?」

と、ニヤニヤしながら母さんが言つてくるがどうも冗談には聞こえない。

蒼生「は!?」

六花「ええ!」

蒼生母「それと私はお買い物で夜7時まで帰らないからね。」

いやそんな変な気遣いいらねえよ。ていうか、この人絶対楽しんでるだけだし。

蒼生母「じゃあ言つてくるわね。」

そう言い、俺たちが何か言い返す間もなく出て行つてしまつた。

蒼生「はあ、全く。・・・とりあえず俺の部屋来る?」

六花「は、はい。」

そして俺の部屋に移動すると、自分でちよつと驚いたことがある。それは部屋が出かける前より少し片付いているのだ。・・・今度肩でも揉んでやるかな。

蒼生「とりあえず座つてよ。」

そして俺はロツクを小さな椅子に座らせて、俺はベッドに腰をかける。そして麦茶を渡すと

六花「ありがとうございます。」

と素直に受取り一口飲むとテーブルに置いた。

そして俺のギターにロツクの視線が行くのが分かつた。

六花「蒼生さんはずつとあのフライングVなんですよね。」

蒼生「ああ。初心者の時からあれだつたから慣れるのに大変だつたらだつたよ。」

六花「最初からフライングVつてだいぶ特殊ですもんね。」

蒼生「最初からヘツドレスのロツクがそれ言う?」

六花 「まあそうですね。」

そう、俺達は最初から特殊なギターを使っていたことから、岐阜ではロツクと俺セツトでrock&crazyと呼ばれていた。

蒼生 「でもそのギターのおかげで俺達は会えたんだもんな。」  
六花 「はい。本当にギターやつて良かつたって思います。」

蒼生「ロツク・・・」

六花「蒼生さん？」

そして俺は口ツクを抱きしめる。

蒼生「……ありがとな。俺を好きって言つてくれて。」

六花 「はい／＼今でも大好きです。」

そう言い俺にも腕を回してくる。

蒼生「俺もだよ。愛してる。」

蒼生 「んん!?」

急に口ツクがキスをしてきた。

六花 「んん／＼つぶはあ、えへへ。」

蒼生「はあ、はあ、急にどうした?」

六花「なんかしたくなつちやつて／／／」

蒼生「そ、そつか／／＼・・・その、ロツク?」

六花「はい?」

蒼生「その・・・もう一回しても良い??」

六花「／／／」コク

そして俺達は再度口づけを交わす。自然と抱きしめる力が強くなる。

六花「んん／／／ん、んんつぶはあ、はあ、はあ。」

蒼生「はあ、ふう、ロツク。」

六花「はい?」

蒼生「本当に愛してる。」

六花「私も愛してます。」

そしてぎゅっと強く抱きしめた。そしてロツクの頭を撫でる。

六花「えへへ～もつと～。」

蒼生「はいよ。」

六花「んん～・・・ふわあ～」

蒼生「あれ?寝不足?」

六花 「すいません。昨日お客様の数が多くて。」

蒼生 「そつか、ちょっと寝てもいいよ?」

六花 「で、でも悪いですよ。」

蒼生 「気にしなくていいよ。今日無理して来てもらっちゃつたし、俺のベッド使っていいよ?」

六花 「あ、蒼生さんのベッド!?」

蒼生 「嫌だつた?」

六花 「いえ、使わせてもらいます!」

するとロックはベットの端つこの方に行つた。

蒼生 「もつと広々使つていいんだよ?」

するとロックはベットの方でもじもじして、とんでもない事を言い出した。

六花 「そ、その、蒼生さんと一緒に寝たいです//」

蒼生 「・・・はい?」

六花 「折角2人になれましたし、蒼生さんなら変な事しませんよね?」

蒼生 「そりやあそうだけど・・・」

六花 「駄目ですか?」

掛け布団を胸の前で握りしめながら上目遣いでみてくる。

・・・こんなもん断れるか！

蒼生「分かった。でも6時には起きるよ？」

六花「わかりました♪」

明らかに嬉しそうな顔で喜んでいる。

可愛い。

蒼生「じゃあ入るよ？／＼＼＼

六花「はい／＼＼＼

蒼生「大丈夫か？狭くない？」

六花「大丈夫です。はあ／＼＼＼蒼生さんの匂い♪」

何この娘、可愛いすぎるでしょ。匂いかぎながら笑顔ですんすんしてゐよ。

蒼生「なんか恥ずかしいな。」

六花「えへへ。すう、すう。」

蒼生「あれ？」

どうやらもう寝てしまつたらしい。それにしても眼鏡をはずした口ツクは久しぶりに見たかもしれない。ロックつて眼鏡とシユシユを外すと可愛いとかっこいいが8：2くらいになる。

六花「あおいさん。ギュ／＼＼＼。」

するとロツクが可愛らしい寝言と共に、俺に抱きついてきた。

蒼生「ちよ、ロツク!？」

しかしロツクは離れる気配がなかつたのでそのままにすることにした。

蒼生「おやすみロツク・・・大好きだよ。」

そして俺も5分後にはぐつすり寝ていた。

# 文化祭はエンジョイすべし

俺とロツクは6時に起床することに成功し、俺はスマホを確認すると母さんからL〇N Eが来ていた。

『スーパーで近所の奥さんに会つたのでお茶して帰ります。帰りが12時くらいになるからご飯は自分で食べてね。あ、ロツクちゃんと何があつたか明日には教えなさいよ。』

・・・どこに突っ込んでいいかわからねえ。まずこの時間にお茶つてのもおかしいし、12時帰宅つてのもおかしいだろ。どんだけ変な期待してんのか知らないけど、俺達はまだそういうのじやないし。

蒼生「とりあえず・・・飯食べてくれ？」

六花「ありがとうございます。あ、でも番台が・・・」

蒼生「そつか、でも遅い時間だからな。送つてくれよ。」

六花「ありがとうございます。」

その時どこかで振動音とギターの音が聞こえる。

六花「すみません。」

と俺に一言言つたあとロックは電話に出る。どうやらロックの着信音だつたらしい。  
六花「はい。・・・え?!でもそんな、・・・分かりました。すみません、ありがとうございます。」  
ざいます。失礼します。」

蒼生「どうした?」

六花「叔母さんからだつたんですけど番台変わつておくからゆつくりしておいでつ  
て。」

蒼生「じゃあご飯どうする?」

六花「お願ひしてもいいですか?」

蒼生「勿論だよ。」

「30分後」

蒼生・六花「いただきます。」

そして俺は2人分の夕食を作つてロックと一緒に食べる。と言つても簡単な和食し  
か用意できなかつたのだが、

六花「んん~でらうま~。」

喜んでくれてるから良しとしよう。

蒼生「ごめんな、簡単なのしか出せなくて。」

六花「いえ、とつても美味しいです~。」

蒼生 「良かつた。」

そうすると急にロツクが顔を赤らめてもじもじし始めた。

蒼生 「どうした？なんか口に合わないものがあつたか？」

六花 「いえ、そうじやなくて、その、・・・」

蒼生 「どうした？」

六花 「その・・・あーんしたいなつて。」

・・・なんだつて？あの恋人の憧れのあーんだと？

蒼生 「も、勿論いいぞ／／＼

六花 「あ、ありがとうございます。じゃあ、あーん／／＼

蒼生 「あ、あーん／／＼

そしてロツクはぎこちなく俺の口の中に箸を入れてくる。

蒼生 「じゃあロツクも、その、あーん／／＼

六花 「え！あーん／／＼

蒼生 「ど、どうだ？」

六花 「は、恥ずかしいです。けど・・・」

蒼生 「けど？」

六花 「幸せです／／＼

蒼生「ああ、俺もだよ。」

～10分後～

蒼生・六花「ごちそうさまでした。」

蒼生「そろそろいい時間かな？送つてくれよ。」

六花「はい。ありがとうございます。」

そして俺達は手を繋いで旭湯に向かう。

六花「そういうえば蒼生さんのクラスは文化祭で何をするんですか？」

蒼生「あー・・・ジャズバー風カフェってのをやるんだけどな。」

六花「ジャズバー？」

蒼生「俺さ、アコギ持つてるだろ？あとピアノも一応できる。んで他にもピアノでき  
るやつがちらほらといるから。」

六花「な、なるほど。」

蒼生「ロックのところは？」

六花「私のところはセツションカフェです。」

蒼生「・・・名前でなんとなく察しはついたよ。ロックが提案したんだろう？」

六花「は、はい。」

蒼生「まあロックらしいな。」

なんて言いながらロツクの頭を撫でると、

六花「んん~」

なんて言いながら俺の肩に頭をスリスリしてくる。

蒼生「最近本当に甘えん坊だな。」

六花「甘えさせてくれる蒼生さんが悪いんです~。」

蒼生「はいはい。」

そしてロツクの肩を抱き寄せる

六花「幸せ過ぎます~。」

蒼生「歩きにくくない?」

六花「はい。」

蒼生「なら良かった。・・・あ。」

そうしている間に旭湯に到着してしまった。一瞬ロツクの顔が曇る。でもすぐに笑顔に戻ると、

六花「送つていただきありがとうございました。」

蒼生「気にしないでいいよ、俺がそうしたかつただけだから。じゃあ、その、おやすみ。」

そして俺がロツクに背を向けて帰ろうとした時、

六花「・・・蒼生さん！」

蒼生「どうし・・・んん／＼／＼

俺が振り向いた瞬間にロツクは不意打ちキスをしてきた。

蒼生「んんつ、はあ、ロツク？」

六花「そ、その、おやすみなさい！」

そう言つて走り去つてしまう。

蒼生「・・・反則だろ。」

そして俺も自宅への岐路を辿つた。

（数日後）

たえ「別のバンドに行きたい。」

沙綾「・・・どういう事？」

今日はポピパの練習に来ていたのだが、唐突に花園がそんな事を言い出したのだ。

たえ「もつと、修行したい。」

花園が言うには、主催ライブに向けてもつと腕を上げたいのでサポートギターとして違うバンドに行きたいらしい。

蒼生「・・・文化祭にも影響はないんだな？」

たえ「うん、頑張る。」

蒼生「まあ、花園がそう判断するなら止めないが。」

それでもあんまり乗り気はしない。山吹を見ると同じく曇った表情をしていた。

・・・嫌な予感がするな。

そしてその日、俺は羽丘に来ていた。理由は、

彩「それじゃあ、新曲作ります！」

俺は文化祭記念バンドのサポートとして会議的なものに参加している。

蒼生「それで、ここに作曲できる人っているんですか？」

日菜「なんとかなるつて！」

蒼生「・・・つまりいないですな。」

リサ「モカのところはどうやつて作ってるの？」

モカ「えへ、うちは／蘭が、いつも通りにいつも以上にムムつて悩んでますよ。」

リサ「ハロハピは？」

花音「うちは：：美咲ちゃんが落とし込んでくれるから。R o s e l i aはどうやつて作ってるの？」

リサ「んん、時々友希那の部屋の灯りが付いてて、多分イモつてる？」

日菜「蒼生くんは作曲経験とかないの？」

蒼生「ないことも無いんですけど、あんまり参考にはならないと思います。でも1つ言

うなら俺はまずテーマから決めてましたよ。」

彩 「テーマかあ。日菜ちゃん、なにかアドバイス・・・」

日菜 「バイトでイイじやん」

「「「「「あ！」」」」」」

蒼生 「なるほど、確かにそれなら全員共通している事ですし、書きやすいんじゃないですかね。」

香澄 「なるほど。」

蒼生 「へ？」

花音 「香澄ちゃん!?」

香澄 「作曲の勉強したくて。」

蒼生 「・・・いつからいたんだ？」

香澄 「Afterglowの作曲の話くらいからかな？」

結構最初じゃねえか。誰にも気付かせないとは、ちょっと怖えよ。

蒼生 「とりあえず、まず曲のイメージは決まったことだし、歌詞だけ書いてきてくれたら作曲はするけど・・・」

香澄 「それ、見てもいい？」

蒼生 「いいよ。ただ本当に参考になるかは分からぬいぞ？」

香澄「うん！」

日菜「じゃあ今日は解散だね。」

「お疲れ様です。」

数日後、

蒼生「なんですか日菜さん、急に生徒会室似呼び出して。」

日菜「文化祭の記念バンドなんだけどさ、今度リハがあるじゃん？」

蒼生「はい。今度っていうか今日ですよね。」

日菜「そのリハをさ、公開リハにしようと思うんだけどどうかな？」

蒼生「もう見せちゃうんですか？」

日菜「その方がるん♪つてしない？」

るん♪つてするかは置いておいて、急に公開になると彩さんが緊張して噛んでしまう可能性が高いしな。

・・・緊張慣れも必要かな？雰囲気を掴むのも大事だしな。

蒼生「分かりました。俺は反対はしませんよ。」

日菜「オツケー。」

そして俺は生徒会室を後にした。そして中庭に着くと俺の見知った人が項垂れてい  
た。

蒼生「バンドメンバー集め?」

そう、その人物は、

六花「蒼生さん。はい、でも全く集まらなくて。」

ロックだつた。可愛らしいバンド募集の看板みたいな物を持つてゐる。

蒼生「まあいつか諦めなければ絶対見つかるよ。」

六花「はい、ありがとうございます。」

多分ロックは俺のことでも誘いたいのだろう。岐阜にいたときも組んでみたいって言  
われたこともあつた。ガールズバンドじゃなくなるけど、それでもやつてみたいと言つ  
ていた。ただ俺が一度バンドで苦い思いをしてゐるから遠慮してしてゐるのだろう。

蒼生「・・・ごめんな。」

六花「え? 蒼生さん何かしましたか?」

蒼生「メンバー集めとか協力出来なくてさ。それと、俺も力になれなくてさ。」

六花「蒼生さん・・・」

蒼生「だからさ、俺にできることがあつたら何でも言つてくれ。叶えられる事なら全

部頑張るからさ。」

六花「フフ、蒼生さんは優しすぎですよ。・・・そうですね、じゃあ一つだけ良いで  
すか?」

蒼生 「ああ、なんだ？」

六花 「そ、その、ギュッとしてほしいです。」

蒼生 「え!? でもここ学校のど真ん中だぞ?」

六花 「駄目……ですか?」

上目遣いで聞いてくる。

・・・俺がこれに弱いって知つててやつてるだろ。でもな、俺もそろそろこれは何回もやられてるからな、流石に外でハグするなんてそんな恥ずかしい事、

・・・駄目だ、上目遣いには勝てねえ。

蒼生 「・・・今は人もいないしちよつとだけな?」

六花 「はい! ギュ／＼＼＼。」

蒼生 「つたく、甘えん坊だな。・・・ひう! ／＼＼

何で急に変な声出したかつて? ロツクが耳にふ／＼つて息を吹きかけてきたからだ。

蒼生 「ち、ちよ、ロツク!」

六花 「えへへへ、イタズラしちやいました♪・・・ひやん! ／＼＼

やられっぱなしなのも癪なので背中をつつーーつてしてやつた。

六花 「も、もう、蒼生さん!」

蒼生 「ロツクからやりだしたんだろ?」

六花 「そうですけど……もう！」

なんて言いながら俺の胸をポカポカ叩いてくる。

・・・やべえ、痛くないし可愛いし。

蒼生 「ごめんごめん、ほら。」

そう言いナデナデすると、

六花 「んぐ、でらたまらんぐ。」

蒼生 「それなら良かつた。それにしても人来ないな。」

さつきから人が居なかつたのだが来なさすぎる気がする。

・・・まあいつか。皆文化祭の準備とかしてるんだろう。

日菜『皆一文化祭記念バンドの公開リハやるよー講堂まで【おかし】だよ。押さない、  
駆けない、しらない人についていかない。』

・・・なにか違うけど、まあ良いか。

蒼生 「・・・名残惜しいけどまた後でな。」

六花 「はい・・・蒼生さん。」

蒼生 「何だ？」

六花 「私も見に行つていいですか？」

蒼生 「勿論だよ、公開リハだからな。・・・俺は舞台袖で見るけどロツクも来るか？」

六花「はい！」

そして公開リハが始まった。バイトの応援ソングだが、久しぶりに作曲した割には我ながらなかなかの仕上がりだと思う。

六花「わあ！」

ロックも満足そうに見てるし、この調子で行けばこのバンドは大丈夫かな。

・・・あとは。ポピパか。主催ライブだがどうも胸騒ぎがする・・・

六花「蒼生さん？」

蒼生「いや、大丈夫だ。」

そして今日の放課後、花園から文化祭の日にダブルブッキングになつたという連絡が入つた。

# 文化祭パニック

蒼生 「じゃあ文化祭には支障はないんだな?」

有咲 「燐子先輩に相談して順番もずらしてもらうから大丈夫だろ。」  
たえ 「・・・ごめん」

今俺は藏で花園の文化祭ライブとサポートギターをしているバンドのライブのダブルブッキングの件について話をしていた。

蒼生 「今はどつちも成功させることを考えろ。」

たえ 「分かった。・・・ほんとうにごめん。」

香澄 「ううん、おたえも頑張ってね。」

そしてその後、少し練習した後解散した。

そして俺はCIRCLEにまりなさんに報告を済ませたあとCIRCLEを出ると、

チユチユ 「来たわね、私の事覚えてるかしら?」

蒼生 「お前は・・・」

そこには前に俺とRoseiliaをスカウトしに来た奴がいた。確か名前はチユ  
チユだつたか。

蒼生「ああ、覚えてるよ。今度は何の用だ？悪いがスカウトなら受けないぞ。」

チユチユ「もうその件ならいいわ。それよりあなたにこれを。」

蒼生「これは・・・ライブチケット？」

チユチユ「ええ、私が作り上げた音楽を貴方にも見せてあげるわ。」

そこで俺は日時を確認する。そこに書いてあつたのは2日とも文化祭の日だった。

蒼生「すまないが、この日は2日とも学園祭なんだ。」

そう言いチケットをチユチユに返す。

チユチユ「んな!? 学園祭つて何よ！ 私のStageの方が有意義な時間を過ごせるわよ！」

蒼生「だとしてもだ、俺にはやらなきやならない事がこの日は山ほどあるんだ。だからこのライブにはいけない。それじゃあ。」

そう言つて俺はチユチユに背を向ける。遠くで『文化祭つて何よー！』とか聞こえてくるが無視無視。

「文化祭当日」

蒼生「じやあ初日と2日目はどつちとも俺がトップバッターピアノで2日目の昼飯後位にちよつとアコギで入ればいいんだな？」

生徒A「うん、じやあよろしくね。」

生徒B 「蒼生くん。もう入っちゃつて。」

蒼生 「了解。」

俺は今、自分のクラスのジャズバー風カフェのオープンのをしている。1日目は出番も少なううのでゆっくりできそうだ。

モカ 「じゃあそろそろ開けますよ。」

口調とは裏腹に青葉は素早く看板を立てかけドアの前のカーテンを開くと、モカ「今からオープンします。」

すると数人の客が入ってきた。すでに何人か並んでいたのだろう。

そして大体の人が席に付いたのを確認すると、俺はピアノを引き始める。うちのジャズバー風カフェはジャズと入つても本当のジャズの曲だけを弾くんじやなくて、アニメ曲やj—popの曲をジャズアレンジして弾いている。その方が沢山の客が稼げるから、と言う事らしいがその予想は当たつたみたいで、時間が立つと客が増えてくる。

生徒A 「蒼生くん、まだ大丈夫?」

蒼生 「ああ、次の奴の演奏まで後どれくらいだ?」

生徒A 「あと20分くらいかな。」

蒼生 「了解、お前も仕事戻つてろよ。また客増えてきたぞ。」

気がついたらほぼ満席に近い状態になつてゐる。

生徒A 「オツケー。じゃあもうちょいよろしくね。」

そう言いそいつは仕事に戻つていく。俺はピアノを弾きながら、チラツと周囲を見渡す。すると俺からちょっと遠い席にロツクが座つてているのが見えた隣には明日香もある。ロツクと目が合うと小さく手を振つてくる。

・・・可愛いな、うちの彼女は。じゃあちょっとサービスしますか。

そして俺は今弾いてる曲が終わるとポピパの二重の虹をジャズアレンジで弾き始める。ピアノを練習し始めた時はかなりブランクがあつたが今は音程さえ分かれば即興で弾けるくらいにはなつている。ロツクの方を見ると、キラキラした目でこちらを見ていた。その後調子に乗つて全部ポピパのアレンジをしたのだが、終わつてロツクと明日香の所に行くとロツクには大絶賛されて、明日香には半ば呆れ顔で苦笑いされた。

そして仕事を終えた俺は今日この後はすべて自由時間だつたのでロツクと明日香、途中でR o s e l i a の宇田川と合流して、花女に行くことにした。

蒼生 「んあ～、疲れた～。」

六花 「お疲れ様です。どれくらい弾いてたんですか？」

蒼生 「1時間休み無しでずっと弾いてたよ。ブランクもあつたしキツかつたよ。」

六花 「でもブランクはあんまり感じませんでしたよ。」

明日香 「私も音楽は詳しくないですけど、すごかつたと思います。」

あこ 「あこも蒼生さんが弾いてるところ見てみたい！」

蒼生 「明日も同じくらいの時間に弾いてるぞ。アコギは昼過ぎ位にやるぞ？」

六花 「あ、私昼過ぎから仕事だ……」

蒼生 「あー、ロツク？」

六花 「何ですか？」

蒼生 「昼過ぎって言つても何時から何時まで？」

六花 「1時から3時までです。」

蒼生 「俺は1時から2時までだから、今度は俺がロツクの所行こつかな？」

六花 「本当ですか！ありがとうございます！」

なんて言いながら俺に抱きつくロツク。

蒼生 「おい、2人が見てるから！／＼／＼

あこ 「おお！六花大胆！！」

明日香 「そーゆーのは家に帰つてからにしてくれる？」

六花 「はーす、すいません／＼／＼

蒼生 「いや、謝らなくていいけどさ……ほ、ほらもう着いたぞ／＼／＼

話を誤魔化すため俺達は花女の中に入る。いい忘れていたが、どのバンドも俺とロツクが付き合っている事は知っている。たまたま旭湯でいやついてる所を今井さんに

見られて、2日で拡散させられた。恐るべし、今井さんの人脈とコミュ能力。

そして俺達が花女に入つてウロウロしていると突然、

りみ「ばああ」

牛込がお化けの格好で出てきたのだが、全く怖くない。

蒼生「・・・えーと、ここはどんな所?」

こころ「ハッピーなお化け屋敷よ!」

すると横から弦巻が出て來た。

あこ「ハッピーなお化け屋敷?」

明日香「まあ入つてみれば分かるんじやない?」

蒼生「じゃあ入るか。」

そして中にはいると、中にはハロウインの様な、しかし可愛らしい飾り付けがされて  
あつた。

蒼生「なんつうか、凄えな。」

あこ「可愛い〜」

こころ「お化けが怖いなんて可哀想だから私達はハッピーなお化け屋敷にした  
のよ。」

蒼生「確かに、弦巻らしいな。じゃあアイスティー1つ。」

そして各々注文を済ませて、一息ついているとロックが、

六花「そういえば、ポピパさんは文化祭ライブ出るんですよね？」  
と聞いてきた。

蒼生「・・・多分な。」

六花「え？ ポピパさん、何かあつたんですか？」

明日香「そういえばお姉ちゃん、家でもいつもより元気ありませんでしたよ。」

蒼生「いや、大丈夫、だと思うぞ。」

六花「ならいいんですけど。」

正直、自信満々でポピパが大丈夫かと問われればはつきりYESとは言い難い。それは花園のサポートギターの件だけではなく、空氣自体がおかしくなつてきているからだ。そしてその空氣がWild Babyをおかしくしたあの雰囲気と似ているのだ。

蒼生「まあ練習は重ねてきていたし、文化祭でポピパ1周年みたいだからな。心配いらないよ。」

とはいえ、こいつ等に心配させるわけにもいかないのでここは黙つておく事にした。

（翌日）

蘭「文化祭2日目も、盛り上がつていいこう！」

俺は今羽丘の講堂でAfterglowのライブを見ている。午前の仕事を終わら

せたので見に来たのだ。文化祭にライブやるから実はAfterglowの練習を見る回数も増えていたのだが、問題なく演奏できている。

蒼生 「つと、もうこんな時間か。」

そして俺は講堂を出るとそこには4人の人影があつた。

蒼生 「お！ 丁度だな。」

香澄 「あ！ 蒼生だ！」

有咲 「あ” う疲れたら。」

蒼生 「中、冷房効いてるから楽器置くついでにリラックスしてくれば？」

沙綾 「じゃあそうするね。皆行くよ。」

そう俺はポピパの確認をするため、この時間にポピの待ち合わせをしていた。

蒼生 「それで、花園は間に合いそうか？」

有咲 「ギリギリだけどな。でも演奏出来る時間は十分から大丈夫だとは思うけど。」

蒼生 「一応花園のライブが終わる時間は何時くらいになつてる？」

すると山吹がスマホを差し出してくる。

そこに書いてあつた見出しが目に入る。

『衝撃！ R A I S E A S U I L E N のファーストライブ！』

そこには、花園を含めた5人が写っている。確かに時間も書いてあつたので間に合う

確認は出来たのだが、それより気になつたのが、D Jをしている少女だつた。そこにいたのは数日前俺に姿を見せたチュチュだつた。

沙綾 「蒼生？」

蒼生 「え？ ああ、なんでもない。これならなんとか間に合いそうだな。つてやば！」  
話している間にもう少しで自分のクラスに戻らなければいけなくなつた。

蒼生 「悪い、仕事行かなきや。」

香澄 「あ！ じやあ蒼生のクラス行つてもいい？」

有咲 「また移動すんのかよ。もう動きたくないね。」

りみ 「でも、私も気になるな？」

沙綾 「じやあ行こつか。」

そしてポピパのメンツは、市ヶ谷は無理矢理だが俺のクラスに來た。

モ力 「お、客を連れてくるとはなかなかやりますな。」

蒼生 「はいはい、じやあ俺は準備してくるからこの4人は任せたぞ。」

モ力 「モ力ちゃん了解。4名様入りま～す。」

そして5分でチューニングを終わらせるとピアノの隣に行く。

生徒C 「行ける？」

蒼生 「あいよ。」

そして俺達は引き始める。これは2人で弾くのでピアノソロみたいに即興で弾いたりはできないが、練習したものならほぼ完璧に仕上げられたはずだ。

有咲 「なんか、凄えな。」

りみ 「うん。エレキのときも凄かつたけど、アコギでもここまで出来るんだね。」

沙綾 「どれだけ長い間真剣にギターと向き合つたんだろう。」

皆口を揃えて俺のギターの話をしているがそんな大層なものじやない。俺はギターが好きだったそれだけだ。そしてポピパにも、いや俺が見ている全バンドも楽器問わずそう思つてゐるはずだ。その心があれば誰でも上手くなれる。俺はそう信じてる。

（1時間後）

蒼生 「お疲れつした！」

俺は文化祭でるべき仕事を終えるとロツクのところへ向かう。勿論フライングVを持つて。

明日香 「いらっしゃいませ・・・つて蒼生さん。」

蒼生 「1人、良いか？」

明日香 「じゃああちらへ、」

そう言い俺が釣れられた場所はロツクの所だつた。

六花 「蒼生さん！ 来てくれたんですか？」

蒼生「そういう約束だつたろ?」

六花「ありがとうございます。じゃあやりましょう。」

そして俺とロツクのセツションが始まる。久しぶりにやつたが、その割にはなかなか良かつた気がする。

六花「ありがとうございました。・・・あ! そろそろ上がる時間ですね。じゃ一緒に講堂まで行きませんか?」

蒼生「分かつた。じゃあ廊下で待つてるぞ。」

そしてロツクと合流し講堂についタイミングで、

彩「文化祭、まだまだ行けますか?」

丁度文化祭記念バンドが始まろうとしている所だつた。俺達は席には座らず舞台袖へと移動する。記念バンドのサポートのお礼も兼ねて使つていいと言われていたからだ。そして着いたら異常に気づく。

蒼生「あれ? 花園は?」

沙綾「実はまだ来てなくて。」

香澄「おたえ・・・」

蒼生「何? 予定時間だつたらもうすぐ・・・まさか。」

アンコールか? さつき山吹にスマホを見せてもらつた時に R A I S E A S U I

LENの人気の高さは把握した。それが2日目ともなればアンコールの可能性は十分にありえる。

俺が考えている間に記念バンドの出番が終わってしまった。今は白金さんと日菜さんの指示のおかげで彩さんが辛うじて時間を稼いでいるが、テンパりまくつるので長くは持たないだろう。そして戸山は花園を迎えに行くと言い、行つてしまつた。

・・・こうなつたら、

蒼生「・・・ロツク。」

六花「蒼生さん？・・・まさか、」

蒼生「そのまさかだ。頼む、六花も付き合つてくれないか？」

六花「・・・分かりました。」

そして俺達はギターを取り出し、

蒼生・六花「行つてくる！（行つてきます！）」

有咲「ロツク!?」

りみ「蒼生くん！」

そして俺達はステージに立つと彩さんに前を変わつてもらい、

六花「羽丘一年、朝日六花です！」

蒼生「二年、神風蒼生です。」

蒼生・六花 「・・・ギターを弾きます！」

ロックはシユシユを外し、メガネを取る。俺は髪の毛を搔き上げる。これが2人のスイッチの入れ方だ。さつきセツションカフエでセツションしたので息は合つてゐるはずだ。

俺達は少しでもポピパが揃うまでにギターで時間を稼ごうとしていた。

そして二人同時にギターを鳴らす。一人ともロック系の感じで即興でよくセツションはしていたのでその感じが蘇つてくるのを感じる。そして演奏が終わる。

蒼生・六花 「はあ、はあ、」

しばらく沈黙が訪れる。しかしすぐに講堂は歓声に包まれる

アンコール！アンコール！

六花 「アンコール！？あわわわわ」

蒼生 「・・・じやあもう一回やる？」

と俺が言つた瞬間、背後でドラムの音がした。

あこ 「蒼生さん、六花。かつこよかつたよ。」

隣では白金さんがキーボードの準備をしている。そして舞台袖から今井さんが出てくる。

リサ 「それで、どうするの？」

燐子「poppin, partyが揃うまで繋げます。」

リサ「りょうかーい。」

友希那「勝手に始めるで。」

その声とともに下から湊さんと冰川さんが出てくる。

友希那「Roseliaの音楽は何時でも最高のものを奏でるべきよ。」

紗夜「誰か、ギターを。」

日菜「おねーちゃん! 使つて!」

紗夜「仕方ないわね。」

ここでRoseliaが全員揃つた。

友希那「少しだけ、私達にも付き合つてくれる?」

再び講堂がウエーブに包まる。そして俺とロツクがステージから去ろうとすると

友希那「ロツクだつたわ。後は私達に任せて。」

六花「!!、はい！」

蒼生「任せましたよ。」

そして俺達が舞台裏に戻つた瞬間Roseliaのステージが始まる。

蒼生「ふう、とりあえずお疲れ。」

俺は髪を戻しながらロツクに持つていたお茶を渡す。

六花「はい。お疲れ様です。・・・ポピパさん、大丈夫でしようか?」

蒼生「正直言うと五分五分だな。」

そして舞台裏の全員が戸山と花園の帰還を待つたが二人が帰ってきたのはステージ公演が終わってから5分後だった。

# 心の風向きは変わりやすい

蒼生 「お邪魔します。」

六花 「どうぞ、上がってください。」

俺は今ロツクの家にお邪魔している。最近文化祭でゆっくりできる時間が無かつたので、文化祭お疲れ様の意味も込めて、泊まりに来たのだ。大事な事だから2回言おう。泊まりに来たのだ！

六花 「えっと、お荷物はここに置いてください。」

蒼生 「ああ、ありがとう。」

そしてロツクは俺にクッショーンを指して座るように言う。そしてロツクは俺の膝の上に座る。

・・・あれ？

蒼生 「・・・いきなりだな。」

六花 「最近甘えられてなかつたものなので。」

蒼生 「それもそうだな。」

六花 「・・・そういうえばポピピさんは大丈夫だつたんですか？」

蒼生「・・・今は大丈夫とは言えないな。これからポピパ次第だな。」

実際俺も同じ経験をしてるのだ。言動が噛み合わないだけでバンドはバラバラになつてしまふ。それだけは避けてほしいものだが・・・

六花「す、すみません。ブルーな雰囲気にしちやつて。」

蒼生「気にするなよ。心配なんだろ?」

そう言いロツクに手を回す。まるで父親と娘みたいになつていてる。

六花「もつと強くしてもらつても大丈夫ですよ?」

蒼生「・・・なんかどんどん恥ずかしくなつてきた。」

二人きりの時に抱きつかれたりはよくしてるので、恥ずかしい事はあまり無くなつたが、こんな感じで抱きしめるのは初めてなので、ちょっと照れてしまう。

六花「じゃあ私からもいいですか?」

そして俺が返事する前にロツクは体の向きを変え俺に抱きついてくる。

蒼生「ほんとにロツクはハグが好きだね?」

六花「ふふ、蒼生さんだけですよ。はむ♪」

蒼生「うわあ!? ロツク!? //」

いきなりロツクは俺の耳をハミハミしてきた。

・・・最近こういうイタズラが増えてきた気がする。可愛いけど思いつきり体から力

が抜けしていくのが分かる。お返しとばかりに抱きしめてた手で脇腹をツンツンしたの  
だがこれが失敗だつた

六花「んん／＼んふつ、んん＼＼＼＼」

なんとロツクは耳を咥えるのを止めなかつたので息が耳にかかつてしまふのだ。し  
かし、ここで俺が攻撃を止めてしまふとロツクにイタズラされ放題になつてしまふの  
で、止めるわけにはいかない。

六花「んふふふ／＼んつ、んひゅひゅ＼＼＼＼」

蒼生「口、ロツク。そろそろ終わらないか＼＼＼＼もう、力が・・抜け、て・・・うお

！？」

六花「え？きやあ!?」

力が抜けきつた俺はロツクごと倒れ込んでしまつた。自分の体が下に来るようには  
したが、かなり気まずい体勢になつてゐる。わかりやすく言うとロツクが俺を押し倒し  
てるみたいになつてゐるのだ。

蒼生「ロツク、その、大丈夫か？＼＼＼＼」

六花「は、はい大丈夫です＼＼＼＼」

蒼生「なら良かつた。そ、それでだな、とりあえず離れよつか？」

六花「は、はい＼＼＼＼」

そして二人は離れたわけだが、とりあえず気まずい。何か話を変えた方がいいのか？いや、それで会話がぎこちなくなるともつと気まずくなる気がする……

六花「そ、その、蒼生さん。」

蒼生「え？ ああ、なんだ？」

六花「そ、その、飲み物取ってきますね／＼／＼

蒼生「あ、ああ。分かった」

そしてロックはこの部屋を出た。さつきは気まずい空気になつたけどなんだかんだ言つてロック可愛かつたな。出来ればさつきのをもう一回・・・って何考えてんだ俺はまた気まずくなるじやねえか。

蒼生「つていうかロック遅くないか？・・・！？」

六花「しばらくこのままでいさせてください／＼／＼

俺が後ろを振り向こうとした瞬間、ロックが背後から俺に抱きついてくる。

蒼生「ど、どうした急に？」

六花「・・・私、蒼生さんに無理させてませんか？」

蒼生「え？」

六花「さつきの事もですけど、私、蒼生さんに気を使わせてばかりな気がして、迷惑じやないかなって。」

蒼生「・・・ロツク？」

六花「はい。」

蒼生「俺は確かにロツクどころして一緒にいるときはほとんどロツクの事考えてるけど氣を使つてるとかは無いよ・さつきの事だつて俺が下に行かなかつたらロツクが怪我してたかもしれないだろ？当然のことをしただけだよ。」

六花「本当ですか？」

蒼生「勿論だよ。逆に聞くけどロツクは俺に氣を使つてるの？」

六花「え？そんなことないです！いつも自然体でいれて、幸せで、もつと一緒に居た  
いつて思えて・・・はーす、すみません、喋りすぎました//／＼」

蒼生「いいんだよ。ロツクはそう思つてるんだろ？俺も同じだよ。ロツクと一緒に幸  
せで、一緒にいたいつて俺だつて思つてるんだぞ？」

六花「ありがとうございます。あと、さつきはすみませんでした。」

蒼生「気にしないでくれよ。俺だつて似たような事してたんだからさ。」

六花「な、なので、その、お詫びと言うと変ですけど、キ、キスしませんか？」

蒼生「いや、ほんとに気にしなくても良いんだぞ？キスは、その、嬉しいけど、俺は  
さつきのもうちよつと続けてても良かつたと言うか・・・」

六花「え、ええ！//／＼」

蒼生「いや、忘れてくれ//それよりキスするんだろ?//」

六花 「はい。お願ひします//」

そしてロツクは俺に正面から抱きついてきて、目を閉じる。そしてゆっくり近づいてくる。俺もそれに答えるようにゆっくり近づき、そして二人の距離はゼロになる。

蒼生  
ん  
ん  
ん  
ふ  
!?

急にロツクが抱きしめていた手を俺の首筋に持つてきて撫で回し始めた。いや確かにさつきはもうちょっと続けたいとは言つたけどまさか本当にすることは。ロツクの細い指が器用に俺の首筋を走るたびにゾクゾクした感覚とともにキスしたときとは違う声が俺の口から漏れる。俺はロツクの膝から太腿にかけて両手を這わせる。

六花 「んん!? んふ／＼ふふふ！」

どうやらロツクはかなりくすぐつたがりらしいが俺も人のことは言えない。実際今もかなりキテいる。しかも二人ともギターをやつてるので指先が器用なのだ。だから根くらべみたいな感じになりそうなんだが、・・・これ遠くから見たら凄えシユールなんだろうな。

蒼生 「んん、んんふふつ／＼／＼」

ここまで互角だつだがここで形勢が変わる。俺がロツクの膝を5つの指で内側から外側へソワソワつてすると、

六花「んん!?ひうああ!!//」

蒼生「おつと、」

ロツクが勢いで倒れそうになるので抱きとめる。

蒼生「大丈夫か?」

六花「はい。何度もすみません。」

蒼生「気にするなよ。・・・それよりさ、今ロツクから離れちやつたよな?」

六花「え?は、はい。」

蒼生「じやあ罰ゲームかな?」

六花「え?ひやあ//」

抱きしめたまま脇腹を先程のようにつつくのではなく、指全てでこちよこちよする。ちなみに腕ごと抱きしめているので反撃される心配は無い。

六花「ひやあ、あははははは、あ、蒼生さん、や、やめ、んふふふふ//」

ロツクをくすぐるたび、ロツクの体が火照り、熱くなるのを感じる。めつちや可愛い。

六花「ん//ふわあ//んふふふつあははははははは、んん//」

・・・なんか変な声混じつてないか?一回そう聞こえてしまふとその声が聞こえるた

び意識してしまう。そして俺はくすぐる手を止めると、

六花「はあ、はあ、蒼生さん？／＼／＼

ロツクは火照りきつた顔で物足りなさそうにこちらを見てくる。

蒼生「・・・ロツク」

六花「蒼生さん／＼／＼

そして再度二人の距離が近づき、ゼロになる・・・と思つたのだがその瞬間、六花叔母「六花ちゃん、お菓子持つてきたけど食べるかい？あら？お楽しみだつたかい？邪魔しちやつたね。」

ロツクの叔母さんが入つてきてお菓子だけおいて行つてしまつた。勿論入つてきた瞬間二人の動きは固まり、一気に気まずくなつてしまつ。

蒼生「・・・ごめん、調子に乗りすぎた。」

六花「い、いえ、私はもうちよつとされてても／＼／＼・・・」

蒼生「え？」

六花「い、いえ何でもないです。」

蒼生「そ、そうか。つと悪い、電話だ。」

六花「あ、はい。どうぞ。」

蒼生「ありがとう。もしもし・・・は!?花園のは知つてゐるのか？・・・分かつた。そ

れじやあ。」

六花「あの？何かあつたんですか？」

蒼生「え？いや何でもないよ。それよりほら、お菓子持つてきてくれたし食べようよ。」

六花「はい！」

・・・参つたな。ロツクには絶対に言えないな。花園がR A Sに正式なスカウトを受けたなんて。

・・・ポピパはこれから大丈夫だろうか？

# 彼女と彼はもういちど

蒼生「お邪魔しましたー。」

六花「はい、またいらして下さい。」

俺はロツクの家に一泊し終えて、今日はこのまま学校へ行くことにしてる。学校は別々で行くことにした。変な噂が立つのを回避する為だ。

蒼生「じゃあ後でな。」ギュッ

六花「はい！」ギュッ

軽くハグを交わすと俺は学校へ向かつた。

放課後

俺は学校を終えたあと練習とは別の理由で蔵へ向かつていた。昼休みに市ヶ谷からこんな連絡が入ったからだ。

『今日、蔵に来れるなら来てくれないか？ R A I S E A S U I L E N のプロデューサーがポピパが揃うときに話がしたいって言つてたんだ。関係者もいれば連れてこいつて言つてたんだ。予定大丈夫か？』

という連絡が入っていた。特に予定も入つていなかつたので行くことにした。そし

て蔵につくとすでにそのプロデューサーは到着しているようだつた。

チユチユ 「これで全員かしら?」

香澄 「うん・・・」

チユチユ 「それじやあ早速こちらの要件を話します。結論から言うと、たえ 花園に poppin' partyを脱退してほしいのです。」

蒼生 「・・・それは花園をRASに引き入れる為か?」

チユチユ 「ええ、勿論よ。花園は2つのバンドを兼任するPowerが無いわ。だから正式にRASに入り花園は私のPerfectな音楽を奏てるギタリストとしてstartするのです。1つ頂いても?」

そしてチユチユはテーブルに置いてあるマカロンを指差す。

香澄 「う、うん。」

そして一息置いたあとチユチユが再び口を開く。

チユチユ 「・・・poppin' partyは友達同士で組んだバンドですよね? 友達思いの花園は、皆さんに遠慮しますよね?」

有咲 「・・・なんでおたえなんだ?」

チユチユが言うにはガールズバンドのトップに立つためのギタリストとして花園から適任と話す。確かに花園はポピパの中ではトップレベルの腕前を持つことは俺もサ

ポーターをしているので分かる。だがしかしチユチユの言い分も理解できなくもないが少々自分勝手過ぎる。花園はポピパのギタリストであり決してRASのギタリストでは無いのだ。サポートに入っていたとはいえそれを自分の物のように言うのは間違っている。

チユチユ「そちらの主催ライブが終わるまで待つてあげる。良い答えを期待しますよ。友達思いの皆さん。」

そう言いチユチユと隣のカラフルヘアは蔵から出していく。  
蒼生「花園、あんなの気に・・・」

するな。と言おうと思ったのだがその瞬間、山吹が、

沙綾「今じゃなくてもいいんじやない?」

有咲「もつとちゃんと考えた方がいいと思う。私も本当は、うるせえって叩き出そうと思ったけど、あいつおたえのこと、ちゃんと認めてるみたいだし、でつかい目標もあって、口だけじゃなくて、何も言えなかつた・・・」

たえ「・・・私、今日は1人で弾く。」

・・・この光景に俺はバラバラになるW i l d B a b yの姿がフラツシュバツクする。バラバラになつてしまふ一歩手前。もう二度と見たくないと思つていた光景だつた。しかしポピパには同じ思いはしてほしくない。

・・・でも俺が言えることはただ1つだな。

蒼生「・・・待て、花園。」

たえ「・・・何？」

蒼生「みんなも聞いてくれ。俺は前にお前達に俺のバンドの話をしたよな？喧嘩して離れたつて。もうちょっと詳しく言うと、俺ともう一人の意見と気持ちのすれ違いによつて起こつたことだつた。・・・だから俺は今のお前たちの気持ちが痛いほど分かる。だからこそ、これだけは言つておく。・・・これはpoppin, partyの問題だ。自分達の問題は自分達で解決するんだ。俺は何もしないし、言わないぞ。」

「「「「・・・」」」」

皆は俺の言葉を聞くと押し黙り花園は藏を出ていった。そして俺も藏を出る。俺があんな厳しいことを言つたのは、全員の真意が知りたかったからだ。これは自分達の気持ちで決めないと、多分また同じ事が起こつてしまふ。Wild Babyは自分達で決めきる事が出来なかつた。だから最悪の形になつてしまつたのだ。そんな事を思いながら俺はトボトボとCIRCLEに向かい、そのまま家に帰つた。

～翌日～

蒼生「・・・はあ。」

六花「蒼生さん？どうかしましたか？今日は溜め息が多いですけど・・・」

蒼生「え？ いや、何でもないんだ。 · · · なあロツク？」

六花「何ですか？」

蒼生「もし、もしだぞ？ 僕がもう一度Wild Babyとしてステージに立ちた  
いって言つたらどう思う？」

六花「え！ そ、そうですね。」

ん？ 何か今凄え慌ててなかつたか？ まあいいか。

六花「立つてくれるなら、もう一度で良いので見たいです。 Wild Babyでギ

ター＆ボーカルをやつていた蒼生さんが一番輝いてましたよ。」

蒼生「ありがとう。 · · · あいつら元気でやつてるかな？」

六花「 · · · やつぱり心配ですか？」

蒼生「そりやそうだよ。喧嘩別れしたとはい、別に嫌いになつた訳じやないんだか

らな。」

六花「 · · · 良かつた？」

蒼生「え？ どういうことだ？」

六花「へ？ い、いえ、こつちの話です。」

蒼生「ならないんだけど。 つと悪いL I O Eだ。」

六花「ふう、」

何故か安心した様子のロックが気になつたが俺はL○NEを開く。相手は花園だつた。

『助けてほしいことがあります。』

たつたそれだけだつた。この内容は多分俺がなにもしないと言つた事を承知した上で送つたものだろう。短いけど、しかしどしても重い文である事がわかつた。

『・・・分かつた。どこに行けばいい?』

そう送つたあと、

蒼生「悪いロック、急用ができちまつた。今日はこれで失礼するぞ?」

六花「い、いえ、私もこのあと用事があつたので。」

蒼生「そうか、じゃあまたな。」

そう言い俺は旭湯を出る。そしてスマホを開くと花園の家に来てほしいと書いてあつた。男が女の子の家に上るのは彼女持ちとしてどうかと思つたが、真面目な話つぽかつたのでそこは気にしないでいこう。

（4時間後）

俺は今、蔵に來ていた。花園は自分で答えを見つけたみたいだつた。花園と戸山はボピパのメンバーを全員集合させ、今に至るのだ。そして覺悟を決めた表情の花園が、たえ「自分の気持ち、全部込めました。聞いてください。」

そう言い花園の弾き語りが始まった。ただ、弾き語りをしてるんじゃない。花園の気持ちがこの歌に全部籠もつている。チュチュにいわれたこと、全員に考へるように言われたこと、ポピパでの思い出、そしてこれからのこと、全部をこの歌に答えを乗せてきた。

そして弾き語り画終わる。ただ皆は黙つて花園を見守る。

たえ「・・・私、ポピパが好き。香澄と、りみと、有咲と、沙綾と。」

有咲「・・・はあ、」

香澄「有咲？」

有咲「もう一回。」

たえ「え？」

有咲「今のがつて？」

たえ「・・・うん。」

そして再度、花園は歌い始める。すると、途中で市ヶ谷がキーボードで入つてくる。今は即興でやつてているからだろうが多少の違和感がのこるが、問題のない演奏になつているように聞こえる。

有咲「・・・私はさ、ポピパが嫌いじやねえし、バンドも結構楽しい。将来のことは分かんねえけど、5人でおんなじもんを目指して、いつか武道館とか行くのも悪くねえ

なつて思つてる。……でも本当のところ、おたえがどう思つてるか分からなくて、もしかしたら、ウチらとじやなくていいのかもつて思つて、でも全部分かつた。」  
そして市ヶ谷は涙ぐんだ目で

有咲 「でもさ、それで一曲作るなよ。おたえらしいけどさ。」 グスツ

たえ 「有咲！」

沙綾 「……私も、言えなかつた。向こうに行つてほしくないつて。でも、わがままかなつて、やつぱり私、駄目だね。言いたいこと、言えるようになつたんだと思つたんだけどな。……おたえ、行かないで。」

たえ 「……行かない。行かないよ、沙綾。」

沙綾 「うん……ありがとう、りみりん。」

たえ 「え？」

沙綾 「今日、ポピパやめるつて言われたら怖いなつて迷つてたら、一緒に行こうつて迎えに来てくれたの。」

たえ 「……りみ！」

りみ 「おたえちゃんがポピパ大好きなの知つてるもん。ポピパの事いつもいっぱい考えてくれて、ありがとう。私も、もつともつと頑張つてみんなの事支えたい！……ポピパでいてくれてありがとう！」

たえ「・・・私、私」グスツ

そして全員が花園のもとに集まる。

たえ「・・・蒼生、ありがとう。」

「「え?」」

たえ「さつき歌つた歌、蒼生が協力してくれて、すごいスピードで終わらせてくれたんだ。」

沙綾「蒼生・・・」

有咲「・・・お前、何もしないって言つたじやねえかよ。」

蒼生「・・・作曲はその事と関係ないだろ。」

そう、俺は花園に連絡を受け、数時間前に花園の家で作曲をしていた。今日には仕上げたいとか、無茶苦茶なことを言い出したが、脳をフル回転させ、花園のサポートもあり、ギリギリで全員が起きている時間に仕上げる事ができた。

蒼生「それにその結論を見つけたのはお前達だ。結果的に俺は何もしてねえよ。」

有咲「・・・そういう事にしといてやるよ。」

蒼生「じゃあみんな、これから主催ライブのことについて、つと悪い、電話だ。」

今日はよく連絡くるな。とか思いながらその電話に出る。

蒼生「もしもし、神風蒼生です。」

六花『もしもし、六花です。』

蒼生「ロック？どうしたこんな時間に？」

六花『えーと、そ、その、ものすごく大事な話があるので今から旭湯に来てくれませんか？』

蒼生「今から？いいけど。」

六花『ありがとうございます！失礼します。』

そう言い残し、ロックは電話を切る。くわしい内容は聞かされなかつたが、少し慌てていたし実は急いでるのかもしけない。ポピパの様子を見るとみんな感動に浸つているみたい出しそつとしてた方が良いかもな。

蒼生「じゃあ俺、予定できたから。・・・皆、頑張れよ。」

そして俺は蔵を出る。

～30分後～

旭湯につくとロックは銭湯側の玄関前で立つていた。中は薄暗く明かりがついている。

六花「すいません、こんな時間に呼び出して。」

蒼生「いや、気にしないでくれ。んで、なんの用だ？」

六花「入つたら分かります。」

そしてロツクは入口を指す。中に誰かいるのだろうか？

蒼生「・・・じゃあ入つていいか？」

六花「はい。どうぞ。」

そして暖簾をかき分け、中には行つた瞬間俺は驚愕した。

海斗「久しぶり、だな。蒼生。」

天音「ご無沙汰しています。」

蓮「・・・」

蒼生「なんで、ここにお前たちが・・・」

そこにいたのは他の何者でもない、W i l d Babyのメンバーだった。

# 蒼生の居場所

蒼生「なんで、お前たちが・・・」

俺は目の前にいる3人を目の当たりにして啞然としていた。喧嘩別れをしてもう一度と関わることはない、と思っていたのだが旭湯にて呆氣なく再開を果たしてしまった。

蒼生「ロツクが呼んだのか?」

六花「・・・はい。」

そうなるといくつか疑問が出てくる。どうやつてこの3人を連れてきたのか、何故連れてきたのか、何で3人はロツクの頼みで、わざわざ岐阜からここまで来てくれたのか。

蓮「・・・」

すると蓮が一步前に出てきた。俺はこいつとのすれ違いでWild Babyの喧嘩別れの原因を作つてしまつた。今更になつて俺は今、蓮になんて声をかけたらいいか分からなくなつていた。

蓮「・・・ごめん。」

蒼生「え？」

蓮「俺、お前に言つたよな。悠長なこと言つてる場合じやないつて。俺はそんなことを考え過ぎていて、たしかにお前の行つた通り落ち着くことを怠つてたんだ。だからW i l d B a b yがあんな形で終わつてしまつたのは俺のせいだ。本当にごめん。」

海斗「俺からも、すまなかつた。二人の喧嘩、止めることができなかつたのは、俺の責任でもある。」

天音「私もすいませんでした。せつかくの主催ライブ兼蒼生さんの最後のライブだつたのに、私が失敗を続けてしまつたせいで・・・」

蒼生「お前ら・・・」

蓮「・・・俺からお願ひがあるんだ。」

蒼生「その前に1つ、俺からも言いたいこともあるんだ。」

蓮「分かつた。先に言つてくれ。」

蒼生「・・・俺は、俺はさ、多分怖かつたんだと思う。俺は確かに蓮に落ち着いて演奏しようつて言つた。でもそれは怖かつたんだ。お前らと最後になるのが、主催ライブで俺達は離れ離れになつちまうのが。だから空回りして意見が食い違つたんだと思う。だから・・・俺からも、ごめん。」

蓮「・・・蒼生。」

蒼生「はは、でもあんな終わり方は嫌だつたな。出来ればもう一回やりたいな。なんて、夢物語か。」

六花「そんなことないです！」

そこで今まで黙つっていたロックが口を開いた。

蒼生「どういうことだ？ そもそもなんで、ロックはまたWild Babyを集結させたんだ？」

蓮「それは俺から説明するよ。俺がさつき言おうとしてた事とおんなじ事だから。」

蒼生「じゃあ頼む。」

蓮「まずロックがどうやつて俺たちを集めたかなんだが、わざわざロックが岐阜まで来て俺達を説得しに来たんだ。」

蒼生「何!? でも金とかどうしたんだよロック？」

六花「それは貯金しました。宿は実家があつたので対してお金は使いませんでしたよ。」

蒼生「なるほどな。」

蓮「続きを話すぞ。ロックは一日かけて俺たちを集めてもう一度Wild Babyを見たいって頭を下げたんだ。たつたそれだけの為に岐阜に戻ってきたんだ。」

ロックの方を見るとほんのり頬を赤らめて照れている。わざわざWild Baby

yの為に金出して岐阜まで行つてくれるとかどんだけ良い娘なのこの娘。

蒼生「でももう一度やるつたつてステージとか決めなきやいけないし色々時間を考へると俺らは今、住んでる所が違うわけだし厳しいんじやないか。」

蓮「ロツクはもう用意してるつて言つてたけど蒼生知らなかつたのか？」

蒼生「・・・は？用意してある？」

六花「はい。します。Galaxyです。」

確かにロツクはGalaxyで働いてるからつて考え方もできるけど、当人の意見無しで決められるものなのか？

六花「ちなみにポピパさんの主催ライブです。」

蒼生「・・・聞き間違えか？ポピパの主催ライブに出る？」

六花「はい。確かにそう言いました。」

蒼生「ポピパの奴ら俺にはなんも言つてなかつたぞ？」

六花「私がお願ひして黙つていてもらいました。」

いわゆるサプライズつてやつだ。つたくこいつらは。

蒼生「・・・うつ」グスツ

天音「蒼生さん！」

海斗「どうした？」

蒼生「悪い。またこの五人でやり直せるつて思つたら嬉しくてさ。」グスツ

蓮「泣くなよ。男だろ?」グスツ

そう言い後ろを向きながら俺に文句を言つているが泣いてるのはバレバレだ。見ると皆も涙ぐんでいる。

天音「実は今日の為に新曲、考えてきたんですよ。」

海斗「セトリもある程度まとまつてゐる。あとは練習だけつて所まで持つてきてる。」

蒼生「・・・本当、お前ら最悪だな。」

蓮「お前もな。俺達はこうじやなきや、ライブは最高にならないだろ。」

蒼生「・・・ホントに最悪だよ。お前等も、俺も。じゃあWild Baby、最後の人踏ん張りするか!」

「「おー!」」

六花「・・・良かつた。」

蒼生「ありがとな、ロツク。」

六花「いえ、私はただ皆を集めただけで後は何もしてませんよ。」

蒼生「それをしてくれなきや俺達はすれ違いつぱなしだつたよ。本当にありがとう。」

ギュツ

六花「・・・どういたしまして。」ギュツ

海斗「・・・おーい二人とも。」

天音「はわわわわ、蒼生さんとロツクちゃんってこんな関係でしたっけ？」

蓮「両思いってのは知つてたけどまさか実つてたとはな。つと、おい二人共、戻つてこいい。」

そして蓮は俺とロツクを引き剥がす。

蓮「お前等。よく人前でできるよな。」

蒼生「すまん。耐えられなくて。」

六花「私もその、ギュってされたらドキドキしちやつて//／＼

海斗「こりや重症だな。」

天音「す、素敵・・・」キラキラ

蓮「はいはい、じやあ俺達はこここの近くの宿屋で泊まつてから練習とかはまた後日決めようぜ。」

蒼生「ああ、分かつた。皆、またよろしくな。」

「「おう！（はい！）」」

そしてW i l d B a b yの時はまた少しづつ動き始めたのだ。

# Return S

俺は今蔵に来ている。その理由は2つだ。1つ目はいつもみたいにポピパの練習。もう1つは、

蒼生「こいつらがWild Babyの・・・」

蓮「神代 蓮だ。よろしく。」

天音「妹の神代 天音です。」

海斗「暁 海斗、よろしくな。」

Wild Babyをポピパに紹介するために来た。主催ライブに出演させてもらうのだから、お礼も兼ねて連れてきたのだ。

沙綾「この人達が・・・」

有咲「Wild Baby・・・」

たえ「すごい、4人そろうとすごいオーラを感じる。」

蒼生「いや出てねえから。それより皆、Wild Babyをポピパの主催ライブに出来させてくれてありがとう。Wild Babyの代表として礼を言うよ。」

りみ「ううん、気にしてないで。私達も蒼生くんのバンドとしての演奏も見たかったし。」

香澄「皆でキラキラドキドキしようね！」

蒼生「おうよ。じゃあ練習始めるか。市ヶ谷ちょっと俺たちの練習もしていいか?勿論お前達の練習も見るぞ?」

海斗「そういうやつがそんな事言つてたな。5バンド引き受けて金稼ぎしてるらしいじゃないか。」

蓮「そいつがそんな事言つてたな。5バンド引き受けてるそうじゃないか。他にはどんなバンドなんだ?」

蒼生「あー、ほら!すぐに主催ライブの顔合わせするんだし説明するより聞いたほうが早いと思うぞ?」

蓮「それもそうか。」

天音「どんなバンドか楽しみです♪」

俺が今濁したのには理由がある。俺達Wild Babyは実は4人共バスパレのファンなのである。ロツクが俺にはWild Babyが待つてているというサプリーズを施したが、メンバーの皆にはバスパレと会わせることで、サプリーズをしたいのだそうだ。勿論バスパレに話は通してある。

蒼生「じゃあ皆やるぞ！」

「「おう！（はい！）」」

香澄「じゃあ私達も始めよう！」

～2時間後～

蒼生「ふう、とりあえず休憩。」

蓮「あ～疲れた。」

海斗「久しぶりに合わせたからか若干音ズレもあつたな。」

天音「私、飲み物持ってきたので皆さん飲んでください。ポピパさんもどうぞ……ポ

ピさん？」

天音が不思議そうにポピパを見ていたので俺たちもポピパを見ると、一足先に休憩に入つたポピパの面々は口をパクパクさせたり、見開いた目でこちらを見ていた。

蒼生「・・・どした？」

有咲「これが本当に久しぶりの演奏かよ・・・」

たえ「全くブランクを感じなかつた。」

蒼生「それでもまだまだだよ。R o s e l i a ジやないけど俺達は俺達が出せる音を出したいからな。まだバラついてる。」

沙綾「じやあ向こうにいたときはもつと凄かつたつてことだよね?!」

蒼生「まあそうだな。良い言い方をするとそうなるな。」

りみ「そういうえば蒼生くんはWild Babyはそれなりに大きい大会に出たことがあるつて言つてたけどどんな大会に出たことあるの?」

蒼生「1番大きいのだと【FUTURE WORLD FES】かな。」

有咲「え! それってRosaliaが目指してた大会のことじゃねえか?」

蒼生「ああ、だからRosaliaには黙つてる。いろいろ聞かれたら面倒だし決していい結果だつた訳でもないしな。」

蓮「あ〜あれか。審査員が『君たちは技術はあるがつまらない。』ってだけ言つてきたんだよな?」

海斗「そうちつたな。だからその後みんなでパフォーマンスの練習とかしたけど結局どういう意味だつたんだろうな?」

天音「いま気にしても仕方ないですよ。ところで蒼生さん、Rosaliaつて蒼生さんが見てるバンドですか?」

蒼生「ああ、FWFの為に技術を高めてる。多分5バンドの中で1番レベルが高いと思う。」

たえ「FWFに出て、つまらないつて言つて凹まなかつたの?」

蒼生「確かに良い気はしなかつたな。でもそれでショーンボリしてたら、出せるいい音

も出せなくなる。俺達は常にベストコンディションでいる事が最優先だからな。」

有咲「なんつうか、凄えな。」

沙綾「私達、実は結構凄い人に教わってたのかも。」

蒼生「はいはい、もうこの話は終わり。練習するぞ。」

話が変な方向に行く前に、練習を再開する。ちなみにFWFの件はしつかり口止めした。

「数日後」

まりな「じゃあポピパの主催ライブのポスターは入口と中の掲示板に貼つておくね。」

蒼生「ありがとうございます。」

俺は今、ポピパの主催ライブの宣伝ポスターを色々な所に配つたり貼つたりしている  
ちなみにこのCIRCLEで最後だ。

まりな「それにしてなんでポピパをうちに主催させなかつたの？？」

蒼生「す、すみません。色々ポピパも俺も忙しかつたもので。」

まりな「え、まあいつか。そのかわり、今度なにかライブある時はうちに誘つてよ

？」

蒼生「わかりました。善処します。」

するとCIRCLEのドアが開く音が聞こえた。

蓮「よ！」

海斗「来たぞ！」

天音「すみません、少し遅れました。」

W i l d B a b y の面々が入ってきたのだ。

蒼生「いや、ギリ時間ピツタリだ。心配すんな。」

まりな「お！ その子達がもしかして蒼生くんのバンドメンバー？」

蒼生「はい。W i l d B a b y です。」

まりな「そつかそつか。うんうん。蒼生くんの実力の理由がわかつたよ。」

蒼生「え？」

まりな「私、全員の顔は知らなかつたけど名前だけなら知つてるんだよ？ 結構大会とかも出てたから。」

蒼生「そういう事ですか。あんまり広めないでくださいよ？」

まりな「わかつてるよ。」

天音「あの、蒼生さん。」

蒼生「ん？ どした？」

蓮「聞いて驚くなよ。なんと天音が新衣装を作つてきてくれたのだ！」

海斗「なんでお前がドヤ顔なんだよ。でも新衣装ができたのは本当だよ。」

蒼生「マジ!? サンキュー天音。まりなさん、更衣室借りていいですか?」  
まりな「うん、いいよいよ。」

蓮「お前気が早すぎだろ。」

天音「そういえば。新衣装ができた時に1番テンション高くなるの蒼生さんでした  
ね。」

海斗「しかも1番似合うのも蒼生だもんな。」

蒼生「いいから着替えようぜ!」

海斗「はいはい。」

（5分後）

天音「うん! みんな想像通り似合つてます!」

蓮「おお! 久しぶりに帰ってきたって感じがするな!」

海斗「確かにな。気合い入るよな。」

蒼生「その気合いは本番までとつとけよ。」

海斗「分かつてるよ。所でG a l a x yまでこの格好で行くのか?」

蒼生「え? だから着替えたんじやないのか?」

海斗「いや、目立ちすぎないか?」

蓮「別にいいんじゃない? 別にそう遠くないんだろ?」

蒼生「ああ、商店街の中だからな。」

天音「私も兄さんと蒼生さんに賛成です！」

海斗「・・・じやあいいか。」

そして俺達はなんだかんだCIRCLEを出た。

（10分後）

蒼生「ついた、ここだよ。」

蓮「おお！地下だ。」

天音「地下って聞くとワクワクしますね！」

海斗「確かに何などなく分かる気がする。ちなみになんでさつきから蒼生はチラチラ

スマホ見てるんだ？」

蒼生「え？いや、なんでもねえよ。」

海斗「？？ならないんだけど。じやあ行くか。」

俺がスマホを見てたのはLINEをしていたのだ。俺達が1番最後に来るようになるためだ。

まず入り口にポピパとAfterglowがいた。

蒼生「Wild Babyです。今日はよろしくな。」

香澄「うん！こちらこそありがとうございます！」

蘭 「いつも偉そうにしてるんだからそれなりの音は出せるんだよね？」

蒼生 「ああ、勿論だ。」

蘭 「楽しみにしてるよ。」

そう言い、2バンドの面々は中には行つていつた。

天音 「蒼生さんつて偉そうにしてるんですか？」

蒼生 「まあ教える側になるとどうしてもそうなつちやうのかもしれん。」

蓮 「はは、でも一応信用はされてるみたいじやん？」

海斗 「まあ確かに蒼生の聞きの才能は凄いからな。」

蒼生 「いいから行くぞ。もう時間ないんだから。」

話をそらし中に入る。中にはR o s e l i aとハローー、ハッピーワールド！、ロツク

に店長さんがいた。

蒼生 「W i l d B a b yです。よろしくお願ひします。」

友希那 「W i l d B a b y！」

なんだ？急に湊が驚いた声を出す。・・・まさかな。

友希那 「W i l d B a b yつて、じやあ貴方、F W Fに出た事が？」

：：そのままかだつた。大した結果でもなかつたのに俺達を知つてたとは、結構隅々まで結果の確認をしていたのだろう。

蒼生「・・・ああ、そうですよ。」

友希那「後で詳しく述べて頂戴。」

蒼生「わかりましたよ。でも別に高評価を受けたわけじや無いですかね？」

友希那「ええ、だとしても出場したということは実力は持っているはずよ。」

蒼生「わかりました。じゃあ主催ライブが終わった後、いくらでも聞いてください。まさか把握しているとは予想外だった。隠し通そうと思っていたが無理だったようだ。」

「こころ「蒼生！ 来たわね！」

蒼生「相変わらず弦巻は元気だな。」

「こころ「勿論よ！ 私達は世界を笑顔にするバンドよ！」

六花「蒼生さん、おはようございます。」

すると横からロツクが出てきた。

蒼生「おはようロツク。」

六花「はい、皆さんもおはようございます。」

蓮「おはよう。今日は頼むな？」

天音「ロツクちゃんおはよう。」

海斗「完璧になんとか仕上げたからな、期待していくれ。」

六花「はい！」

蓮「そういえば蒼生、全部で6バンドって言つてたけど後1バンド来てないぞ？」

蒼生「いや、もう来てるぞ？」

海斗「は？ でもここには5バンドしか・・・」

天音「あ！あのドアの向こうですか？」

蒼生「流石、天音は察しがいいな。その通りだ。あの向こうにもう1バンドいるよ。」  
そう、こいつ等に一番会わせたかつた奴等だ。

蒼生「じゃあ呼んでくるよ。」

そしてドアを開ける前に、

蒼生「そうだお前ら、心臓の準備はしておいた方がいいぞ？」

蓮「どういうことだ？」

蒼生「開けたらわかるよ。じゃあ開けるぞ。」

みんな訳のわからなそうな顔をしている。ちなみにWild Baby以外の人は  
ニヤニヤしたりしている。全員に事情は言つてあるからだ。

そしてドアを開ける。するとまず最初に、

彩「まんまるお山に彩りを！ Pastel\*Pallettesふわふわピンク担当の

丸山彩です！」

蓮「・・・え？」

千聖「いつも蒼生くんにはお世話になっています。」

天音「・・・へ？」

麻弥「フヘヘ、上から読んでも下から読んでもやまとまや、大和麻弥です、」

海斗「・・・うえ？」

イヴ「ブシドー！」

日菜「るん♪つてきた～！」

「「え！――――」」

蓮「蒼生!? どどど、どういうことだ!？」

天音「夢!? 夢なんですか!?」

海斗「なんでパスパレがここに・・・」

蒼生「あ、結果から言うと、パスパレも俺が教えるバンドの1つなんだよ。」

蓮「んな!?」

天音「蒼生さん、いつの間に!?」

海斗「ありえねえ。」

彩「えーっと、みんな私達のファンなのかな?」

「「ひ、ひやい」」

お！皆仲良く締まりのない返事。

千聖「いつも応援ありがとうございます。これ、いつも蒼生くんにお世話になつてるのでメンバーの皆さんにも、これどうぞ。」

そして渡したのは最近発売したシングル（パスパレメンバー全員のサイン入り）だつた。ちなみにすでに俺は持つている。

その後みんなは握手したり話ししたり大ハッスルだつた実はこの時間を取りため皆には少し早めに来てもらつた。俺らも早めに来たがこの時間の確保のためだ。皆喜んでくれたようで何よりだ。

蒼生「じゃあそろそろリハしようぜ。その後たっぷり話してくれていいから。」

その言葉で全員の顔が変わる。別に気合いが入るような言葉でも無かつたがみんなにとつては十分だつたようだ。

そして各バンド順にリハを済ませていく。最後のポピパの番、リハ曲は【Returns】だつた俺が作曲した花園がポピパに対する思いを歌つた歌だ。ポピパにしてはしつとりとした曲だが感動するという意味では凄く盛り上がる曲だろう。

そして演奏終盤に差しかかる。これで終わりか、と思つたが、アウトロが少し長い。花園と戸山以外少々驚いた顔をしている。内心俺もちよつと驚いているが、そして戸山が付け足した歌詞はこうだつた『ありがとう　心から震えだす歌 Returns』こ

の短い歌詞にとても重い意味が込められたのを感じた。そして曲が正真正銘終わる。  
そして他バンドからの拍手が飛んでくる。

六花 「ポピパさん、なにか修正点はありますか？」

香澄 「大丈夫！」

六花 「はい！これでリハは以上になります。お疲れ様でした。」

そして今日のリハが終わつてみんな帰宅準備、と思つたのだが、  
香澄 「ねえ！ Wild BabyもReturnsやつてよ！」

蒼生 「はい？なんでした？」

市ヶ谷 「そうだよ。あんまり無理言つて蒼生を困らせるなよ？」

たえ 「でも私も聞いてみたいな。」

蒼生 「なんでだよ。別に文句がある訳じやないが、この歌はポピパの曲だろ？」

たえ 「でも作曲したのは蒼生だよ？」

蒼生 「・・・」

蓮 「いいじやねえか。」

蒼生 「蓮・・・」

天音 「私も賛成です。」

蒼生 「・・・天音」

海斗「俺達はまたこうして揃つた。つまりReturnsしたんだからいいんじやないか?」

蒼生「・・・海斗」

「「それは色々間違つてる。」」

海斗「あれ?いいと思つたんだけどな?」

蒼生「はあ、分かつたよ。1回だけだぞ。」

そう言うと、ポピパ以外のバンドからも拍手が沸き起つた。俺は髪の毛をかき上げると、

蒼生「じゃあ聞いてください。Returns。」

この瞬間俺は自分の居場所に戻ってきたのを感じた。

# 永遠の仲間たち

今日が主催ライブ当日だ。俺はそれぞれのバンドの仕上がりの確認、自分のバンドの最終チェック、サポーターとして主催ライブの準備をしていたため俺は徹夜だった。もしかしたらボピパ以上に働いたかもしれない。

蒼生「あ」—疲れた。」

沙綾「ごめんね。ボピパじゃないのにここまでしてもらつて。」

蒼生「いや、別に徹夜が初めてつてわけじやないからな。それにサポーターとしてやれる事をやつてるだけだよ。」

沙綾「つて言いながら凄い眠〇打破の数じやない？」

蒼生「・・・眠いもんは眠いんだよ。」

香澄「さくや、手伝つて。」

沙綾「ごめん、呼ばれたから行くね？」

蒼生「おう、皆にこの眠眠〇破持つていつてやれよ。」

沙綾「ありがとう。また後で。」

そして山吹は人数分の〇眠打破を持つていくと戸山の元へと向かつていった。そし

て入れ替わるように、

六花 「蒼生さん、お疲れ様です。」

蒼生 「ロツク、お疲れ。」

六花 「ありがとうございます。これ一本貰つていいですか?」

蒼生 「ああ、まだストツクあるから大丈夫だ。」

そしてロツクは眠眠打〇をグツと飲み干す。

六花 「ふう、生き返ります。」

蒼生 「だよな。やつぱ徹夜はこれに限る。」

六花 「でもまだ足りない感じです。」

蒼生 「栄養的なものがか?もう一本飲む?」

六花 「あの、そうじやなくてですね、その、蒼生さん成分が足りないんです//」

蒼生 「そ、そうか//じやあ、ほら。」ギュツ

六花 「ありがとうございます//」ギュツ

最近甘えさせられてなかつたから、人肌恋しかつたのかもしれない。

六花 「やつぱり蒼生さんにくつついてると安心します。暖かくて、身長も高くて、格

好良くて。」

蒼生 「そこまで言われると照れくさいけどありがとな。俺もロツクに抱きついてると

安心するよ。あと、ありがとうな。Wild Babyのこと。」

六花 「いえ、気にしないでください。私が聞きたかつただけなので。」

蒼生 それでもだよ。ロツクが行動してくれなきゃ俺達は離れ離れのままだつたよ。

六花「んん//チュツ、んんん////ぶはあ。えへへへ。蒼生さん大好き♡」

蒼生「俺も大好きだよ。ロツクの為にもライブ頑張らなきやな。」

六花 「はい！じゃあ仕事があるので行きますね。」

蒼生一ああ頑張れよ】

そしてロックが行つたタイミングで、出演バンドが次々とやつてきました。

蘭「Wild Baby、期待してるから。」

「お！蘭が期待してるって珍しいな。でもアタシも楽しみだな。」

卷之九

蒼生「おー！サンキュー青葉。美竹も宇田川も、期待してくれよな。」

ひまり「んん、気合い入つてきたね。」じやあ皆、頑張ろうね！せーの、えい、えい、

お  
！

「「「「・・・」」」

そして次にバスパレが入ってきた。

彩 「あ！蒼生くん、おはよう。今日はよろしくね。」

千聖 「お互い素晴らしい演奏にしましょう。」

麻弥 「終わったらWild Babyが使ってる機材とか教えてくださいね。フヘ  
ヘ。」

イヴ 「今日はブシドーで頑張りましょう！」

日菜 「蒼生くん、るん♪つてくる演奏にしようね。」

蒼生 「はい。もちろんですバスパレの皆さんも頑張つてくださいね。うちのメンバー  
の奴らもバスパレの演奏楽しみに来ているはずなので。」

彩 「あはは、何か緊張しちゃうな。」

千聖 「期待に答えられるよう、頑張るわね。それじゃあ皆、行きましょうか。  
そしてR o s e l i aが来た。」

紗夜 「蒼生さん、おはようございます。」

リサ 「おっはよ♪☆今日はよろしくね♪。」

燐子 「お、おはようございます。」

あこ 「ふつふつふ♪。わらわの中に秘められた闇の力が・・・えーと。」

友希那「あこ、いいから行くわよ。蒼生、FWFの話、後で詳しく聞かせてもらうわよ。」

蒼生「わかつてますけど、望むような話はできないと思いますよ。」

紗夜「それでも出場者の話は貴重ですから。よろしくお願ひします。」

そしてハロハピが来た。

こころ「蒼生、やつほ！」

はぐみ「あおくん！うちのコロッケだよ。」

薰「おはよう蒼生。僕い演奏を期待しているよ。」

美咲「薰さん、僕い演奏つて意味わからないから、神風さん、気にしなくていいからね。」

花音「でもいい演奏期待してるね？」

蒼生「ええ、こちらこそ。僕くなるかは分からないです、頑張ります。ハロハピも頑張ってください。」

花音「うん、ありがとう。」

美咲「じゃあ皆さん、行くよ。」

そして最後に、

蓮「よ！蒼生。」

天音 「おはようございます。」

海斗 「大丈夫か？ 凄えクマだけど？」

蒼生 「気にすんな。10分寝りや治るから。」

海斗 「お前の場合それでほんとに治るから怖えよ。」

蓮 「じやあ先行つてな。」

天音 「これ、よかつたら使つてください。」

そして天音は10〇チャージをくれた。

蒼生 「サンキュー。仮眠したあとに飲むよ。」

そして今日の出演バンドがすべて揃つた。俺はポピパと店長さんに揃つた報告をすると、仮眠に入った。

（15分後）

俺は5分前に起きて全員を集めて、円陣を組む。掛け声は戸山に会わせて、

『ポピパ！ ピポパ！ ポピパ パピポパ！』

そしてライブが始まる。ポピパの番だ。そしていきなりReturnsを始める。

蒼生 「あれ？ 確かココつて H A P P Y H A P P Y P A R T Y ! ジやなかつたつけ

？』

海斗 「これいきなりステージ熱し過ぎじやねえか？」

巴 「でもこれを覚まさないのがアタシたちの腕の見せ所だな！」

こころ 「だつたら私達に任せて！」

そしてそのタイミングで Returns が終わってポピパがステージから降りて、すぐにハロハピが出てくる。そしていきなり新曲の「えがお・シング・あ・ソング」を披露する。つてこれ3曲目じやなかつたつけ？しかし照明をこの曲に瞬時に合わせたロツクは流石だと思う。

そして演奏を終えたあとパスパレがでてくる。そしてパスパレの新曲を披露した。

蓮 「おお！ 淫え！」

天音 「私達、パスパレと同じステージに立てるんですね！」

海斗 「やべえな！ テンション上がるな！」

まあ皆もご満悦なようだからいいか。

次に Afterglow だ。まあ予想していたがやはり新曲、「ON YOUR M A R K」を1曲目に持つてきていた。Afterglowらしいアップテンポな曲調になっている曲だ。

次に Roselia が出てきた。そして Roselia までもが1曲目に新曲を持つてきた。この曲は最初はゆっくり入っていくのだが、徐々に盛り上がり最後には湊さんの超ハイトーンボイスで終わる曲だ。流石のクオリティーと言わざるを得ないだ

ろう。

考えていた内に気がつけば俺たちの番になつていた。

蒼生「じゃあ行くか！」

海斗「ああ！最高のステージにしよう！」

天音「あの日出せなかつた音は。」

蓮「今日、全部出しきろう！」

全員が意気込みをしたところで俺は

蒼生「じゃあ、ほんとに行くぞ！」

「「「おー！」」

そして俺はステージに立つ久しぶりのWild Babyとしてのステージだ。

蒼生「Wild Babyです。」

すると観客席から凄い声援が上がる。中には俺達を知つてゐる人もいたようで数人俺たちの名前を叫んでゐるのが聞こえる。

蒼生「久しぶりにステージに帰つてきました！それは今日出演させてくれたpoppin', partyのおかげでもあります。そしてpoppin', partyを祝し、色々な人達への感謝を込めて歌います！聞いてください。【Eternal compation】

そして俺達のステージが始まる。この日のために用意した新曲だ。結局俺達も相談した上、1曲目に新曲を持つてることにしたのだ。ロツクはもう慣れたのか。素早い手付きで照明をしてくれている。そしてメンバーの奴らも。いい顔をしてそれぞれの楽器に向き合っている。

蓮（あの日、俺のわがままのせいでのグルーピーを崩壊させてしまった。もうこんな思いはしたくない！だから俺はWild Babyとして焦らず落ち着いて皆の気持ちに答えるべきやいけない！）

天音（兄さんと蒼生さんが喧嘩した日はどうなる事かと思ったけど、またこうして色々な人達のおかげでステージ立てた。私はやっぱりWild Babyが好きなんだ！）

海斗（俺の実力不足もあつてこのバンドの雰囲気を壊してしまった。二人の喧嘩は俺が原因でもある。でも、今はそんなWild Babyの力になれてるなら、それって幸せだな。）

蒼生（皆の音が共鳴している！まるで1つの生き物みたいに！やっぱこれがWild Babyだ！俺達はもう離れ離れにはならねえだろう！）

そして俺達のステージが終わつた。そして楽屋に戻ると、

天音「ううつ、ふえくくん」

急に天音が、泣き出した。

蓮「天音!? どうしたんだ?」

天音「すみません、グスツ、ライブが出来たのが嬉しくて、」

海斗「それは皆同じだよ。これが最後なんて勿体無いくらいさ。」

蒼生「・・・なあ皆。」

そしてメンバー全員がこつちを見る。

蒼生「今日のステージ、最高だつた。でもうたえба歌うほどもつと歌いたいって気持ちが強くなつていつたんだ。だからさ、その、住む場所は違うけどさ、またライブしうぜ!」

蓮「・・・蒼生。ああ! 勿論だ。」

天音「はい! まだまだ終わりませんよね!」

海斗「今度はそつちから遊びに来てくればよ。」

蒼生「おう! つと皆ポピパ始まるぞ。」

そして皆はポピパのステージに見入つていた。この短期間で高い壁に何個もぶつかつたポピパだが、それを乗り越えてこのステージに立つてゐる。それつて凄いことだ。俺達はその壁を乗り越えられなかつたのだから。

そしてポピパのアンコールも终わりポピパの主催ライブは無事に幕を下ろす事がで

きた。

そして帰り道6バンド全員で帰宅していると、例のチュチュとその側づきのパレオが出て来た。

パレオ「ほら、チュチュ様。」

そしてパレオはチュチュに何かを言わせようとしている。正直嫌な予感が半分期待が半分つてところだが、

チュチュ「音楽で一瞬でも私を感じさせるなんて、あんた達、全員ぶつ潰してやるんだから！」

・・・嫌な予感の方だつたらしい。

## 第2章

### B a n G D r e a m !

蒼生「ふわあ」

みんな久しぶりだな。神風蒼生だ。ポピパの主催ライブから約3ヶ月たつた。この間は色々あつた。R o s e l i a の合宿に連れてかれてロツクに妬かれたり、パスパレの夏の無人島番組の感想聞きに行つたらロツクに妬かれたり、ハロハピの動物園ライブに何故か俺も壇上に上げられて、仕方なくギターしたらロツクに妬かれたり、あれ? ロツクに妬かれてばかり? 気のせいか。

蒼生「へっくし!?

ちなみに今は朝の5時半。俺は外に出ている。なぜこんな早くに出ているかと言うと、

蒼生「どうもー?」

六花「あ、蒼生さん! おはようございます。」

六花に会いにきた。最近オープン前の旭湯の手伝いをしに来てる。いつもは九割

ロックに会う目的で来ていたのだが、今日はちょっとした報告も兼ねて。

六花 「そう言えば蒼生さん、あれ受かりましたか？」

蒼生 「おう。」

六花 「わあ！おめでとうございます！」

あれ、というのは原チャリの免許だ。なぜ原チャリかつて？行動範囲が広まればロックとの手軽に行けるデート範囲が広がるし、ドライブデート？みたいな事もできるからだ。ちなみに本人には言つてない。

六花 「でも、羽丘つて原チャリ登校つて大丈夫でしたつけ？」

蒼生 「さすがに自転車でいくよ。所で、乗つてみたくない？」

六花 「わ、私が!?」

蒼生 「そうそう。後ろにさ、スピード落とすから。」

六花 「そ、それなら、じやあ掃除終わらせましょうか。」

蒼生 「はいよ。」

それからは掃除も手早く終わらせ自由をもらう。

蒼生 「いくぞ？」

六花 「はい！」

ぎゅっと抱きついてくる。あかん、なんか、柔らかいのが当たつて……気にするな、

俺！そこからエンジンを入れ、自転車より少し早いくらいのスピードで走る。

蒼生「どうだ？」

六花「す、少し怖いですけど、楽しいです！」

蒼生「もう少し飛ばすぞ？」

六花「は、はい！」

これは、免許とつて良かつたな。今度また乗せてあげよう。

蒼生「ふう、こんなもんかな。」

六花「ありがとうございました。凄く楽しかつたです！」

蒼生「こつちこそ、ありがとうございます。じゃあまた後で、学校で。」

六花「あ、そ、その前に、その／＼／＼

蒼生「ん？あ、あれな。わかつた。ちゅ」

六花「ん♪あ、ありがとうございます／＼／＼

蒼生「おう。じゃあまた後で。」

最近は口ツクからのキスのおねだりも多くなつたような気がする。本人はまだ緊張してるけど、俺は幸せの方が大きくなつたかな。六花も、俺も。少しずつだが恋人としても成長している。成長といえば、R A S。成長したポピパを見て、ぶつ潰す宣言してたけど、どうする気だろう。あれから姿見ないし、まあ、いいか。

（放課後）

六花 「蒼生さん！」

蒼生 「お、ロツク！」

六花 「一緒に帰りませんか？」

蒼生 「すまん。今日ポピパの練習日でさ、このまま直行しないといけないから、途中までになるけど。」

六花 「それでも、帰りたいです！」

蒼生 「おーけー。わかつた。じゃあ行こつか。」

俺は自転車を押して歩き出す。

蒼生 「そいや最近のバンドメンバー集め、どう？」

六花 「それが、上手くいってなくて・・・」

蒼生 「そつか・・・何かあつたら言えよ。絶対協力するから。」

六花 「はい、ありがとうございます。あ、もう着いちやいましたね・・・」

蒼生 「そうだな・・・ロツク？」

なんか、モジモジしてる？

六花 「あ、あの、今周りに人いないので//／＼」

蒼生 「なるほどな。ほら、おいで？」

手を広げてやると、もふつと抱きついてきた。

六花 「はふう、落ち着くわ！」

蒼生「よしよし、ロツク」

六花「はい♡」

少しずつ顔を近づける。

有咲「こらあ！人の家の前で何やつてんだー！」

六花 「あわわわわ、す、すいません！」

蒼生  
・・・  
悪かつた  
//

有咲「つたく、行くぞ！」

蒼生「お、おう」

ちゅ、とこつそりキスをして口ツクと分かれる。

蒼生「もう全員いるのか?」

有咲 「ああ。今日は全員の予定がたまたま会つてな。」

蒼生「そうか。なら今日は渉りそうだな。」

そのまま蔵に入る。

香澄 「あー、蒼生くん来たよー！」

たえ「久しぶり。」

蒼生「おう、久しぶり。」

そう言えば花園とはバイトかぶりとかで会う機会無かつたな。  
りみ「あ、ねえねえ蒼生くん！これみて！」

蒼生「ん？これは、バンドリ、ガールズバンドチャレンジ？」

沙綾「そう。ガールズバンドを集めた大会なんだつて。決勝はなんと武道館！」

蒼生「おー！出るのか？」

香澄「もつちろん！」

蒼生「なら今日からそれに向けた練習だな。新曲も考えた方がいいだろ」

有咲「また新曲か・・・忙しくなるな。」

たえ「がんばろー！」

香澄「おー♪」

???「お邪魔します♪お戯れ中すみません♪」

六人「?」

そこにいたのは

蒼生「あんたは、パレオ、だつたか？」

パレオ「はい！覚えていただいて恐縮ですー」

有咲「ふ、不法侵入！」

パレオ「ちゃんと門を通つておばあ様に案内して頂きました！」

蒼生「まあ、それはいいとして、今日はなんですか？遊びに来たつてわけじゃないだろ？」  
パレオ「はい、ポピパの皆さんと、神風蒼生さん、あなたがたにこれを！」

蒼生「ん？」

猫型の封筒を渡される。

蒼生「これは、R A Sのライブチケット？」

パレオ「はい！是非いらしてください！それではー」

ポピパ「・・・」

蒼生「お前ら、これ行くのか？」

沙綾「うーん・・・」

りみ「えーっと・・・」

有咲「・・・」

まあ、複雑ではあるだろうけど、心配はないだろう。なぜなら  
たえ・香澄「行く！」

有咲「・・・はあ、そうだよな。」

りみ「う、うん！ちょっとこわいけど、行こう！」

沙綾「まあそだよね。行こつか。蒼生くんも来るんでしょ？」

蒼生「もちろん。アイツらのことも少し気になるしな。」

たえ「気になるつて？」

蒼生「まあ、多分後にわかるさ。そんなことより今は練習すんぞー。」

「ライブ当日」

蒼生「まさか、ロックまで誘われてるとは・・・」

六花「はい、でもなんで私なんでしょうか？」

蒼生「俺に聞かれてもな。って、入場始めたみたいだぞ？」

当日。ポピパと、他にも誘われていたらしいロックとR o s e l i a の面々と入場する。俺らは特別席。要は2階らしい。

友希那「・・・始まつたわ」

R I O T が始まる。ギターは打ち込みだろうがそれにしたつてなかなかの演奏力だ。R o s e l i a と同等のレベルを誇つてる。そしてR I O T の演奏が終わるとドラムの、確かマスキングつて言つたか。ドラムソロが始まる。正確に、そしてリズミカルに叩かれるドラム。・・・佐藤ますき。二つ名は狂犬。独走力は流石つてわけだ。そう考えていると

チユチユ「ハロー、エブリワン！」

R A S のボス。チユチユが出てきた。

チユチユ「アンコールの前に一つお知らせ、私たちRAISE A SUILENは、  
バンドリ、ガールズバンドチャレンジに出場します！」

その言葉にボルテージが凄まじく上がる。

チユチユ「そしてそこでR o s e l i a, p o p p i n, p a r t yをぶつ潰す！」

友希那「・・・」

香澄「!？」

蒼生「・・・」

チユチユ「そして・・・」

スポットライトがロツクと、え？俺？

チユチユ「ギタリストにロツカ アサヒ、アドバイザーにアオイ カミカゼをスカウ

トする！」

六花・蒼生「・・・へ？」

# ロックが、ロックじゃない？

蒼生「・・・ただいまー」

蒼生母「おかげりー。ご飯できてるけど食べるー？」

蒼生「いや、明日の朝にする。」

蒼生母「わかつたわ。・・・とりあえずお風呂はいつちやつて。」

蒼生「おう」

そのまま脱衣所にいき風呂に入る。

蒼生「はああ、スカウト、か。」

（数時間前）

チユチユ「ギタリストにロックアサヒ、アドバイザーにアオイ カミカゼをスカウトする！」

六花・蒼生「・・・へ？」

スカウト、だと？ ロックはともかくとして、俺も？ どうするか、受けるべきなのか…。正直、急な話だし頭が追いつかないし、ここは

蒼生「保留で！」

六花「ごめんなさい！」

あ、ロック断つた。

現在、

蒼生「はああ、冷静になつてもどうしていいかわかんないな。・・・とりあえず上がろ。」

寝巻きに着替えスマホを確認する。すると

天音「お久しぶり・・・でもないです。元気にしてますか？」

W i l d B a b y のグループチャットで天音からのメッセージが来ていた。

蒼生「もち。そつちは？」

天音「もちろん元気です(、▽、)」

蓮「しかし、まさか海斗が・・・」

天音「はい、残念ですよ。まさかトラックが・・・」

海斗「いや勝手に殺すな。」

こんな感じでポピパの主催ライブ以来たまにこうして連絡をとるようになつた。

蓮「まあ、そこはどうでもいいとして、原付免許どうだつたよ？」

蒼生「取つたぜ。ロックももう後ろに乗せた。」

天音「おめでとうございます（～？～、ノノ、～）  
海斗「まあ、勉強は出来たし、身体能力とかのカンもよかつたしな。他に変わったことはあつたか？」

変わつたことか・・・そう言えば。

蒼生「そう言えば、R A Sにスカウトされた。アドバイザーとしてな。」

海斗「R A Sつて、あの時の？」

蓮「受けたのか？」

蒼生「保留にした。今も5バンドみてるし、正直まだ迷つてる。」

天音「なるほど・・・とにかく、無理はなさらないようにしてくださいね？（～・～・）

（～）

蒼生「ああ。皆もな。」

それで今日の会話は止まつた。

（～）  
翌日（～）

蒼生「ふわあ、おはよー」

蒼生母「朝ごはん出来てるから、食べちゃつて。」

蒼生「お～」

実は俺、朝弱かつたりする。だから前にロックの家泊まりに言つた時とか、結構恥ず

かしかつたな。だから目覚めも悪くて、今も眠い

蒼生母 「そう言えばね、お父さんもうじき帰つてくるつてー」

蒼生 「!、ゲホゲホ」

訂正、すぐ目覚めたわ、

蒼生 「ゴツクン、か、帰つてくる?」

蒼生母 「いつになるかは分からぬいけど、言つてたわよ」

蒼生 「oh」

俺の父さん。前にも少し話したがバンドマンだ。5人編成の『dead emperor』のリーダー兼ギタボ。確かに腕前のバンドでその実力もあり今は海外に飛んでるのだが、

（回想）

蒼生父 「蒼生、私と海外に行く気は本当にはないのか？」

蒼生 「ああ。俺の居場所はWild Babyだ。それは変わらない。」

蒼生父 「お前の実力ならもつと会うやつが外にも・・・」

蒼生 「アイツらの実力がないって言いたいのか？それなら大きな間違いだよ。アイツらは、いや、アイツらじやなきや俺は演奏できないし、何よりアイツらの実力だつて生半可なものじやない。」

蒼生父「・・・とりあえずは分かつた」

（回想終）

まあ、基本的には普通の父親なのではあるが、よく俺も海外に連れて行きたがる。確かに海外の方が腕のいい人がいるってのはそうなのかも知れないが、俺はアツイらがいいんだ。・・・なんて今考へても仕方ないか。断れば済む話だし。

蒼生「・・・寝るか。」

そして俺はそのまま色々あつたせいかすぐに眠りにつくこと事が出来た。そして

蒼生「いつてきまーす」

蒼生母「行つてらつしやーい」

次の日、俺は何の気なしに羽丘に向かつたのだが、その途中にとあるふたりを見つけた。

蒼生「あ、ロックと明日香」

六花「あ、お、おはようございます」

明日香「おはようございます。」

蒼生「おう、おはよう」

俺は自転車から降りて押して歩く。

六花「昨日は大変やつたな」

蒼生「ああ、全くだ。」

明日香「何があつたんです？」

蒼生「まあ色々、な。ん？なんだあの人大かり」

見ると校門前にガツツリとした固まりが出来ている。瀬田さんほどではないにして  
も、あれは？

チユチユ「いたー！」

六花「ひい!?」

蒼生「!?」

マジかよ、いやマジかよ！ここまで来るか、く、こうなれば、あまりやりたくは無い  
けど・・・

蒼生「すう・・・どけ!!!」

超大声で叫ぶするとチユチユも怯んだようで、周りの女子も反射的に道を開ける。

ボーカル舐めたらいかんぜよ

蒼生「行くぞ、ロツク！」

六花「は、はい！」

全速力で門内にはいる。

蒼生「ふう、ここまで入つてこれんだろ。」

六花 「あ、あの、蒼生さん？」

蒼生 「どした？」

六花 「あの、私はともかく、蒼生さんは断つた訳では無いですよね？その、逃げるまですることないんじや？」

蒼生 「あー、あれじやロック逃げにくかつたろ？だから」

六花 「なるほど、わざわざありがとうございます。」

蒼生 「いいんだよ、勝手にやつたことだから、つともう駐輪場着いたしました後でな？」

六花 「はい、ちゅ」

蒼生 「!?」

ヘ？き、キス!?今!?な、なんで？幸い周りに人はいないが・・・

六花 「その、逃がしてくれた、お礼？」

蒼生 「なんで疑問形だよ・・・でも、ありがとうな／＼／＼

六花 「はい、じやあまたあとで／＼／＼

顔を真っ赤にしながら走っていく。あかん可愛いすぎ。

蒼生 「つてなことがあつてさ。」

モカ 「後半のいる〜？」

蘭 「絶対いらぬよね？」

巴「ああ、 いらないな。」

ひまり「だねー。」

こいつら冷たくない？ ちなみにアフグロの面々に今朝の話を聞いてもらつたのだが、ロツクとの話は要らないだと稼働とか、酷いわ。

蒼生「あ、 羽沢は？」

蘭「生徒会。」

蒼生「あーね、」

ピンポンパンボーン

蒼生「ん？」

放送「1年A組朝日六花さん、 2年A組神風蒼生さん、 至急職員室まで」

蒼生「は？」

蘭「なに、 なんかやらかしたの？」

モカ「カツプルだし、 不純異性行為？？」

蒼生「そげな馬鹿な、 とりあえず行つてみる」

言われた通り、 生徒会室に行くと

チユチユ「H e l l o」

蒼生「o h、 c h u c h u」

日菜「すつごい発音だねー」

蒼生「ロックはもう来てたか。」

六花「は、はいその、R A Sさんに入らないかつて・・・」

蒼生「・・・おれもか?」

チユチユ「Y e s、否定したロツカアサヒならともかく、貴方は考えてくれたんでしょう?」

蒼生「しかし・・・他のバンドの事もあるし・・・」

チユチユ「バンドリの期間だけで構わないわ。他のバンドを見るなども言わない。悪くないでしよう?」

確かに悪くは無いんだが・・・どうしよう。とそのタイミングで

キーンコーンカーンコーン

日菜「終わりだよー」

つぐみ「午後の授業がありますので・・・」

蒼生「そういう訳だから、もう少し考えさせてくれ。」

チユチユ「・・・わかつたわ。いい返事期待させてもらうわね。」  
ロックにも軽く挨拶を交し出していく

蒼生「・・・凄まじい根性だな」

六花「で、ですね」

まあ、そんなこんなで午後の2時間も終えたのだが、舐めてた。ロツクと、一緒にいた明日香と下駄箱で出会つたのだが、

チユチユ「迎えに来たわよ！」

パレオ「パレオもいます！」

蒼生「なんてこつた」

パレオ「パンナコッタ？」

蒼生「言つてねえ！てかベタだな！」

明日香「いいから逃げるよ！」

俺らは3人揃つて逃げました。

チユチユ「G O パレオ！」

き、來た。てか速！そしてチユチユ遅！

明日香「あ、あたしもうダメかも！」

六花「うえええ！明日香ちゃん運動部じや？」

明日香「あたし水泳部だよ、走るの向いてない！現に先輩がいちばん速い！」  
まあ、確かに。2人に合わせて走つてるが、本気出したら振り切れる。

蒼生「つと、駐輪場こつちだから、また後で！」

六花「は、はい！」

そして俺は全速力で駐輪場まで駆け抜ける。実は俺、割と足速い。50メートル6秒21が最高記録である。

蒼生「あらよつ」

キーを刺してからサドルに跨るまでを3秒でこなしちゃペダルを踏むとちょうど校門をロックが駆けていつてた。逃げ切つたか。

蒼生「ふう、ここまで来れば安心か？」

自転車をこいで逃亡していたらいつの間にか商店街に来ていた。

蒼生「ふう、疲れたしなんか飲んで帰るかな。」

ちょうど羽沢珈琲店もあつたので一息つこうと思つたのだが

蒼生「ん？」

この声は、あのふたりが、よく見ると北沢精肉店の前に二人がいる。てかなんで追いついてんの。まあ、俺結構無意識についてたし、大回りしてたかも。

蒼生「とにかく、入るか」

自分の耳が良かつたことにちよつと安心した気分になると奥の方の席に座り大分甘めのやつを飲ませてもらつた。

蒼生「つて今日はR o s e l i a 見る日じやん。」

割と押してるな。急がないと。

紗夜「遅いですよ。」

蒼生「すみません。色々ありますよ。」

友希那「・・・あの子かしら?」

蒼生「間違いなくその子です。」

紗夜「事情があるのでしたら、とにかく、FWFの事について、話し合いますよ。」  
そして話し合いが始まる。俺も経験者ではあるし、アドバイスや、練習時間の目安を提案する。

紗夜「こんな所でしようか? 蒼生さんも、ありがとうございます。」

蒼生「気にしないでください。俺もバンドリで忙しくなるとは思いますが、始まるまではFWFに集中してアドバイス出来るので」

友希那「・・・その事なんだけど、バンドリ、ガールズバンドチャレンジに出場しうと思うわ。」

蒼生「・・・!？」

紗夜「本気ですか?」

あこ「あこは嬉しいんですけど・・・」

蒼生「・・・おれはいいと思いますよ。」

紗夜「・・・理由はなんですか?」

蒼生「FWFに向けてこういう大会に出て気持ちを鼓舞させておくのも大事でしょう。何より相手はRAS。相手にとつて不足はないでしよう。」

紗夜「・・・そういうことでしたら。」

リサ「でも、もそのぶん時間割かれるよ?」

蒼生「元々割かれてるなんて思つてやつてないですし、平気です。」

あこ「ホントですか?ヤツター。」

蒼生「気を引き締めてくださいね。Roseliaの腕とはいえ、相手は多いですか

ら

友希那「当然よ。目指すは頂点ただ一つよ。」

真つ直ぐだな。もう俺なんか必要ないような気さえする。

蒼生「つと、失礼電話だ。」

誰だろう、ロック?

蒼生「もしもし?」

六花「・・・蒼生さん。」

今にも消えてしまいそうな声だつた。

蒼生「どうした?」

六花 「R A Sさんに、不合格になつてしまひました・・・」  
：：： なんだつて

## ロックに咲け

友希那「潰えぬ夢へ、燃え上がれ！」

蒼生「・・・始まつたか。」

ついに始まつたガールズバンドチャレンジ。俺はR o s e l i aの付き添いで今は来ている。ちなみにここはC I R C L Eなので諸々の手伝いもさせられた。それはどうでもいいとして今はロックだ。

（数日前）

六花「R A Sさんに、不合格になつてしまひました・・・

・・・なんだつて

蒼生「不合格つて・・・ロック審査受けたのか？」

六花「その、成行きで。」

蒼生「・・・そつか。とりあえず今度話そ。」

六花「分かりました、おやすみなさい。」

（現在）

そして今日に至る訳だが今日はロックも來ていたので話した。本人は気にしてな

いつて言つてたけど、絶対気にしてるな・・・

蒼生 「つて終わつたか。お疲れ」

友希那 「ありがとう。どうだつたかしら。」

蒼生 「流石、ですね。とりあえず大きな修正点はないです。細かいところは練習しながらの方が教えやすいので、また今度でもいいですか?」

友希那 「そういう事なら。みんな、行くわよ。」

R o s e l i a のレベル、この短期間で圧倒的に上がつたな。F W F の事もあるだろうし、これならそんなに心配はいらないか。R o s e l i a も終わつた事だし・・・今何時だろうか。えーと、6 時半。この前の招待状に場所は書いてあつたし行つてみるか、R A S の城へ。

（10 分後）

着いたな。原チヤリ最高癖になる。

蒼生 「くだらないこと考へてる場合じやないか。・・・いくか。」

パレオ 「いらつしやいませー♪」

蒼生 「・・・なんでいんの?」

パレオ 「来るかなー?と思つてたのでー♪」

蒼生 「チュチュが?」

パレオ「いえ、私が。」

なんてやつだ。まあ、ロックが来たらしいし予想できることでもないか。

蒼生「とりあえず通してくれるか?」

パレオ「もちろんです♪どうぞー」

そしてついて行くが、このビルデカすぎ。しかも最上階がスタジオて。

パレオ「お待たせしましたー、こちらがチユチユ様のプライベートスタジオになります。」

パレオが入口を開けてくれる。

チユチユ「パレオ? どうしたのかし···あら、アオイじゃない。入る気になつたかしら?」

蒼生「···今日は話があつてきた。」

チユチユ「話? 何かしら。ロックアサヒの事?」

蒼生「そうだ。何故不合格にした? 僕はあいつの腕前知つてるぞ。ギター腕なら確か  
に···」

チユチユ「これを聞いて頂戴。」

チユチユのヘッドホンをスponと被せられる。

蒼生「···これは」

チュチュ 「分かつたかしら？」

蒼生 「・・・ああ。」

なるほど。出し切れてない・・・岐阜の時のバンドのクセが残つてゐるのか。

蒼生 「理解はしたよ。」

チュチュ 「納得はしてなさそうね？」

蒼生 「まあな・・・また来るよ。」

チュチュ 「それはあの件を前向きに検討してもらえてると捉えても？」

蒼生 「好きに取れ。じやあな。」

ガチャンドアを鳴らす。

蒼生 「はあ。どうするべきか。」

ピコン

ん、母さんからだ。珍しいな、なんだろう。

蒼生母 「できるだけ早く帰つてきて」

・・・またまた珍しいな。なんかあるのか?とにかく急ぐか。

蒼生 「・・・ただいま。どしたの?」

蒼生母 「あんた宛に、正確にはあんた達宛にこんな手紙が來てるわよ。」

蒼生 「な、こ、これは!」

～数日後～

たえ「新曲、こんな感じでいいかな？」

蒼生「完璧だな。我ながらいい出来だ。」

紗綾「ごめんね。歌詞も編曲も手伝つてもらつちゃつて。」

蒼生「いいんだよ。俺も、あいつには正直になつて欲しいからな。あとは本番までに仕上げるぞ。時間ないから気合い入れろよ？」

5人「はい！」

～ボピパ本番当日～

蒼生「もうそろだな。」

六花「あ、蒼生さん！」

蒼生「よ、そろそろ始まるぞ？」

六花「はい、ものすごく楽しみです♪」

蒼生「そうか・・・ふふ」

六花「どうかしましたか？」

蒼生「いや、可愛いなつて。」

六花「き、急にそんな／＼／＼ぎゅ

とか言いつつしつれつと抱きついてくるし、可愛さ120点だな。

蒼生 「・・・」ぎゅ

六花 「えへへ♡すりすり」

蒼生 「ん、」

頭と頭をくつつける、幸せだなつて何か忘れて・・・あ、やべ。

蒼生 「ところで、ライブ、そろそろ始まるぞ？」

六花 「そ、そうでした！また後で・・・あと、ちゅ」

蒼生 「ん、また後でな。」

ふう、ロツクパワー充電したし、行くか。

有咲 「おいおせーぞ？」

蒼生 「わりわり、皆準備出来てるか？」

香澄 「うん！」

りみ 「緊張してきた！」

紗綾 「大丈夫だよりみりん、ほら深呼吸」

りみ 「う、うん。すう、はあ、も、もう大丈夫だよ。」

蒼生 「なんだかんだ平気そうだな、よし、言つてこい！」

そしていつもの掛け声で出ていく！と同時に少し客席からざわめきが起きる。とい  
うのも山吹のドラム、市ヶ谷のキーボードがいつもと決定的に違う。チラツとロツクを

見ると戸惑つてゐるし。しかしポピュも面白いこと考えるよな。つと、そういうしてゐる間にMC終わつたな。

香澄「聞いてください！Step×Step！」

・・・始まつた。明るい曲調にポップな雰囲気の曲。すごくポピュらしい曲だが、この曲は一味違う。この曲は『ロック』になつてもらうための曲だから。

香澄「走り出そうよ！」

サビが始まつた。やっぱ、いい曲だな。あいつらやつぱり持つてるよな。技術じやどうにもならないものを。

蒼生「お？」

ロックがシユシユを外し走り始めた。

蒼生「・・・良かつた。伝わつてくれたか。・・・ん？」

香澄「♪♪♪」パチ

一瞬戸山がこちらを向いてウインクをする。・・・そういう事だよな

蒼生「・・・」コク

俺は静かに頷くと走つて外に出た。見渡すとロックはいなかつたが、行先はわかつてゐる。急がないと。原チャリのエンジンをかけて追いかける、と

ますき「ん、お前は・・・」

蒼生「あんたは、R A Sの・・・」

ますき「あいつのこと追うのか？」

蒼生「あ、ああ。」

ますき「なら、私についてこい。早い道知つてる。」

蒼生「・・・恩に着る。」

そして直ぐに駅でロツクを回収するとスタジオに一直線する。

六花「あ、ありがとうございます！」

ますき「・・・あいつ、だいぶ本気なんだな。」

蒼生「なあ、ロツクがR A Sの試験受けたのって・・・」

ますき「ああ、すまん。それ私だ。」

蒼生「お前かよ!?まあ、いいけどさ。行くぞ?」

ますき「ああ」

ロツクは成行きつて言つてたけど、ロツクが弾いてるところをたまたま見たとか?まあなんにせよあのバイクで連れてつたんだろうが、あのスピードで言つたのか。よく平氣だつたな。

ますき「着いたぞ。」

蒼生「どうも。つと邪魔するぞ?」

チユチユ 「なんだ、貴方も、いたのね。ロツカアサヒ。言つたでしよう？貴方にはRASで演奏する力が足りてないわ。それは蒼生も言つてたわよ！」

六花 「あ、蒼生さんが！」

蒼生 「いってねえよ。理解したとしか言つてない。とりあえずチユチユ、聴いてやつてくれよ。」

チユチユ 「NO、パレオ。お客様がお帰りよ。」

六花 「帰らん！」

チユチユ 「What？」

六花 「私、ずっとバンドやりたかった……特別やつて思える人達とバンドやりたかった。その特別の意味が、この前少しだけわかつた気がして……」

蒼生 「ロック……」

こいつ、そこまで……

六花 「もう、遅いかもしけんけど、私RASさんと演奏したい……思いつきり、全  
力でぶつかりたい……」

R A Sさんと、バンドがやりたいんや！」

ますき「・・・こいつの本気、聴いてやれよ。」

蒼生「俺からも、頼む。」

チユチユ「・・・ブースに入つて。」

六花「!!」

チユチユ「last chanceよ。」

蒼生「・・・俺も見せてもらうぞ。いいな？」

チユチユ「もちろん。構わないわ。かけるわよ？」

六花「はい！」

R I O Tか、そしてロックの方も見る。声は聞こえなかつたが、恐らく『行こまい』つて言つたな。・・・やる氣だ。

蒼生「・・・始まつた。」

すげえ。完全に『入り込んでる』。アイツ自身の良さが滲み出てる。

パレオ「パレオ、感激してます・・・」

しかし、やるな、ロック。しかもこれは・・・

ますき「あいつ、ベースもキーボードも全部一人でやる氣か？」

レイ「歌まで歌い出しそう。」

ますき 「ふつ、たく。」

そう言い全員中に入る。そして、『RAISE A SUILEN』としての演奏が始  
まつた気がした。ロックのあの顔・・・

蒼生 「・・・ふふつ」

チユチユ 「・・・♪」

そして、長いような、短いような、そんな時間が終わつた。

4人 「はあ、はあ。」

全員、いい顔してゐるな。

六花 「バンドつて、バンドつて、てら凄い♪」

レイ 「ふふ、ギター、走りすぎだよ。」

六花 「あ、す、すみません。」

チユチユ 「いいわ、貴女のRAS入りを許可する。」

六花 「え!」

チユチユ 「ただし、RASのギター(仮)よ。」

六花 「??」

ますき 「(仮)?なんだそりや?」

チユチユ 「ロックアサヒ、RASに相応しいギタリストになりなさい!」

六花「・・・」

チユチユ「そしてアオイ、どうかしら？気になつた点は？」

蒼生「そう言われると思って、ほれ。」

チユチユ「・・・このノート、見ても？」

蒼生「ああ。」

最近アドバイスも口だけじゃ上手く行かなくなつてきたりし、5バンド分のノートを買つたんだが、予備の1冊がこんな形で使うことにならうとは。

チユチユ「・・・なるほど、このノートはこれからも使うのよね？」

蒼生「もちろんだ。ただ、お前らのためになればな。」

チユチユ「いいわ、貴方もR A S入りを許可するわ。ノート、お返しするわね。」

蒼生「ああ、よろしく。」

これは、予想以上に楽しみになりそうだ。

# それは鍵

「Wild Babyグルーブチャット」

蒼生 「おーい誰かいるかー?」

天音 「いますよ?」

蓮 「おー、どうした?」

海斗 「急用か?」

蒼生 「実はな・・・」

「数日前」

蒼生母 「あんた宛てに、正確にはあんた達宛にこんな手紙が来てるわよ。」

蒼生 「な、こ、これは!?」

この封筒は、忘れもしない・・・

蒼生 「FWFの・・・」

「現在」

天音 「つまり、主催側からの招待ですか?」

蒼生 「そういう事だ。なんと参加費も向こうが出すって」

海斗「おいままで！なんだつてそんなにいきなり？だつて、日本じや最高峰のイベ  
だぞ？」

蓮「そうだよな、なんか出来すぎてる気がするが」

蒼生「本部に問い合わせたら間違いないってさ。ポピパの主催ライブ、動画サイトに  
出回つてんだろ？そこで見つけたそうだ。」

海斗「あー、なるほど。なら俺らも少しは成長できたつてことか？」

蒼生「そうとらえて問題ないと思うぞ？どうする？出るか？」

蓮「あたぼうよ！」

天音「楽しみですね（？ v ???）

海斗「俺らはもうつまらない演奏なんかしないもんな！みせつけてやろーぜ！」

蒼生「分かった。出る方向で返しておくよ。ありがとな皆。」

蓮「いや、俺も正直少し悔しかつたし。ところで蒼生？話はガラツと変わるがお前は  
今何してんの？」

天音「確かに確かに！私たちとは違つて頻繁に合わないんですから、教えてください

よ！主にロツクちゃんとか！」

海斗「そそ、リア充話聞かせろよー」

蒼生「リア充話も何も、これからデートなんですけど？」

蓮「は？こんな時間からか？」

ちなみに今は夜の7時半だ。

蒼生「そうそう。お家デート」

海斗「なるほど、しつぱりと・・・」

天音「あわわわわ／＼／＼

蒼生「違うからな？天音？あと海斗は今度あつたらシメる。」

海斗「わりわり、じやあ楽しめよー。」

＼チャット終わり＼

蒼生「つたく、海斗のやつ一言余計なんだよ・・・」

六花「あ、蒼生さん！お待たせしました。」

蒼生「いや、待つのもデートのうちつて言うだろ？」

ちなみに俺は銭湯のフロアで待たせてもらつていた。

六花「えっと、じやあ行きましょうか／＼／＼

蒼生「おう。」

そのまま手を繋ぐ。そのまま下のロツクの部屋に行くだけなのだが、それでも手を繋いでくれる律儀さというか可愛さというか、とにかく愛おしかった。

六花「えっと、どうぞ。」

蒼生「お邪魔します。それで、MVはどうだつた？」

MVとはR A Sが新曲のミュージックビデオを作りさらに知名度を上げてBang Dream!を有利にしよう。という目的があつたようだが

六花「撮影も演奏もなんとか。色々助けて頂きましたけど、楽しかつたです♪」

蒼生「そつか。ならよかつた。」ギュ

六花「あ／＼／＼あ、あの、蒼生さん？」

蒼生「どうした？もしかしてやめて欲しい？」

六花「あ、それは続けてください！あの、蒼生さんつてその、恥ずかしさとか今はあんまりないんですか？私未だにその、こういうの慣れなくて／＼／＼

蒼生「そつか。恥ずかしい、か。少しば照れるけどさ、今は幸せとか嬉しいとかそつちの感情の方が大きいかな。」むぎゅう

六花「はふう／＼／＼そうなんですね、わ、私も嬉しいですよ／＼／＼」ギュウ

そう言つてロックからも甘えてくれる。最近はバタバタでこんな時間取れてなかつたからな。今は精一杯甘えてもらおう。

蒼生「そうだ。今なにかして欲しいこととかあるか？俺に出来ることならするぞ？」  
なでなで

六花「ふえ？ そうですね・・・」

しばらくうーんと首を傾げて考える。可愛い。

六花 「じゃあ、その、一つだけ//／＼」

蒼生 「お、なになに？」

・  
・  
・  
・  
・  
・

蒼生 「ほんとにこれでいいのか？」

六花 「はい♡」

ロツクが志願してきたのは膝枕。ちなみに俺がする側である。

蒼生 「大丈夫か？ 固くないか？ 高くない？」

六花 「大丈夫です♪ 気持ちいいです♪」

上機嫌になるロツク。あこがれてたのかな？

六花 「えへへー」

蒼生 「嬉しいならよかつたよ。」 なでなで

六花 「蒼生さんのなでなで好きです♡」

そう言つてスリスリしてくる。少しくすぐつたいけど、可愛いさ増し増しだな。そしてなんだか意地悪したくなつてきた。

蒼生「そつか。ちなみに好きなのつてなでなでだけ?」

六花「へ? そ、その、蒼生さん、も、好きです//」

蒼生「そつか、ありがとよ♪」なでなで

六花「うう、意地悪です//」

俺の膝に顔を填めてしまうロツク。いやこれはこれで可愛いんだがな。

蒼生「ごめんごめん、可愛くてさ。」

六花「・・・わかつてます//」しばらく恥ずかしいのでこうさせてください。」

蒼生「あいよ。」

そしてしばらく顔を俺の膝に押し付けていたが、割と早く元の体制に戻した。そしてムクつと起き上がり

六花「あの、ありがとうございました//」

蒼生「おう。」ぎゅう

六花「ん//もしかしなくても蒼生さんつて抱きしめるの好きですか?」

蒼生「ああ。なんかロツク温かいからさ。今もそうだけどさりげなく抱き返してくれ

るだろ? そういうのが嬉しくてな。」

六花「え、えへへ//なんだか私いつも蒼生さんにデレデレにさせられてる気がし  
ますね//」

蒼生「いいじゃないか。俺だつてさせられてるし」

六花「そうなんですか?」

蒼生「ああ。心臓の音聞くか?ほら。」

六花「へ?あ、凄い・・・」

ロツクを胸元に抱きしめて心拍音を聞かせるとそのまま聞き入つてゐるのだが、自分でやらせといてなんだけど恥ずかしいな、これ。

六花「・・・」

蒼生「あ、あの、ロツク?」

六花「・・・」

蒼生「・・・コチヨコチヨ

六花「ひやあ!?

蒼生「その、恥ずかしいからここまで//」

六花「あ、す、すみません//」

2人「・・・//」

2人とも抱き合つたまま制止する。なんだかんだまだ初々しさが残つてゐる。

六花叔母「六花ちゃん?今のうちお風呂はいつちやつて?」

蒼生「・・・!?

六花「はわわわ!?」

どちらともなくすぐさま離れる。見られた訳では無いが、妙な恥しが込上る。

蒼生「・・・き、今日はここまでだな?」

六花「そ、そうですね。そうしましよう。見送りします」

バタバタと帰宅準備をする。

蒼生「じゃあまたな?」

六花「はい・・・」

くるつと振り返り帰路につこうとするとロツクに袖をきゅつと掴まれた。・・・なるほど。再度振り返るとロツクが俺に不意打ちキスを・・・

蒼生「ん」ヒヨイ

六花「へ!?'

まさか避けられると思わなかつたのかびっくりするロツク。しかし本命はそつち  
じやなくて

蒼生「・・・ちゅ」

六花「・・・!?!?//

俺はそのままロツクの頬にキスを。

蒼生「いつもの不意打ちのお返しな?じゃあな?」

六花「は、はい、えへへー♡」

そして今度こそ岐路につく。ちなみに翌日。ロツクの正式なR A S入りが決まり  
ロツクが嬉しさのあまり俺に抱きついてきて茶化されたのは別の話。

# 蒼生は大忙し【前編】

蒼生 「ポピV？」

香澄 「そう！ ポピV！ 私たちのこともっと知つて貰いたいの！」

ポピVの練習日に戸山からそんな事を言われた。

有咲 「いわゆるP Vだな。」

沙綾 「そこで何かアドバイス貰いたくて・・・」

蒼生 「そうは言われてもな、俺こう見えてそういうの作つたことないからな。」  
どう見えてるのか知らないけど

りみ 「その、イメージだけでも、ダメかな？」

蒼生 「うーん、まずはさ、曲にもよるけどどんな雰囲気にするかとかは大事じゃない  
か？」

たえ 「・・・うさぎ？」

蒼生 「まあ、なしでは無いけど作るならあまり俺は頼りにならないと思う。他のやつ  
に聞いた方が絶対に良い。でもまあ、俺に出来ることがあつたら言つてくれ。」

沙綾「うん、ありがとー、あれ？蒼生時間いいの？そろそろ次のバンドじゃないの？」

蒼生「やべ、じゃあな皆！」

香澄「うん、ばいばーい」

急いで原チャに跨り向かうのはCIRCLE。そこにAfterglowとハロハピが居る。時間交代で見に行かなければならない。

蒼生「間に合つたか？」

モカ「1分前♪」

蘭「なんか、最近忙しい？」

蒼生「まあな、1バンド見るのが増えたからさ、多少は、まあ仕事に支障はないからな、気にしないでくれ。」

つぐみ「でも、無理しないでね？」

モカ「つぐが言えないよね♪？」

巴「だよなー、1回倒れられてるし」

つぐみ「も、もう大丈夫だよ！それにはら、今は蒼生くんでしょ？」

蒼生「大丈夫だ。忙しいのは充実してる証拠だ。そんなことより大地蔵祭だつけ？あれもうすぐなんだろ？」

蘭「そうだね・・・じゃあ入ろうか。」

ひまり「よーし、えい、えい、おー！」

・・・・・

ひまり「えー、やつぱり言つてくれないのー?」

蒼生「言つたろ? そんな柄じゃないって。行くぞー」

ひまり「そんなー」

～1時間後～

蒼生「・・・よし、皆だいぶ良くなつてきたな? 今日はこんなところだろ。あとは各々  
な?」

モ力「お疲れ様〜、ところであおくん?」

蒼生「どうした? わかんないとこでも?」

モ力「そうじやなくてー、なんて言うか、前より耳良くなつたー?」

蒼生「耳? なんで急に?」

巴「あ、それアタシも思つてた。なんて言うのかな?」

そんなこと俺に言われても、自分じやよく分からないんだがな、でもこいつらみんな  
確かに、みたいな顔してるし・・・

蘭「でもまあ、悪いことじやないんだし、」

つぐみ「むしろいい事だよね! 凄いね!」

蒼生「あ、ありがと？つてそろそろハロハピの時間か……じゃあな皆、また今度！」

ひまり「あ、待つて！」

蒼生「ん、なんだ？」

ひまり「はいこれ、頑張つて！」

そうして上原が渡してきたのは栄養ドリンク。

蒼生「お、助かる。サンキュー！」

ひまり「ちなみに買ったのは蘭だよー？」

蘭「ち、ちょっと！」

なんか、ほのぼのしてていいよな。このバンドは、見る方向は皆一緒にでも良くて。バンドとしても上手くやれてる。俺も教えがいがあるつてもんだ。

蒼生「じゃあ、またな！」

改めて部屋を出る。グビッと先程貰ったドリンクを飲み干すと直ぐに別室に。

蒼生「お待たせー」

こころ「蒼生！来たわね！」

はぐみ「ほんとだー！あおくん！やつほー！」

薰「やあ蒼生。今日もよろしく頼むよ。」

さつそく三バカのお出迎えだ。なんだかんだ言つて俺もこいつらに元気みたいなの

貰つてゐる氣がする。まあ、相手してると疲れるんだが・・・

花音「こんばんは。よろしくね？」

蒼生「よろしくお願ひします。」

その調和を測る松原さん。ほんとこの人は凄いよな・・・あの人達にも順応してゐるし。

そして・・・

蒼生「相変わらずクマだな。」

美咲「クマで悪かつたね。」

別に悪かないけど、慣れない。やつぱり俺のバンドも含めて色々の見てるが慣れない。しかも不満そうにしてるのか、冗談で悪かつたねって言つたのか着ぐるみだとわかんないし。

蒼生「・・・いいから始めるぞ。」

そしてまた1時間経過した。ハロハピのみんなも技術は格段に上達している。元々

異色のバンドではあつたもののその色もはつきり濃く形あるものになつてゐる。

蒼生「お疲れさん。今日はここまでだな。」

はぐみ「おつかれー♪」

こころ「みんな良かつたわよー！」

ふう、今日はこれでおしまいか・・・一段と忙しかつたな。まあ楽しいからいいんだ

けど。

美咲「蒼生、お疲れー」

クマから人に戻つた美咲が労いの言葉をかけてきた。てか戻るの早。

蒼生「ああ、お疲れ。」

美咲「なんか最近さ? 耳良くなつてない?」

蒼生「それさつきも言われた。なんでだろーな?」

美咲「言うことが的確になつてきたからじやない? 細かいズレとか強弱とか、最近言うこと多くなつたでしょ? ノートもそんな感じだつたよ?」

蒼生「うーむ」

花音「あ、あのー?」

蒼生「あ、はい?」

花音「耳が良くなつて困ることつて会つたかな?」

蒼生「困ることですか? ないですね? 自覚もなかつたんで。」

花音「そつか、ならいいんだけど、意識すれば意外と良くなつてるつて自覚するかも、これからも良くなるかもだし。」

蒼生「そうですね。ありがとうございます!」

そして俺はまりなさんに報告を済ませたあと帰宅した。そして次の日、俺は様々なこ

とに巻き込まれることになる。

# 蒼生は大忙し【後編】

今日はR o s e l i aの練習のみだった。と言つてもR o s e l i aはo v e r t h e f u t u r e L I V Eもあるし今のB a n G D r e a m!にも出場してゐるし何気に1番忙しいバンドである。俺もこのバンドに関しては物凄く集中しなければならないので他のバンドに耳が良くなつた!と言われても自覚はないが納得はしてしまう。ちなみに昨日帰つて動画サイトに出回つてゐる聴力検査の動画見たら『人外』の診断結果が出た。耳がいいことはわかつた。まあ、俺の耳の話はいいとして今日はR o s e l i aのためにゲストを用意している。そいつらは、

蒼生「今日は来てくれてありがとな。」

蓮「いいつてことよ。」

天音「こちらこそ、誘つてくれてありがとうございます。」

海斗「今日はR o s e l i aを見るんだっけか?」

蒼生「そうだ。」

うちのメンバーだ。創立記念日だから来てくれた。ちなみに明日から休日なので

こつちに泊まるそうで安めのホテルも取つてあるそうだ。ちなみにR o s e l i aには言つてない。

蒼生「そろそろ着くぞー?」

天音「楽しみですね。他のバンドをこういう風に見る機会はないですから」

蓮「だな!しかしR o s e l i aつて言うとあのストイックそうな奴らだろ?いきなり押しかけて平気なのか?」

蒼生「まりなさ・・・ライブハウスの人には話してるから大丈夫だ。」  
そんなこんなでC I R C L Eに着いた。

まりな「あ、蒼生くん!メンバーの皆も、待つてたよ!」

蒼生「おはようございます。」

海斗「今日はお世話になります。」

まりな「ううん、いいよいよ。蒼生くんもありがとね。連れてきてくれて。」

蒼生「人件費で給料4倍ですよ?」

まりな「あははー、お菓子でいい?」

天音「やつたー!」

蓮「つたくガキだな。」

天音「なら兄さんはいらっしゃるですか?」

蓮「いるに決まつてんだろ！」

この兄妹仲良いな相変わらず。しかも釣られた。

海斗「いいからいくぞ？こっち？」

蒼生「そこ女子更衣室。」

海斗「なぬ！」

天音「あ」、変態です（棒）

蓮「通報だ」（棒）

まりな「ほんとに仲いいんだねー！今度私にも演奏聞かせてよー。」

「いつか必ず。じやあ行くぞ！」

3人「おー！」

そして変態(仮)とお菓子でつられた2人を連れてスタジオに向かう。まあまりなさ

んも言つてたが平和で仲いい証拠ではあるのだが、

蒼生—きたぞ—?

紗夜一神風さん、2分遅刻で……え？」

リサ「紗夜ー？ いきなり固まつて、どうした・・・の？」

R o s e l i a [え——] !?

天音「こんにちはー♪」

蓮「おっす！」

海斗「オスオス」

蒼生「4人揃つて！」

・・・

蒼生「やらないんかい。」

海斗「お前からボケの振りは珍しいけどさすがにそれはダサいよ。」

蓮「ないない」

天音「ですです」

海斗には躱されるし兄妹には仲良く否定されるし、ちくしょう、いつかやらせる。

友希那「ど、どうして貴方のメンバーが？」

蒼生「ん？呼んだ。」

燐子「よ、呼んだと言われましても・・・」

紗夜「どうやつて、では無く何故いるんですか。」

蒼生「R o s e l i aもレベルが高くなつてるからな。今日は特別でパート別でみる。」

海斗「つて訳だ。よろしく頼むよ。」

天音「もしかして、ご迷惑ですか？」

友希那「そんなことは無いわ。よろしく頼むわ。」

そして練習が始まった。俺は氷川さんと湊さん。蓮が今井さん。天音が白金さん。海斗が宇田川を集中的に見る。まずはFIRE BIRDからやつて貰った。恐らくRosaliaで最難度の曲だし最近やる機会が多いからこの曲にしてもらつた。

友希那「ふう、どうだつたかしら。」

蒼生「そうですね、まず湊さん。大サビで抑揚なんですがもう少し押えていいかと思います。紗夜さんは1番と2番どつちもBメロの最後が若干リズム隊とずれてますね。」

蓮「あー、俺もその辺り気になつたんですけど、リサさん？でしたっけ。1回間違えましたよね？あそこは指運びも難しいですから。」

リサ「うーん、そなんだよね。」

天音「燐子さんはミスはありませんでしたけど、うーん、なんて言うんでしょう。」  
燐子「えっと、どこか悪かつたですか？」

天音「悪いわけじやないんですけど、うーん」

海斗「俺も説明するの少し苦手だからな・・・」

蒼生「ならやつて見せれば良いじやないか。」

天音「そうですね。すみません、お借りしても宜しいですか？」

燐子「あ、はい。どうぞ。」

海斗「済まないな。俺も借りる。」

あこ「うん！」

蓮「なら俺たちも！」

蒼生「・・・しやーねーな、紗夜さん。借ります」

紗夜「え、ええ。」

リサ「面白くなつてきたねー、はい、これあたしのベース。」

蒼生「そうだなー、Bメロ序盤から入れるか？」

海斗「当たり前だろ、行くぞ？」

そしてBメロからサビに入る直前までやつて見せた。

蒼生「つて感じだ。各自分かつたか？」

R o s e l i a 「・・・」

あれ?なんかデジャヴ?

あこ「すごい!」

紗夜「言葉を失つてしましました・・・」

蒼生「あ、いや、少しあしかやつてないぞ?」

燐子「でも、よく聞いてくださる神風さんはまだしも他の皆さんはあの時のライブ以

来ですよね？」

友希那「それでこの完成度。素晴らしいわね。」

天音「えへへー♪あ、そ、その、言いたいところ、わかりましたか？」

燐子「あ、はい。ありがとうございます。」

紗夜「私達も負けてはいられませんね。」

友希那「そうね。練習再開するわよ。」

狙つた訳ではないが Rosellia にとつていい刺激になつたようだ。うちの他のメンバーも教える側になれたようで次の曲から段々と口で教えられるようになつていった。メンバーの聞く力も上がつたつてことだろうし Wild Baby にとつてもいい成長になつただろう。

「次の日」

海斗「んで、きょうはどこに連れてつてくれるんだ？」

蒼生「今日は懐かしのあの場所だ！」

蓮「と言うと……なるほど。」

天音「あの場所ですね♪」

という訳でこの場所に来ました！（小並感）

六花「あ、皆さん！おはようございます！」

天音「久しぶりです♪」

そう、G a l a x yだ。俺らの復活ライブをしたのも思えばここだし懐かしの場所と言つても問題ないだろう。

蓮「しばらくだな。蒼生のやつに変なことされてないか？」

海斗「もしくはされてなくて冷めたか？」

六花「い、いえ、とても優しくしてくれます//／＼」

蒼生「までまで、誤解生む言い方だぞそれ。」

天音「ま、まさか蒼生さん、そんなことを//／＼」

蓮「おい蒼生。うちの天音に何教えてんだ？」

蒼生「俺じやねえよ、どつちかつて言うとバカ兄貴と暁さんがやつたんですよね？」

蓮「そうでした。」

海斗「さーせん」

六花「と、とにかく入りましょう！」

バカ話を断ち切つて俺らを中心にいってくれる。

海斗「おじやましまーす」

天音「懐かしいですね♪」

蓮「ああ。」

六花「そう言えば？今日はどうしてここに？」

そういうえば皆にはなんでここに誘つたか言つてなかつたな。

蒼生「少し、話したくてな。」

蓮「話し？」

蒼生「ああ、別に重い話じやないぞ？ただ、ほら。こうやつてゆつくり話す時間なかつたと思つてさ。」

六花「そう言えば、そうですね。」

蒼生「だから同窓会じやないけどそれっぽく話そうぜ。店長さんには許可取つてるか

ら」

六花「い、いつの間に」

天音「でも、たのしそうですね？」

蓮「だな。」

海斗「じゃあ何から・・・」

香澄「口ツクー！いるー？つて、あ！」

蓮「おー！いつぞやの！」

海斗「香澄だつたな。」

沙綾「香澄ー、まつてよー。」

りみ「はあ、はあ、やつと追いついたー。」

有咲「お前早すぎだろ」ゼエゼエ

蒼生「どうした？みんな揃つて。」

香澄「あ、えつとねー、」

そこから説明を戸山からではよく分からなかつたので市ヶ谷と山伏から聞く。

蓮「面白そうだな。」

天音「それ、私たちも入れてもらつていいですか？」

香澄「え！いいの！」

海斗「うちはリーダーのOKがあれば行けるが、」

蒼生「よし、もちろんいいぞ。」

そしてあつという間に2日たつて・・・

蓮「ありがとな、誘ってくれて」

天音「少し名残惜しいですね」

海斗「また会うだろ、なんだつてFWFもあるからな！」

みんなが帰る時間になつてしまつた。なんだかんだあつという間だつたな。そんな

こと思つていると不意に俺のスマホがなる。それも2回だ。

天音「なんの連絡ですか？」

蒼生「えっと1つ目はなー、お！コレ見てみろよ。」

どうやら例のポピュライが完成したらしい。それも・・・

海斗「ほんとに使つてやがる。」

蓮「みんないい顔してんな。」

最後から二番目に俺たちとロツクp o p p i n ! つて言つてるのが使われている。

G a l a x yで協力したやつだ。

天音「完成度高いですね♪」

蓮「だな。ちなみになんでP Vなんて作つてんだ？」

蒼生「あーそれはな。まあ大会があるんだよ。」

海斗「知名度上げか？この完成度なら上手く行けばかなり飛躍しそうだな」

天音「期待ですね♪もう1件はなんですか？」

蒼生「えーっと・・・」

こ、これは・・・なんと言えばいいか。

天音「蒼生さん？」

蒼生「なんでもない。仕事の話だ。じゃあまたな？」

蓮「ああ、またな！」

天音「お元氣で。」

海斗「バイビー！」

蒼生「古いわ！・・・じゃあな。」

そして3人に背を向けつつ考える。2件目はロツクからだつた

ロツク『チユチユさんがR o s e l i aさんに宣戦布告したそんなんですけど・・・一

応報告した方がいいと思いまして。』

という内容だつた。俺は

蒼生『サンキュー。わかつた。教えてくれて助かるよ。』

と返しておいた。宣戦布告か・・・どうなることか・・・

彼女達は彼女達らしく、俺は俺らしく。

俺はロツクから宣戦布告の話を聞きアイツらと分かれてからすぐにチユチユに連絡を入れる・・・が出なかつたのでパレオに連絡を入れる

パレオ「もしもしー？蒼生さん、如何しましたー？」

蒼生「お宅のご主人様がR o s e l i aに、喧嘩吹っ掛けたって聞いたんだが？」

パレオ「その事ですね。チユチユ様はただいまステージングの調整をしておられますので、私から詳細を説明しますね。今から少し時間を頂いてもよろしいですか？」

蒼生「わかつた。俺からそつち向かう。」

パレオ「お待ちしてますー。」

電話を切りすぐに原チャに跨る。しかし何故、つて考えるまでもないか。チユチユはR o s e l i aを目の敵にしてるところはあつたし、このタイミング出決着を付けようつてことか。まあ話を聞かないことには始まらないし、急ぐか。

「15分後♪

かなり急いでビルに着いた。1個も信号に引っ掛からなかつたからすぐに着いた。

パレオ「お待ちしてました♪

蒼生「ああ、じやあ手短に聞くぞ？何をするつもりだ？」

パレオ「R o s e l i aとd U bでツーマンライブをすると仰つてました。ツーマンにするためにチユチユ様には考えがあるそうですよ？」

蒼生「・・・危ない手じゃないだろうな？」

パレオ「大丈夫です。チユチユ様はちゃんと手段を選ばれる方なので。」

手段・・・か、まあ、反則行為をするやつじゃないだろうし、少し型破りなことはするかもしれないが、まあ今はパレオの言うことを信じるしかない。

蒼生「まあ、お前が言うならそうなんだろうな。」

パレオ「そうそう、伝言を預かつてますよ？」

蒼生「伝言？」

パレオ「R o s e l i aとR A S、この期間中はどっちを教えるのか？だそうです。」  
なるほど。R o s e l i aもR A Sも教えるわけだし、気まずくしないようにしてくれてるのか？はたまた何も気にしないで一番いい調子でR A Sの練習に入つて欲しいのか、どちらにせよ俺の身が重くなることは無さそうだ。

蒼生「具体的に俺になにかしてくれとは言われてないんだな？」

パレオ「そうですね。今の所は大丈夫です。あ、あと、これはパレオからのお願いなんですけど。」

蒼生「珍しいな。まあ内容によるけど、なんだ?」

パレオ「実はですね、2つあるんですけど、・・・・・と・・・・・です。」

蒼生「あー・・・なるほど。」

パレオ「お願ひできませんか?」

蒼生「ちなみにそれっていつ?」

パレオ「来月の7日です。」

蒼生「それまでなら何とかなるか・・・了解した。」

パレオ「ありがとうございます♪ロツクさんに相談したら蒼生さんが適任と言つてた

ので♪」

蒼生「そうかい。とにかく、今日は遅いし帰るよ。その件はまた今度。」

パレオ「わかりました♪ありがとうございます♪」

＼次の日＼

蒼生「つて感じになつたんですけど、こつちでは大丈夫ですか?」

友希那「構わないわ。皆も平気よね?」

紗夜「そうですね。大丈夫です。」

リサ「それより蒼生の方は大丈夫なの?」

蒼生「まあ、何とかなりますよ。もとより体力はあるので。皆さんも頑張つてください

い。」

あこ「よーし！がんばろーね！りんりん！」

燐子「う、うん・・・！」

皆気合いも入つて見たいだし。俺も頑張るとしますか。

蒼生「じゃあ行きましょうか。」

友希那「蒼生。相談があるのだけど

蒼生「なんですか？」

友希那「チュチュが提案をしてきたのよ。ライブ前の投票でライブの順番を決めよう、と。」

成程。人気がある方をトリにしようってことか・・・余程優劣をつけたいんだな。悪いことではないと思うが。

蒼生「それで、相談とは？」

友希那「先と後でセトリを変えようと思うの。」

蒼生「・・・思い切りましたね。」

2つにするという事は練習量も倍になるし更にR o s e l i aは後に別のライブを

控えてる。負担はかなりのものだと思うが・・・

蒼生「大丈夫なんですか？」

友希那 「何時でも最高の音楽を届けるのがR o s e l i aよ。」

あこ 「あこも頑張りますよ！」

リサ 「でも大変じやん、セトリ違つたらセツティングも変わるし練習量も倍だよ？」

あこ 「ば、倍!? 友希那さーん！」

燐子 「O V E R T H E F U T U R E ライブとこんがらがらないようにない

うか・・・」  
皆気合い入つて見たいだし・・・しかし、いいのだろうか。ハツキリいえばチユチユ  
に煽るだけ煽られてそれを受けた形でこの勝負は成立している。そもそも俺はこの勝  
負の話アイツから聞いてなかつたし他のメンバーにも納得いく形で伝わつてるんだろ  
うか・・・

友希那 「じゃあ、練習始めるわよ。」

紗夜 「・・・それは、どちらの練習ですか。」

友希那 「紗夜?」

紗夜 「O V E R T H E F U T U R E ライブを差し置いて、なぜこの勝負を受けた  
のですか。」

蒼生 「・・・文句じやないですが、俺も少し気になつてました。」

友希那 「・・・」

紗夜「湊さんは以前の自分と彼女が似ていると言つっていましたね。それで見過せないという事ですか？これは本当にR o s e l l i aに必要なことなのですか？」

リサ「2人とも、練習しよ？ね？」

友希那「いえ、この状態では練習にならないわ。」

紗夜「ええ、時間の無駄ですので、私はこれで失礼します。」

蒼生「・・・俺もこれで」

リサ「紗夜！蒼生！」

紗夜「・・・今井さんは、何も疑問を感じないんですか？」

リサ「分かつてはないけど、友希那にも考えがあるんだと思うし、ホントにほつとけないのかも。蒼生も、ね？」

今井さんは俺にも諭すように言つてくる。俺は別に怒つてるんじゃないけどな。

蒼生「今井さん？俺は別に怒つてる訳じやないです。ただ練習するならちゃんと気持ちができる時にして欲しいんです。次、ちゃんとしましょう、ね？」

リサ「あ、う、うん。」

雰囲気か、俺の言い方が良かつたか、今井さんはすぐ引いてくれた。

蒼生「すみません、また明日。」

リサ「ま、また明日。」

俺と氷川さんはそのままCIRCLEをやる。そのまま氷川さんは帰ってしまったので俺も帰路につくことにする。

蒼生「・・・はあ」

俺も空気悪くしちゃったかなあ、とか今更ながらに罪悪感が出始めた。まあ、悪いことしたわけじゃないし、平気、かな?

六花「あれ? 蒼生さん?」

蒼生「あれ? ロック? どうした?」

六花「これからますきさんのところで練習するんです。蒼生さんはどうしたなんですか

?」

蒼生「今帰りだ、練習付き合うか?」

六花「いいんですか? お願いします!」

たまたまロックに出くわしたのでこの消化不良な感じを燃焼させてもらうことにしよう。

蒼生「てわけで来ました。」

ますき「そうか。聞いてくれるのはありがてえし、ロック! やるぞ。」

六花「は、はい!」

直ぐに練習が始まる。ロックも段々とRASの曲にも慣れてきているようで技術も

着々と上がっている。

六花「ど、どうでしたか？」

蒼生「ああ、ドラムとのリズムも合つたしだいぶ仕上がりてるな。ますきもなかなか良かつたぞ。」

ますき「・・・ああ。」

蒼生「ん、なにか不満でも？」

ますき「いや、そういうわけじやねえ。気にすんな。」

うーん、こういう些細なことが意外と大事だつたりするんだがな、本人が言いたくないなら無理に聞き出すこともしたくないし、

蒼生「わかつた。でも溜め込むなよ？ ロックもな？」

ますき「・・・わかつた」

六花「は、はい！」

蒼生「じゃあ続き行くか！」

俺はいい時間になるまで2人の練習に付き合つた。そして次の日なんてあつという間にくるもので、氷今日もR o s e l i aを教える日だ。川さん大丈夫だろうか。と思つていると。

紗夜「すみません、委員会で遅れてしまつて。」

リサ 「紗夜！良かつたー、来ないかと思つたよー。」

紗夜 「練習だから来ますよ。それに、あんな人達に負けてる訳には行きませんから。」  
あこ 「じゃあ頑張ろーー！ところで蒼生さーん？ 昨日はろつかのこと教えてたんで  
しょーー？」

蒼生 「!?」

紗夜 「神風さん？」

リサ 「へえ？ アタシ達のことほつといてーー？」

蒼生 「い、いや、違うんですよ？」

あこ 「え？、でもろつかが手取り足取り教えてくれて楽しかったーって言つてたよ？」

燐子 「て、手取り足取りつて／＼／＼

なんかそれだといやらしく聞こえるんですけど？ てかなんで急にギヤグな感じにな

るわけ？ さつきまで少し物語的につまんなかったからか？ オイ作者！ 何とか言え！

友希那 「まあいいじゃない。今日は練習できるんだし、昨日の分を取り返すわよ。」  
ホツ助かつた。

友希那 「ちなみにその話、あとでぐわしく」

あ、終わつた。

ライブ当日

香澄 「あれー？ 蒼生だ！」

蒼生 「戸山か・・・」

香澄 「あれ？ なんか元気ない？」

蒼生 「ま、まあな」

だつて Roselia のとこから出てつてロックとますき教えてたつてバレてこつ  
てり絞られてたんだからな。

香澄 「そういえば今日は楽屋側じやないんだね？」

蒼生 「俺も投票する。だから今日は客としてきた。」

香澄 「え？ どつちにするの？ ライブ前のは貼つた？」

蒼生 「貼つたよ。」

香澄 「どつちどつちー？」

蒼生 「口が軽そだから言わねーよ。」

香澄 「えー、けちー。」

有咲 「おーい、香澄ー？ 始まるぞ？」

香澄 「すぐ行くー！ ジやあまた後でねー、後教えてね！」 スタスタ

蒼生 「ハイハイ」

そしてライブ。結果は、R A S の勝利だつた。

278 彼女達は彼女達らしく、俺は俺らしく。

蒼生「・・・やつぱりな。」

その時の俺の顔は、多分悲しい顔してたんだろうな。

# R o s e l i a に

あの勝負以来俺はR A Sの方には顔を出せていない。他のバンドがライブが近くなつて いるし、特にR o s e l i aはO V E R T H E F U T U R E L I V Eがある。向こうはチュチュが基本見てるだろ うし俺も呼び出された時以外は来なくていいと言われていたから気にしては無いのだが。ちなみにロックとはちゃんと会つている。

六花「蒼生さん？」

蒼生「ん、どうした？」

六花「いえ、ぼーっとしてたので。」

蒼生「悪い悪い。じゃあ帰るか？」

六花「はい！」

ちなみに今は羽丘の帰り。最近ライブで忙しくてゆっくり帰れる時間があまり取れていなかつたが今日は少し練習時間まで練習があるため一緒に帰ることにした。

蒼生「最近練習に顔出し出来てないがR A Sの方は大丈夫か？」

六花「はい。前のライブでモチベーションも上がつて増すので。でもその、また練習見に来てくださいね？」

蒼生「そりや勿論。ロツクもバンド楽しめてるようで良かつたよ。」

六花「ありがとうございます。その、特に蒼生さんに見てもらつての時は、頑張つてます／＼／＼ボソボソ

蒼生「・・・チユチユにバレたら怒られるぞ／＼／＼  
てかもうバレてるだろうけど。あとこういう事しれつとロツクは言つてくるんだよな・・・まあ嬉しいからいいけど。

六花「・・・／＼／＼ギュ

蒼生「ち、ちよ、ロツク／＼／＼

しかもこの雰囲気で腕まで組んできた。今は周りに下校してる生徒が見えない。見えないと、恥ずかしいんだよな。

六花「もう着いちゃうので、少しだけダメですか？」

蒼生「・・・わかつたよ」

なんだかんだロツクには甘いんだよな。惚れた弱みか。

六花「あ、着いちゃいましたね。今日はR o s e l i a さんですか？」

蒼生「そうだな。大事なライブも近いし暫くは。」

六花「そうなんですね。落ち着いたら私達もよろしくお願ひしますね。」

蒼生「勿論だ。じゃあな。」

六花「はい！また明日！」

少し幸せな時間を過ごし俺はCIRCLEに向かつた。恐らくこの一週間はRoseliaの練習に集中的になる。まりなさんからもそうしてくれと言われているし、俺も頑張りますか！

蒼生「というわけでやりますよー。」

紗夜「何がというわけなのか分かりませんが、そうですね。始めましょうか。」

CIRCLEに着いた俺は先に到着していたRoseliaと合流し練習を始める。週末のライブに向けてみんなも気合いが入っている。ただ少し前のツーマンライブのことを気にしているのかあんまり目立つほどではないが音に乱れが見られた。だがFWFを目指すならかなり致命的なものになる。治していかなければいけない。だが急かすのもストレスになるし、教える側の些細な悩みの種だ。

蒼生「今日はここまでにしましょう。」

そんなこんなで今日の練習もあつという間に終わつた。言葉を選びつつアドバイスをするのは大変だがライブのことは皆しつかり見えてるみたいだし明後日くらいには普通にできるだろう。

友希那「ええ。どうもありがとうございます。明日もお願ひね。」

紗夜「・・・私は少し残ります。」

蒼生 「俺も見た方がいいですか？」

紗夜 「いえ、問題ありません。確認だけですから。」

蒼生 「わかりました。何かあれば呼んでください。」

氷川さんを除きスタジオから出て少し休んでいる。すると練習が終わつたのか A f ter glow がでてきた

モカ 「あ、お疲れまでーす。あおくんもちつすー」

蒼生 「ちつすー。お前らも練習だつたな。お疲れ。」

つぐみ 「ありがとうございます蒼生くん。そう言えば前の R o s e l i a のライブ、すごかつた  
ですよ」

モカ 「蘭も投票 R o s e l i a にいれてましたよー。」

蘭 「ちよ、モカ//／＼」

そうだつたのか。ちなみに俺はどちらに入れたかは誰にも言つてない。雰囲気を悪くしない為だ。

モカ 「あおくんもだよねー。」

蒼生 「そうちよ、なんで知つてんだよ？」

モカ 「これでーす。証拠しゃしーん」

そこに移されていたのは R o s e l i a の投稿に使われた用紙の写真。そこにはひ

とつの書き込みが。

リサ『『がんばれよ』つて、これだけ？なんでこれで分かるのモカ？』

モカ「ふつふつふー、モカちゃんはあおくんと席が隣なのでノートとか見せてもらうんだけどねー、筆跡が同じなのですよー。」

蒼生「それ理由にならないだろ？似てるのかもしれないし」

モカ「でもさつきなんで知ってるんだ？つて言つてたよねー？」

この野郎、カマかけてやがったのか。まさか青葉に一杯食わされるとは思わなかつた。

リサ「ま、まあまあ。で、蒼生？ホントなの？」

聞くのかよ！・・・まあそりや聞くよな。R o s e l i a にもR A S にも本番前の練習日に聞かれだし・・・

蒼生「・・・そうですよ。」

モカ「ほら言つたとーりでしょー？」

蒼生「なんでお前が自慢気なんだよ・・・」  
なんだかんだでバレた・・・もういいわ。

友希那「・・・蒼生」

蒼生「な、なんですか？」

友希那「・・・ありがとう」

蒼生「へ？ あ、はい。」

まさか湊さんにお礼言われるとは。あんまり悪い気がしない  
～翌日～

今日も今日とて R o s e l i a 練だ。皆のモチベも少しずつ上がってきたしあと少しで完全に仕上がるな。

蒼生「今日はここまでですね。」

リサ「蒼生！ 少し確認したいところがあるんだけど。」

あこ「あ、あこも！」

燐子「わ、私も・・・！」

友希那「私もお願ひするわ。」

蒼生「じゃあまりなさんに確認してきますね？ 少し待ってください。」

紗夜「・・・少し休憩にしましよう」

そう言い氷川さんは俺と同じタイミングで出ていく。先に俺はまりなさんに延長許可を貰い戻つたのだが・・・

可

蒼生「!、氷川さん！」

氷川が倒れていた。かなり辛そうだ。

蒼生 「失礼します・・・すごい熱だ。」

リサ 「蒼生、どうしたの？ つて紗夜！？」

あこ 「わ！ 紗夜さん！」

リサ 「あこ！ まりなさん呼んできて！」

友希那 「紗夜？ ・ ・ ・ !?」

燐子 「水川さん・・・!?」

そのあとは大変だった。俺がロビーまで運んで休ませて救急車が来て。幸いただの熱だつたからよかつたが、大丈夫だろうか？ 疲れが溜まっていたのだと思うが・・・ラ  
イブまでに間に合つてることを祈る。

# 音の本流

氷川さんが倒れた次の日。まりなさんから今日の練習は氷川さんが来ないので俺は来なくて大丈夫と連絡が入つた。つてなると持て余すんだよなあ・・・

蒼生「はあ」

六花「蒼生さん?」

蒼生「ああ、いや、なんでもないんだ。」

ちなみに今は朝の教室。俺のとこに口ツクが遊びに来ていた。

六花「そ、それにも先輩の教室つて・・・緊張します。」

蒼生「まあ、そのうち慣れるよ。顔見知りもいるだろ?」

六花「そ、そうですけど、雰囲気が・・・」

あー、なんか違う教室でそうなるの分かるかも。特に学年が違うとそうなるよな。特に口ツクはそういうのに敏感なところあるし・・・

蒼生「気にすんな。誰も殴つてきたりしないよ。」

六花「わ、分かつてますよー。もう。」

蒼生「あはは」

？」

六花 「そう言えば、R o s e l i aさん、大丈夫だつたんですか？倒れたんですよね

蒼生 「幸いただの高熱らしい。今日の練習は俺は行かなくていいんだとよ。ロツク、予定ある？」

六花 「すみません。今日は練習で・・・」

蒼生 「ならしようがないか。・・・お？ チヤイムなつたぞ？」

六花 「あ、わかりました！ また今度。」

ロツクと別れ授業が始まる。なんだか身が入らなかつた。R o s e l i aの事が何度も頭をよぎつた。なんだかんだで俺も心配みたいだ。他のバンドの事は自分で解決させるようにしてゐるんだが、やつぱり長いこといるど情が出来るのかね。

先生 「今日はここまで。各自復習しておくよう。」

蒼生 「あ・・・おわつたのか。」

いつの間にか授業が終わつていた。

蒼生 「・・・はあ。」

仕方ない。冰川さんのどこ行くか。なんだかんだで心配だし。

リサ 「あれ、蒼生じやん！」

蒼生 「今井さん！宇田川と湊さんも。」  
 あこ 「奇遇だねー！あこたちこれから紗夜さんのお見舞い行くんだけど蒼生さんも行くー？」

蒼生 「ああ、行くよ。」

リサ 「じゃあレツツゴー！」

というわけで Roseli a メンバーと行くことになった

＼氷川宅＼

あこ 「さよさん（??○▣??○▣??）」

紗夜 「宇田川さん、落ち着いて」

氷川さんは自室のベッドで寝込んでいた。日菜さんによればなんと39度もあつた  
 らしい。

蒼生 「とりあえず色々買つてきたので冷蔵庫入れておきますね？」

紗夜 「すみません、ありがとうございます・・・」

リサ 「じゃああたしリンゴ向いてくるねー」

あこ 「あ！あこも手伝うー！」

日菜 「じゃああたし、お粥作るよー！」

燐子 「わ、私も手伝えます！」

友希那「・・・私は？」

リサ「友希那是まつてて？」

湊さんと冰川さんを置いてリビングに行く。あの二人にしておけば多分 Rose i aはいい方向に行くだろう。というのも音楽の方向性やあの対バンライブで割れたのはあの二人だし落ち着いてる今なら多分いい話し合いができるだろ。

リサ「ねえ蒼生？」

蒼生「ん、はい？」

そんなことを考えてると今井さんが話しかけてきた。

リサ「蒼生つてさ？あの時私達に票入れてくれたって言つてたじやん？」

蒼生「・・・はい。」

リサ「なんでアタシ達だつたの？」

あこ「あ、それあこも気になる！」

燐子「わ、私も気になります・・・」

なんか他のふたりも食いついてきたな。

蒼生「・・・そうですね、正直最初はR A Sに入れようと思つたんですよ？ロックの

デビュー戦ですから。」

リサ「わお、正直。」

蒼生「まあ直ぐにその考えは捨てましたけど。真面目な話、R A SとR o s e l i a の技術は俺から見ればだいぶ近いものです。それこそ聞く人の好みで別れるくらいだと思います。」

燐子「それなら、どうして？」

蒼生「あくまで個人的な技術の話です。バンドとしての完成度はR o s e l i a の方が何段も上。俺はそう思つたので。」

3人「・・・」

あれ？なんか俺変なこと言つたか？

蒼生「えーっと？」

リサ「いや、思つたよりもだつたから。」

どういうことだコラ

リサ「あ、いや変な意味じやなくて。なんか嬉しいこと言つてくれたなつて思つて。」

あこ「うん！ね、りんりん？」

燐子「う、うん、バンドマンとしては多分1番の褒め言葉、だと思います。」

蒼生「・・・それならようございました。」

日菜「あ、そろそろお粥できるよー！」

蒼生「あ、了解です。」

その後はリンゴを剥き何故かポテトを揚げ氷川さんに渡した。その後氷川さんは寝てしまつたので帰ることにした。

（金曜日）

今日は最後の練習日だ。氷川さんも復活し練習に取り組んでいる。いい完成度だ。

リサ「今の、いい感じじやなかつた？」

蒼生「はい。申し分ありませんね。」

紗夜「ふう、本番ギリギリに時間を作つて下さつてありがとうございます。」

友希那「いえ、紗夜が言つていなかつたら私が言つていたわ。」

燐子「あの、氷川さん？もう体調はいいんですか？」

リサ「はい、すっかり。」

みんなの音がまとまつてゐる。これなら本番も・・・

友希那「・・・今日の私達は今までの私たちとは違う。」

リサ「そうだね。」

あこ「あこ、クタクタだけど燃えてます！」

燐子「わ、私も・・・！」

蒼生「皆さん。今の俺に言うことは無いです。思いつきりやつてください。」

友希那「ありがとう。それじゃあ、いくわよ！」

そして本番当日皆さんとの気合いも十分だつた。

蒼生「それじやあ皆さん、頑張つてください。」

友希那「行つてくるわ。」

リサ「行きますかー。」

紗夜「行つてきます。」

あこ「行つてきます！」

燐子「行つて、きます・・・！」

そして、メンバー紹介が始まる。そして最後。

リサ「そして我らがボーカル、湊友希那！・・・??」

いつもならここで一礼が入るのだがしない。どうしてだ？

友希那「・・・皆。」

ん？なんだ？俺も聞いてないMCが始まる。

友希那「いつもR o s e l i aを支えてくれて、ありがとう」

・・・わああああ！！

会場がこれまでにない熱気に包まれる。今の思い。全てが籠っているのを感じる。

友希那「今再び、燃え上がれ！」

そしてF I R E B I R Dが始まつたのだが、

蒼生 「!?

この感覚は・・・

～3年前～

あれは俺が弾き語り終わりの時だつた。

海斗 「お前、凄いな！」

蒼生 「ん、誰？」

天音 「あの、突然すみません！」

俺の前にあいつらが現れたんだ。

蓮 「ギターだよ。すごい腕だな。」

蒼生 「ああ、その事か。ありがとな。これでもまあまあ長くやつてるんでね。」

蓮 「その腕を見込んで頼みがある。俺たちのバンドやらないか？」

蒼生 「バンド、ねえ。」

当時の俺はあんまりバンドに興味がなかつた。父さんに海外のバンドはどうとかうるさく言われてたし若干の嫌悪感があつたからだ。

蒼生 「悪いが、今はバンドは・・・」

天音 「あ、あの、1回だけ！」

蒼生 「え？」

天音 「1回だけ合わせてくれませんか！」

その後みんなから押されて次の日渋々合わせることになつたんだ。

天音 「あの、来てくれてありがとうございます。」

蒼生 「いいけど、ほんとに一回で良いんだな？」

海斗 「ああ、気に食わなかつたら帰つてもらつて構わない。」

蒼生 「分かつた。じゃあ行くぞ。」

海斗 「1、2、3、4」

そして歌い始めた時俺は衝撃を受けた。3人の技術に呼吸の合い方。そしてそこに自然と入つていくような俺の歌声とギター。鳥肌が止まらなくて音の本流が見えるようだつた。

蓮 「・・・どうだつた。」

蒼生 「・・・バンド。入させてくれ。俺からお願ひする。」

海斗 「うし！ そういえば自己紹介もしてなかつたな。俺は暁 海斗！」

蓮 「神代 蓮。」

天音 「神代 天音です、よろしくお願ひします。」

これが俺のバンドの始まりだつた。そして・・・

（現在）

その時の鳥肌、音の本流が見える。あの時とは違う、R o s e l i a の色の本流。そして何よりもこの音。この前の練習とは段違い過ぎる。

蒼生「・・・ハハ。」

これは凄い。今のR o s e l i a のレベルは間違いなくR A S を超えている。俺たちすらも危ういかもしれない。

蒼生「・・・面白くなつてきた。」

まるで自分のことのように俺はワクワクしていた

# たまにはこんなのも

俺はあのライブの余韻に未だに浸っていた。R o s e l i a の皆には一応のアドバイスはしたもののそう簡単には文句なんか出てこなかつた。あいつら本人は気がついてなかつたがあいつらはさらに大化けする。間違いない。

モカ 「ねえあおくーん。」

蒼生 「ん、どうした?」

モカ 「なんかぼーっとしてたからー。最近そーゆー事多くなーい?」

蒼生 「ああ、ちよつとな。色々あつたもんだから。」

蘭 「それって、あのR o s e l i a のライブのこと?」

モカ 「へー、そーなのー?」

話に入ってきた美竹が突如聞いてくる。別に隠すことでもないし言つてもいいか。

蒼生 「ああ。あのライブは俺が見たR o s e l i a の中で断トツだ。今までのあいつらじやない。」

蘭 「蒼生が言うなら間違いないね。あたしも見たけど、凄かつた・・・。」  
やつぱり美竹も感じるものがあつたらしい。まあ今までのR o s e l i a を見てき

た人ならわかるレベルで変わつていただろう。

六花「蒼生さん！お待たせしました！」

蒼生「おう。じやあまたな。」

蘭「ん、また。」

モ力「またねー。」

六花の迎えも来たので帰ることにした。

六花「なんだか今日の蒼生さんの表情イキイキしてますね？」

蒼生「そうだな。まあいい事あつたし。」

六花「そ、うなんですね♪蒼生さんのその顔好きです♪」

蒼生「ん、そ、そ、うか／＼」

今は反則だろ・・・なんか最近ロツクにこんな事言われてなかつたから不意打ちくらつたな。不覚。

六花「その照れた顔も久しぶりですね。つとすみません。電話です。」

ひとしきりからかつた後、ロツクはかかつてきた電話に出る。ロツクは人をからかう事があまりない。むしろからかわれる側なんだがこうしてからかつてくれるのは俺に気を許してくれるからだろうか。まあ付き合つてからそこそこ経つたし特にギスギスしたこと無い。このまま平和に付き合えるといいな。

六花「はい、はい。分かりました。失礼します。」

蒼生「ん、今の声よしこさんだよね？どうかした？」  
ちなみによしこさんはG a l a x yの店長である。

六花「実は、その。温泉に行つてくれませんか？」

蒼生「はい？」

～数十分後～

蒼生「んで、これはなあ・・・」

どうやらロツク曰く商店街の長老さん達が温泉旅行の前に腰を全員やつてしまい  
キヤンセル出来ないのでガールズバンドをかき集めて旅行に行つて欲しいとの事だ。  
それで一応俺も呼ばれたわけなんだが、女子達と温泉つてなあ、ロツクもいるからセー  
フかもだがこれ場合によつちやアウトなんじやないか？

蒼生「はあ・・・」

六花「蒼生さん？どうしましたか？もしかしてあまり乗り気じやないですか？無理し  
なくとも・・・」

蒼生「あ、いや、別にそういう訳じやないよ。ちょっと緊張してるだけ。つと。そろ  
そろ行く時間じやないか？」

六花「あ、そうですね！点呼取ってきます！」

ちなみに集まつたのはポピパ、ハロハピ、アフグロ、R o s e l i aは全員。R A S がますきとレイとロツクの3人。かなりの大所帯だ、

六花「じゃあ乗つてください。」

そしてバスに座らされる。席順はくじで決めさせられたが・・・

蒼生「あ、うつす。」

ますき「うつす。」

ますきの隣になつた。が。

蒼生「・・・」

ますき「・・・」

喋りにく！圧が凄い！狂犬だよ狂犬！

ますき「・・・なあ？」

蒼生「ん？なんだ？」

幸いにも向こうから話題を振つてくれた。

ますき「すつげえどうでもいいことなんだけどさ？何であたしとレイは名前呼びなんだ？他の奴らは苗字だろ？」

蒼生「あー、その事な。単純だ。俺がお前たちの苗字知らないから。ちなみにチユ チュとパレオに關しては本名も知らん。」

ますき「あ、それあたしも知らねえな・・・今度聞こ。」

意外とそこから話題は広がり宿までは退屈しなかつた。

ますき「お、着いたみたいだな。じゃあまた後でな！」

蒼生「うつす。また後で。」

旅館に着いたあとは各自の部屋に連れていかれた。ちなみに俺は水蓮の間。R A S と一緒に部屋に連れてかれた。誰一人嫌な顔しなかつたのは精神的に大分楽でいられた。

レイ「随分広い部屋だね？」

ますき「だな。これでタダなのはいいよな。」

六花「ですよね！私はお風呂入りに行きますけど、皆さんは？」

蒼生「あー、俺はなんか入ろうとしてトラブルとか嫌だから、その辺ぶらぶらしてる。」

ますき「覗くなよー？」

蒼生「んな事言うと覗くぞ？」

六花「へ？あ、蒼生さん！で、でも、蒼生さんなら・・・」

蒼生「いや待て待て、悪かつた。冗談だから、な？」

レイ「あ、あはは、なんか大変そうだね？」

蒼生「ああ、慣れねえ事は言うもんじやないな・・・」

そして部屋を出ていく。下に行くと

蒼生「あれ？ パスピレじゃないですか！」

麻弥「あ！ 蒼生さんじやないですかーー！」

イヴ「アオイさん！ ご無沙汰です！」

蒼生「何故ここに？ 仕事じやなかつたんですか？」

千聖「仕事がここだつたのよ。まさかみんなも來てるとは思わなかつたけれど。」

蒼生「なるほど・・・」

日菜「ねえねえ？ あたし達と同じ旅館にいるつてどういう氣分ーー？」

蒼生「控えめに言つて最高っす。」

日菜「あははー♪ 面白ーい！」

彩「あ！ そうそう、これ、前頬まれてたやつ！」

蒼生「お！ あざます！」

そして彩さんが差し出したのは期間限定のパスピレ5人がのるストラップ。数量限定だつたんだがバイトだつたためゲット出来てなかつた。そしたら彩さんが用意してくれると言つてくれたんだが、マジで用意してくれるとは・・・

蒼生「あれ？ なんでこれ2つ？」

彩「あ、事務所の人が1つサービスしてくれたんだ！ 誰かファンの人渡してあげて

? 私が渡すとダメだつて千聖ちゃんが・・・

千聖「そうよ。蒼生くんはコーチだから言いけれど、他の人に渡すとネットニュースとかにもなりかねないから。」

彩「そ、そうだよね。だから蒼生くん。これ2個持つてて?」

蒼生「分かりました。ありがとうございます。」

しかも裏にしれつと彩さんのサインがある。こりや超レアだ。

蒼生「それじゃあこれで、またどこか中で会えば。」

彩「うん! ジやあね!」

そしてウハウハで歩き出す。こんなにバスパレに優遇してもらえていいんだろうか。俺はさては世界一幸せなのでは無いのだろうか? しかもロツクはこのバスパレ好きも理解してくれてるし、恵まれてるよなー。

ますき「ん、どうした蒼生。そんな気持ちわりい顔して、」

蒼生「気持ちわりいわ余計だ。ちょっといい事あつてな。」

ますき「ところでこれなんだけどよ、」

蒼生「ん、クレーンゲーム?」

ますき「あれ取れねえんだけど。」

ますきが指したのは可愛らしい人形だった。

蒼生「ああ、あれか、200円貸してみ？」

ますき「お、おお？」

200円投入するとまずはくるつとなってる耳に左アームをかける。このアームは握力は強い方なのだろう。それだけでゴール近くまできた。手助けだけしようと思つたが、行けるな？ 次に今度はさつきの耳を使つて引きずるよう人に形を動かして・・・

蒼生「・・・ほれ」

ますき「す、すげえな・・・」

蒼生「まあな。多少自信はある。」

パスパレのグッズ狙いでやりまくつてたら上手くなつてたのはここだけの話。

花音「あ、あのー？」

蒼生「ん、松原さん？」

花音「あのー南館つてー？」

蒼生「あ、右です。」

花音「あ、ありがとう」

松原先輩方向音痴らしいからな・・・旅館内とかも苦手なんだろーな・・・て。

蒼生「道違います！ そこ正面です！ こっちですこっち！」

ますき「こっちつすよ。」

つと言うわけで2人で道案内することになった。途中憐い、とかブシドーとか言つて  
る連中を見かけたがガン無視して数分歩くと自販機の前に見知った顔が。

彩「あ、花音ちゃんだ！」

花音「良かつたあ。」

またもバスパレさんエンカウント。メンバー減つてること。

千聖「ん？ あの人は確か……」

麻弥「き、ききききき、キング!?」

あ、そういうや麻弥さんますきのファンのだつたな。

ますき「……バステルパレットの、大和 麻弥さん？」ギロ

麻弥「ひい!?」

怖え！ 喧嘩ふつかけねえだろーな……

ますき「尊敬してるつす！」

麻弥「うえ!？」

ますき「自分、麻弥さんのドラムがアイドルやられてる前から大好きで！ あんなすげ

えドラム叩けてアイドルまでやつてるなんてスゴすぎるつす！」

あ、ファンだつたのな。すげえ目がキラキラしてる。

巴「あれ？ 何してるんですか？」

沙綾「あ、巴！鍵忘れてる！」

あこ「あ、お姉ちゃん！」

声に釣られたのかひとがワラワラやつてくる。

麻弥「お！これは・・・」

ますき「麻弥さん？」

麻弥「ドラマー会議、しませんか？」

つてな訳で麻弥さん率いるドラマー達は言つてしまつた。

千聖「蒼生くんはこれからすることはあるのかしら？」

蒼生「いえ、特には。千聖さん達は？」

千聖「私達はこれから花音と彩ちゃんとお風呂に入りに行くわ。」

そしてバスパレとも完全に別れ目に付いたのは

蒼生「・・・ポピーの間？」

なんか騒がしいな？ここはポピ。バ

蒼生「入るぞー？つて口ツク！」

部屋に入るとロツクが顔を真っ赤にして布団に入つてゐる。てか市ヶ谷も花園もダ  
ウンしてやがる。部屋にはほかのポピパメンバー、イヴ、奥沢がいた。

蒼生「どうしたんだこれ？」

美咲「みんなのぼせたみたい。」

蒼生「あー・・・」

というかお風呂屋の手伝いしてる子がのぼせるつてどうなの・・・  
つぐみ「ポピパ、いるー?」

沙綾「いるよー、入つて入つてー」

そうしてると上原と宇田川、羽沢が入つてくる。

蒼生「どした?」

上原「ポピパのM・V、凄いことになつてるよー!」

巴「早く教えたくつてさ!」

一同「??」

そして画面を覗き込むと

一同「わあ! (おーーー)」

沙綾「再生数が1万超えてる!」

香澄「来れつて凄いのー?」

蒼生「・・・凄いよ、これ。」

ポピパはこの辺でしか活動していないバンドだし。他のバンドも多数出演してるから  
だろうけどもだとしてもこの再生数は知名度もかなり伸びるはずだ。

有咲「・・・ワンチャンのるしかねえ！」へろへろ

蒼生「は？い、市ヶ谷！」

なんか言つたらぶつ倒れやがつた。そこからはてんや。やれ水だの氷だの。なんだ  
かんだ楽しい旅行になつた

## 嫉妬そして欠落

あの温泉旅行の翌日。俺とロツクはチユチユのスタジオにお土産を渡しに行つていた。ロツク曰くパレオは実家にいて温泉まで行けなかつたらしくチユチユは単純に風呂が苦手でシャワー派のようだ。というわけでお土産だけでも持つていこうとロツクと話し合い温泉まんじゅうを金を出し合い買つた。ちなみに俺が買うと言つたら「絶対割り勘です！」とロツク側が折れなかつたので渋々割り勘にした。

六花 「でも、これで良かつたでしようか？」

蒼生 「まあ個数もちようどいいし、お土産としても無難だし問題ないだろ。ほら、ついたぞ？」

六花 「そうですね。開けてもらうので少し待つてください。」

余談だがこのチユチユの特大スタジオには顔認証システムが着いている。R A Sのメンバーは登録されているのだが何故か俺はされなかつた。理由を聞いたら必要な事は携帯で全てやり取りすればいいし練習で来る時は大体ロツクと一緒に来るから必要ないとの事だつた。

六花 「開けてもらいました。入りましょう。」

蒼生「ああ、サンキュー！」

そそくさと中に入ると中にはチユチユの姿は見えなかつた。その代わり

パレオ「いらっしゃいませ！本日はおふたりでどうされましたか？」

パレオがお出迎えてくれた。手に持つてるのは……ああ、あれか。

六花「あの、これ。温泉旅行のお土産です。」

パレオ「わあ！ありがとうございます！」

蒼生「ああ、それはいいんだけどよ？お前のご主人は？」

パレオ「すみません、チユチユ様は皆さんのステージングを詰めるのに集中していいて。」

ロツク「いえ、こちらこそ急にお邪魔しちやつて。でも凄いなあ。曲も歌詞も演出も、

全部やつて。」

パレオ「はい！さすがチユチユ様です。」

蒼生「まあ、少し気張りすぎな所もあるかもしねいがな。無理しすぎない程度にお前らがフオローしてやれ」

六花「はい！」

パレオ「・・・」

蒼生「ん、どした？」

俺、今なんか変なこと言つたか？

パレオ「えーっと、二つ聞いてもいいですか？」

蒼生「ん？なんだ？」

パレオ「えーっと、何だか蒼生さんって言うことが時々先生っぽいというか、とても近い歳の人が言うこととは思えないんですよね？」

蒼生「あー、まあ色んなバンド見てきたから・・・」

パレオ「色んな？」

蒼生「・・・dead emperorボーカル神風 影狼の息子って言えばわかるか？」

パレオ「え!? dead emperorって、あの!?」

蒼生「腐るほどバンドは見てきた。納得出来たか？色々アドバイスが出てくるの。」

パレオ「は、はい。納得です。」

『dead emperor』バンドをやつてなくとも誰もが知つてるであろうその名前。世界的に有名で実力は衰えることを知らない。テレビ等にも度々出るほどの有名人。俺は色々めんどくさいので俺が息子っていうのは隠してる。

蒼生「2つ目は？」

パレオ「そのキーホルダーなんですけど？」

蒼生「キー・ホルダー？」

パレオが指したキー・ホルダーは先日バス・パレの皆さんに貰った期間限定キー・ホルダーだ。

パレオ「それ羨ましいですよー、私が住んでるところ置いてなかつたので。」

そんなことか・・・さつきまで少し真面目な話だつたからびつくりした。ロツクなんか俺の父さんの話と今の雰囲気の違いに着いていてなくて目が白黒してるし。

蒼生「そうか、限定品つてそういうことあるよな・・・までよ、てことはパレオお前・・・」

パレオ「はい！バス・パレファンです！ファンクラブの会員証見ますか？」

蒼生「どれどれ・・・何！」

なんとそこに書いてあつたのは『鳩原令王那 会員N〇、6』

蒼生「1桁だと・・・身近に俺以外の1桁がいるなんて・・・」

パレオ「えへへー、つてえ？蒼生さんも1桁!!」

蒼生「ああ、N〇、7。お前の一つ下だな。」

こりや凄い巡り合わせだ。あ、そうだ！

蒼生「そういうえばこのストラップもう一個あるんだけど、いる？」

パレオ「いいんですか！ありがとうございます♪」

1桁に渡せるなら俺も本望だ。ちなみにW i l d B a b yのメンバーでも全員1

0代の数字に入っている。

六花「・・・は!? ここはどこですか!?」

蒼生「あ、戻ってきた。大丈夫か?」

六花「は、はい。大丈夫です。」

蒼生「なら良かつた。俺たちはこれでお暇するよ。」

パレオ「分かりました! お土産はパレオが責任を持って渡しておくので! あと7日の件、よろしくお願ひしますね?」

蒼生「ああ、分かつてる。」

六花「はい。それじゃあ、おやすみなさい。」

パレオ「はい、良い夜をー」

そのままロックと俺は帰宅する。ちゃんと意識がどつか行つてゐる間の説明はした。

（翌日）

蒼生「・・・はい!?」

まりな「だから、このBang Dream! の期間が終わるまでは出場してバン  
ドに教えるの禁止つて言つたの。」

俺はCIRCLEに着いた途端急にこんなことを言われた

蒼生「な、なぜ?」

まりな「うーん、やつぱりもう後半戦だし、後は自分たちの力でやつてもらうのが一番かなーって。何よりガールズバンドのイベントだし。」

蒼生「まあ、まりなさんがそう言うなら。」

まりな「あ、でもライブ見に行くとかならないからね？あとちゃんとR o s e l i a とポピパには連絡してあるから。」

蒼生「了解しました。」

まりな「ここで羽を伸ばすも良し他のバンドに集中するも良しだから、そこは蒼生くんに任せることに任せますね？」

ということでシフトはまりなさん通してゆっくり決めていいとの事だつた。うーん、ここからどうするか。

ブルルルルルルル

蒼生「電話？市ヶ谷からか。もしもし？」

有咲「ああもしもし？なあ、ひとつ聞きたいんだけど、」

蒼生「あー、実はまりなさんからな・・・」

有咲「いや、その話は私も聞いたけどさ、演奏以外もダメか？」

蒼生「まあ、出来れば。」

有咲「わかった。私たちで決める。その代わり一つお願ひがあるんだが。」

蒼生「ん？」

（数日後）

今日はGalaxyに来ている。何でも最近ポピパはハシゴライブを繰り返しやつて票を稼いでいるそうだ。すごい体力だな。ちなみに数日前の相談はハシゴライブしても大丈夫かの確認だったらしい。そして、

香澄「ありがとうございましたー！」

ライブが終わる。

蒼生「えっと、例のやつは・・・あつた。」

たえ「ふう、」

香澄「あ、おたえー、ちょっと待つてー♪」

たえ「ん、なにー？」

するとポピパの花園以外の4人がクラツカーレを取り出し

「お誕生日おめでとう！」

おめでとうー、と客席からも聞こえる。よし、そろそろか

香澄「今日はゲストも呼んでます！どーぞ！」

蒼生「どうも、Wild Babyの蒼生です！」

きやあああああ!!!!

やつぱり1回ここでライブしたからか認知はされてるみたいだな。盛り上がりで何より。

蒼生「そして、誕生日、おめでとう。」

たえ「うん、おめでとう・・・だれの?」

蒼生「んが!」

俺は裏で用意してたクラツカーバズーカを持ちながらズツコケる。

有咲「お前、今日何日だよ!」

たえ「ん? 12月の3日・・・あ、私だ! おめでとー私もありがとーみんな!」

蒼生「はあ、やれやれ、改めて、うい!」

客先に向かつてバズーカをぶっぱなす。その後見に来てたチユチユとパレオ以外R

A S メンバーと祝つてたのだが・・・

蒼生「あ・・・」

六花「どうかしましたか?」

蒼生「R A Sの順位が・・・」

2位に落ちていた。

有咲「え? ジやあ・・・1位は・・・」

1st Rosellia 8526票

そう、R o s e l i a がトップにたつていた。と同時にR A S の3人と俺に連絡が入る。内容は今すぐスタジオに来いとの事。とりあえず各々思うことはあつたものの向かうこととした。

六花 「チユチユさんやつぱり怒つとるんかな・・・急に集合なんて・・・」  
ますき 「怒るつて言うか拗ねてんだろ。なんか甘いもんでも作つてくれればよかつたな。」

チユチユ 「必要ないわ。」

チユチユとパレオが入つてくる。今までにない緊迫した空氣だ。

チユチユ 「N o p r o b l e m。逆転する方法は考へてあるから。」

レイ 「・・・方法つて?」

チユチユ 「私達も他のライブハウスに殴り込みをかける。」

蒼生 「!？」

六花 「殴り込み!!」

チユチユ 「R A S の力は既に知れ渡つてるわ。私たちが仕掛ければ他のバンドは辞退するはず、いや、させてみせる。」

ますき 「物騒だな・・・」

チユチユ 「それから、ここからは私の命令に全て従つてもらう。あなた達のスケ

ジユールも私が管理する。それから他のバンドとの接触も禁止。時間の無駄だから。アオイも例外なくよ。」

蒼生「・・・本気で言つてんのか?」

チユチユ「ええ、予定は既に組みたててあるわ。全員それに合わせてバイトも個人的な用事も全部キヤンセル。」

ますき「・・・聞き返すようだが、マジで言つてんのか?」

チユチユ「これは戦いなのよ!」

これは、行けない兆候だ。場の空気の重さ、トゲトゲしさ。でも、こいつらには悪いがいい機会か。RAISE A SUILENが1つのバンドとして完成させるためには、避けて通れない道だろう。

ますき「・・・ちつちえーな。」

チユチユ「は?」

ますき「だからR o s e l i aに負けんだよ。」

チユチユ「はあ!?負けてない!この間だつて勝つたじゃない!もう一度やつても私たちが絶対勝つわ!」

レイ「・・・そうかな?」

チユチユ「・・・なによ。なにいつてるの。」

レイ「・・・いや、」

チユチユ「そんな弱気じや勝てるものも勝てない、あなたR A Sとしての自覚あるの！」

蒼生「・・・」

チユチユ「他のふたりもそう、R A Sはこんな所でつまずくバンドじゃないでしょ？ ポピパのライブなんか言つてる時間ない！ 遊んでる暇なんか無い！ そんな甘い気持ちで私のバンドに参加しないで!!」

ますき「おい、チユチユ・・・」

ますきが宥めようと手をさしだすも、その手を払い除けて

チユチユ「逆らう氣？ 私はプロデューサーよ！」

R A S「・・・」

蒼生「・・・」

ますき「・・・ そうかよ。」

そのまますきは出ていつてしまつた。その後をロツクが追いかける。

蒼生「・・・ 契約違反だ。」

チユチユ「は？」

蒼生「俺は他のバンドを見るからそれを理解した上でR A Sのサポートをさせてくれ

とそういつたはずだ。だからはつきり言うぞ。余程のことがない限りもうここには来ない。」

俺もスタジオから出ていく。冷たく言い放つたが、あそこからR A Sは変われるか、ここがバンドとしての大変な分岐点になる。R A Sのヤツら、上手くやるといいが……

## 特別

俺はR A Sのスタジオを出ると直ぐにロツクを見つける。ますきは既に帰つてしまつたようだ。

六花 「蒼生さん……私達、その、これからどうなつて……」

蒼生 「……すまない。これから具体的にどうとは言えない。」

六花 「そんな……」

やつぱりショックのようだ。そりやそうだろう。せつかくバンド組んで上手く行き始めたのにこの有様だもんな。

蒼生 「でも、これに関しては俺が口を挟むことじやない。分かつてるな?」

六花 「……はい。頑張ります。」

そのままさようなら、とロツクも帰つてしまふ。恋人のあんな姿を見るのは心苦しいがこれもロツクとR A Sのためだ。ロツクは行動力高いし大丈夫、と信じてる。……とはいえあの状況で俺の頭も少し熱くなつてゐる。今は俺も家に帰つて休むことにしよう。

六花 「自宅へ

蒼生 「ただいま……」

蒼生母「おかえりー、どうしたの？元気ないじやない？」

家に帰ると母さんが俺のテンションの低さからかすぐ玄関に出てきた。

蒼生「…仕事で色々あつたんだ。大丈夫、バイトクビになつたとかじやないから。」

蒼生母「そんな心配してないよ。あんたは大丈夫？」

蒼生「大丈夫だ。心配かけてごめんな。」

そのままリビングに入る。晩御飯の準備がしてあつた。手を洗い席に着く。ついで

に顔に冷水をぶっかけ頭をクールにした。

蒼生「いただきます。」

蒼生母「召し上がり。そそう蒼生？」

蒼生「ん、どうした？」

蒼生母「父さんだけどね、6日の夜に帰つてくるつて。」

蒼生「ふーん、ん！」

6日!?今日が3日だから…・・・明明後日!?

蒼生「い、いきなり!」

蒼生母「私だつて驚いたわよ。いきなりさつき連絡入つたんだから。」

蒼生「ま、まあ分かつたよ。ご馳走様。」

蒼生母「はい、お粗末様。」

リビングを出てすぐにベッドで横になる。

蒼生「・・・はあ。」

なかなかに密度の濃い1日だった。仕事の事や花園誕生日からのチュチュのRASの方針。それに加え父さんがもうすぐ帰つてくる。

蒼生「・・・とりあえず明日考えるか。」

俺は疲れていたのかその後はすぐに眠りにつくことが出来た。

（12月6日）

そしてあれから早3日。父さんの帰つてくる日になつた。母さんも朝から忙しそうだつた。RASにはあれから顔を出していないし連絡も来ないので今どういう状況か分からぬ。ロックとは顔を合わせているがRASの話題が出てこない。昨日はRASのライブがあつたそうだが一応ネットを確認するとどうにもパレオがライブに参加していなかつたそうだ。俺のイメージではあいつが1番チュチュの近くに居たしあんな状況なら尚更近くに付くと思つたんだが・・・

蒼生「・・・わかんねえなあ」

モカ「何がわかんないのー？」

蒼生「・・・青葉か。なんか最近よくお前らに絡まれるな。」

モカ「絡まるるような態度をよく取つてるからねー。」

蒼生「はは、返す言葉もない。」

モ力「んで、何悩んでるのー?」

なんか最近地味にこいつらに相談話ばかりしてゐる気がするな。向こうから聞かれることがほとんどだつた氣もするが、それほど俺つて態度に出てたのだろう。

モ力「もしかして六花と喧嘩したー?」

蒼生「そうじやないんだけど……これは俺が悩んでどうにかなることじやないんだ。」

モ力「そつかー、でも悩んでるならやつぱり六花関連でしょー?」

蒼生「まあ、そうだな。」

モ力「うーん、何が起きたかはわかんないけど、なにか相談してきたらちやんと答えて上げるのがいいんじゃない? Afterglowもそうやつてきたしー。」

蒼生「……そうか」

俺はバンド内で何かあつたら余程のことがない限りバンド内で解決して欲しいって考えてるんだが。青葉の言うことも大事なんだよな。

モ力「帰りのホームルームはじまるよー?」

蒼生「そうだな。」

そのまま担任が来てホームルームが終わる、と同時に六花「蒼生さん!」

蒼生「うお、びっくりした。どうした？」

ロックが教室に飛び込んでくる。

六花「そ、その、来てください！」

そのまま腕をグイグイ引かれ連れていかれる。

モカ「ぐつどらつく！」

最後にその言葉を聞き教室を後にする。そのまま校門前まで連れていかれる。

蒼生「ど、どうしたんだ？他の人の前では話せないことか？」

六花「そ、そうですね。その、蒼生さんにお願いがあるんです！」

蒼生「お願い？」

六花「そ、その、パレオさんを探すの、手伝つてください！」

蒼生「・・・なるほど」

六花「わ、私、蒼生さんが、あんまりこういう事に手を出すの好きじゃないってわかつてます！だけど、私たちだけじゃ不安で、後でお礼はします。だから・・・」

蒼生「・・・ストップ」

六花「え？・・・」

蒼生「気持ちは充分伝わった。でもバンド内の事は手を出さない。」

六花「・・・ですか。」

蒼生「ただし！」

六花「え？」

蒼生「まあ、俺の知り合いつていうか、久々に見つけたパスパレ仲間が失踪したつてのも気になるし、俺は友達を探しに行く。同一人物だから、自然と協力する形になるな？」

六花「蒼生さん……はい！ 行きましょう！」

そのまますぐ家に帰る。

蒼生「ただいま！ その、母さん。」

蒼生母「おかえりー、どうかしたの？」

蒼生「その、ごめん。今から出かけるけど、父さんが帰つてくるまでに帰つて来れないかも……」

蒼生母「……わかつたわ。」

蒼生「だから……え？」

分かつたつて、そんなにあつさりいいのか？ なにか裏があつたりするのか？

蒼生母「あんたがそんなに必死そうな顔してるんだもの。ダメなんて言えないわ。」

蒼生「母さん……ありがとう！」

俺はすぐに原チャに跨り出発した。もちろん目指すは……

蒼生  
「いくぞ、  
鴨川！」

## 言葉は呪い

鳩川に着いてからは早かつた。ますきとロツク、俺で二手に別れてパレオを探すことになった。当然だが俺はこの辺りの土地勘は無い。文字通り虱潰しに探すことになる。今は原チャを手で押しながらゆつくりさがしている。

蒼生「……手がかりになりそうなのはパスパレ好きと、鳩原令王那つて名前だけか。」かなり厳しい条件だ。これが場所の特定になる訳でもないしこの名前で聞いて回つたりしたら不審者に勘違いされかねない。この時間だし人通りと言えば今目の前を歩いてる女の子だけだ。どうしたものか……

蒼生「うーむ、ダメ元で聞いてみるか……ん？」

その少女と丁度すれ違おうとした時、その少女の鞄から何かが落ちるのが見えた。小さかつたのでよく見えないが、拾つてみるとそれはストラップ……つてこれは

蒼生「おまえ、パレオなのか……？」

少女「!」

その少女は恐る恐ると言つた感じで振り返る。髪の毛は黒、眼鏡もかけていて雰囲気こそ全く違うが俺の目に映るのは間違いなくパレオだった。

パレオ「・・・どうしてここに。」

蒼生「こつちのセリフだ。ライブを無断で休んでどうしてこんな所にいる。」

パレオ「・・・っ！」

蒼生「おい！」

パレオは答えずに走り出してしまう。すぐに原チャに跨り追うが狭い路地に入られて追えなくなってしまう。

蒼生（くつ、ロツク達に連絡する暇はないか。でもな。）

俺はあいつの足音であろう音を頼りに別の道で追いかけていた。土地勘は無いので時々迷いかけたがこちらの方がスピードはあるのでそこまで距離は広がらなかつた。そうこうしている内に逆に足音がこちらにちかづくのがきこえた。

蒼生（ん、なんでこつちに来てる？ ってあれはロツクとますき？）

なるほど。追つた先で2人に遭遇したのか。って俺ここじやUターン出来ねえ。どうしよ、もう3人追い抜いた。これ詰んだか

（5分後）

蒼生「やつと回れた・・・」

ようやく回れるところを見つけてすぐに向かう。とりあえず先程のところまで行くと話し声が聞こえてくる。そう遠くない場所にいる。

蒼生「・・・いた」

海沿いの歩道橋の上に3人を見つけた。すぐそばに原チャを止めてその場所に歩きだす。向かいながら耳を傾けるとロツク達が説得していた。

六花「パレオさんがいなくなつたらR A Sやあらへん！」

パレオ「ロツクさん・・・」

蒼生「その通りだ。」

俺も追いつき声を掛ける。

ますき「・・・遅かつたな。」

蒼生「わり。おい、パレオ。」

パレオ「・・・はい。」

蒼生「お前にとつて、R A Sはそんなものだつたのか。俺はここで何をこいつらに言われて、お前が何を言つたのかなんて知らないし聞こうともしない。ただおれはいいたいことだけいわせてもらうぞ。」

パレオ「・・・」

普段なら俺はこんなことは言わないだろうが、せつかくここまで来たわけだしこいつらの為にも言わせてもらうか

蒼生「俺は何が経緯でお前がここから出てこなくなつたのか。パレオというお前を閉

じ込めたのかはわからんがお前自身はそれでいいのか?」

パレオ「……私はチユチユ様の隣に居られればよかつたんです。でもチユチユ様は、私は必要ないと。私だけいてもしょうがないと。なのでRASに私の存在価値は無くなりました。あそこにいる理由もいていい訳もありません。」

蒼生「……つまり、チユチユが用済みつて言つたからお前はRASにとつて用済みになつた。と言いたいわけか?」

パレオ「……はい」

蒼生「……お前は、ほんとにそれでいいって思つてるのか?」

パレオ「……」

蒼生「お前にとつてRASはその程度で止めれるもんだつたのか?」

パレオ「……それは」

蒼生「少なくともアイツはそうじやないみたいだぞ?」

パレオ「え?」

俺は振り向き歩道橋の少し遠くを指す。

パレオ「?」

チユチユ「はあ、はあ!」

遠くからチユチユとレイが走つてくる。足音が2人分聞こえてきたので俺は先に気

がついていた。

パレオ「・・・そ、そんな」

蒼生「少なくとも、俺の視界には4人ほどその程度じやない奴がいるが？お前はほんとにそれでいいのか？」

言い終わる前にパレオは走っていた。いま、パレオのためだけに走ってきた人のために、大事なご主人のために。

パレオ「チユチユ様！」

その勢いそのままにパレオはチユチユに抱きつく。

パレオ「チユチユ様ー！」

チユチユ「わ!? パレオ、苦しい・・・」

パレオ「チユチユ様！ 心配かけてすみません！ 勝手に休んでもすみません！ 電話に出なくてすみませんー！」

チユチユ「ち、ちよつと、恥ずかしいから／／／

レイ「ふう。」

蒼生「お、レイ。お疲れ様。」

俺は感動の再会（？）を果たしてゐる2人を少し感動に浸らせてゐる間に俺はレイに労いの言葉をかける。

レイ「蒼生もお疲れ様。」

蒼生「俺はなんもしてねえよ。着いていただけ。」

レイ「んー、そうかな？パレオにすごく暑く喋つてたし、その間私達が追いつく時間も作ってくれたから何もしてないってことは無いんじやない？」

蒼生「それは、フォローになつてるのか？」

レイ「ふふ、さあ？」

六花「あ、あの、蒼生さん。」

息もすっかり整つた六花が話に入つてくる。

六花「本当にありがとうございました。」

蒼生「気にすんなつての。俺は同士を見つけに来ただけって言つたろ？うだうだ言つてねえではよ帰るぞ？」

六花「・・・はい、そうですね♪」

そしてどさくさに紛れて俺の頬にキスをする。俺はめちゃくちゃ顔が赤くなつたがレイは見てないふり。ますきはニヤニヤしながらこちらを見ていた。

# 解決のち土砂降り

ますき 「いやあ、何とかなつたなあ！」

蒼生 「全くだ、ほんとに勘弁して欲しいぜ・・・」

俺とますきは原チャとバイクを飛ばしながらチュチュのマンションを目指して。ていうか俺これ明らかに原チャのスピード違反になつてるくらいの速さなんですけど、警察とか来ないよね？ いないよね？

六花 「でも、良かつたですね！」

蒼生 「まあな。兎にも角にもこれで万事解決だろ。ほら、まだスピード出すぐ？」

六花 「え？、で、でも捕まっちゃうんじや？」

蒼生 「もう捕まるスピードだわ！ ならこれ以上飛ばしても問題ない！」

大問題だけど。

ますき 「そうだな、じゃないと【アレ】に間に合わないかもしけないしな！」

蒼生 「だよな！ ロツク、しつかり捕まつてろ！」

六花 「はい！」

俺はさらにスピードを出しチュチュ宅に向かつた。途中で警察に出くわさなかつた

のはラツキーだつた。

「チュチュ宅」

俺たちは到着するや否やバタバタとチュチュ達のいる最上階にダツシユ（エレベーターは使つた）で向かつた

蒼生「ふいいー」

パレオ「あ、いらつしやいませー！」

蒼生「いらつしやいませー！じやねえよ。」

パレオ「い!?ち、ちょっと、痛いですー！」

俺はパレオの頭に軽めのデコピンを食らわす。

蒼生「これでチヤラだ。もう手間かけさせんな？」

パレオ「は、はいい。申し訳ございません。」

ますき「はは、帰つてきてやることがデコピンつて w」

レイ「ふふ、まあそれですんだからいいと思うよ？」

六花「ま、まあ確かに思いつきり叩くよりかはいいと思いますけど。」

蒼生「いやみんなの中の俺のイメージどうなつてるわけ!?つと、今何時?」

パレオ「ふふ、まもなく12時です！」

その言葉を聞きみんながニヤニヤつとした表情になる。1人を除き

チユチユ 「W h a t ? 1 2 時から何かあつたかしら？」

パレオ 「それはですね？・・・つと、まもなくです！ 3、 2、 1！」

パレオのスマホの時間表示が12時丁度を指す。

パレオ 「それでは皆さん、せーの！」

皆 「チユチユ（さん）（様）誕生日おめでとう！（ゞ）ぎります（）」

チユチユ 「え・・・？」

六花 「間に合つて良かつたです♪」

ますき 「だから飛ばして正解だつたろ？」

蒼生 「ほんと、もう勘弁してくれ。原チャも俺の寿命もすり減るわ。」

チユチユ 「え、今日つて・・・」

レイ 「ふふ、覚えてなかつた？」

パレオ 「それではチユチユ様！こちらへー♪」

チユチユ 「え？ち、ちよつと！」

パレオがチユチユを椅子ごとスタジオに連れていく。俺達も入り各自準備を始める。

チユチユ 「な、何を・・・」

レイ 「シー。」

全員の準備が整いレイが人差し指を口に添えて静かに、と意思表示する。そしてパレ

才のキーボードから演奏は始まる。その曲名を「beautiful birth day」という。俺がパレオに協力を求められ2人で作詞作曲をしていた。と言つても基本的にはパレオが作業し、詰まつたら俺が手伝う、と言つた形だった。歌詞に関しては俺はほとんど口出ししていない。しかしパレオはチュチュの側近をしていただけあって作詞作曲能力が高かつたためここまで完成度の高い曲になつた···ちなみに練習には、だいぶ口出しさせて貰つた。

チュチュ「···」

俺のとなりで聞き入つてるチュチュ。そりやそうだろう。この曲は、チュチュのRASによるチュチュの為の歌なんだから···そしてこの完成度、練習時など比較にならない。俺も思わず息を飲んでしまうほどだ。そして演奏が終わる。

レイ「···チュチュ、誕生日おめでとう。私をRASに入れてくれて、ありがとう。」

チュチュ「レイヤ···」

ますき「この曲はまあ、蒼生とかにだいぶ助けて貰つたけどさ、でもあたしだつてRASのドラムとして支えつから!」

チュチュ「マスキング···」

六花「チュチュさん。私、蒼生さんのおかげでここに入れて、でら楽しくつて、だからこれからもよろしくお願ひします!」

チユチユ 「ロツク・・・」

パレオ 「チユチユ様・・・」

チユチユ 「パレオ・・・」

パレオ 「お誕生日おめでとうござります。大好きです♪」

チユチユ 「こんなのが、こんなのはずるい！」

ぷいつとそつぽを向き涙目になるチユチユ。サプライズは大成功なようだ。その後はかるべく談笑した後よるも遅いので解散という形になつた。俺はロツクを家まで送り届けたあと真っ直ぐ帰宅する。

蒼生 「ただいまー」

影狼 「・・・帰ったか。」

蒼生 「・・・父さん」

俺を一番最初に出迎えたのは意外にも父さんだつた。

影狼 「・・・少し話がある。入りなさい。」

蒼生 「・・・分かつた」

言われるがままに部屋に入る。母さんは既に席に着いていた。

影狼 「・・・蒼生。お前には私と海外に言つてもらう。」

蒼生「だから何度も言つたでしょ。俺はここから離れる気は無いよ。メンバーとも上手くいってるし色々充実してきたんだ。」

影狼「いや、来てもらうんだ。」

少し遅れて気がついた。言い方がいつもと違う。いつもなら来ないか?とか興味はないか?とかいう聞き方だつたのに【来てもらう】って言うのは初めてだつた。

蒼生「どういう、事?」

影狼「そのままの意味だ。蒼生、お前のその才能をそのままにしておくのは勿体ない。私と一緒に来て、それに相応しいメンバーを探して・・・」

蒼生「ふざけるな!!」

俺はついこの時間にも関わらず叫んでしまう。

蒼生「俺に相応しいメンバー?そんなの、アイツらしかいないに決まつてんだろうが!父さんのメンバーにだつて遅れを取らないぞ!」

影狼「・・・ほう?」

しまつた。つい頭にきてとんでもないことを口走つてしまつた。dead emp er or。前にも少し話した父さんのグループだが当然生半可なもんじやない。テレビに出る時は拍手喝采が鳴り止まない。ゲスト出演する時は決まって大物と着けられて実力ゆえ世界各地にコネがある。そんな父さんに今俺は喧嘩を売るのと等しい言葉

を言つてしまつた。

影狼「ならばこうしようじゃないか。」

蒼生「・・・え？」

影狼「年末にJBBFがあるだろう。私達が出よう。お前のバンドも出るんだ。私たちに買つたら私が責任を持ち海外の話をなかつたことにしよう。」

蒼生母「ち、ちょっとあなた！それはさすがに・・・」

影狼「蒼生が自分で先程あんなことを言つたんだ。どうする蒼生？」

蒼生「・・・くつ」

俺は自信がなくなつてしまつて、目の前が真つ暗になつて、何も考えたくなくて、再び家を飛び出した。

## 抵抗の意思

何も考えられなかつた。海外に連れていかれる。バンドの練習は? アイツらの指導は? ロツクとの日々は? どう考へてもマイナスな方にしか考えが行かない。だから何も考へたくなくて、ひたすらに走つた。一心不乱に走つていたらいつの間にか俺は旭湯の前にいた。

蒼生「・・・なんでよりによつてここに来ちまつたかな。」

ここにいると自然と思ひ出してしまつ。初めてロツクのギターを聴き衝撃を受けた事。ギターの話をするようになり、こつちに来てから他愛のない話も沢山するようになった事。付き合つてからの日々、沢山甘えて甘えられて、他の何をするより幸せだつた事。そしてそんな日々が唐突に終わりを告げようとしていることに再び心が打ちのめされそうになつた。

蒼生「くつ・・・」

頬に生暖かい感触。一筋の涙がこぼれるのを感じる。

??? 「あ、あの・・・」

蒼生「え?」

聞きなれた声。振り向くとそこには俺の最愛の人が戸惑いながら俺の方を見ていた。

蒼生「ロック……」

六花「あ、蒼生さん？ その、どうかしたんですか？」

心配そうに純粋で真つ直ぐな目が俺を見てくる。話すべきか、話さないべきか。ふたつの考えが俺を交差する。

六花「何か言いにくいくことなんでしょうか？」

蒼生「そう、だな。めちゃくちや言い難い。」

六花「……無理にとは言いません。でも私、さつきは色々助けてもらいました！ 一度は私が助けたいです！」

蒼生「……わかった。少し待つてくれ」

ロックの真つ直ぐな目を見てたら隠す気が段々失せてきた。覚悟を決めて話そう。

蒼生「……父さんから、日本を出ろって言われた。」

六花「え？ で、でもそれってよく言われてたんじゃ？」

蒼生「今回は違うんだ。命令なんだよ。」

六花「そ、それじやあ……」

一気にロックの顔が暗くなっていく。

蒼生「それで俺がカチンときてもう父さんのバンドよりも演奏できるから海外になん

て行かないって言つたんだ。そしたら年末のJBBFに出て優勝しろって。父さん達も出るつてさ・・・」

六花「JBBF!?

【JBBF】毎年年末に行われる日本屈指のライブイベント。出場はプロアマ問わないが毎年世界レベルのバトルが行われている。ただでさえレベルが高いのに父さん立ちまで出ると来た。正直状況は絶望的だろう。

六花「・・・蒼生さんは、諦めてしまふんですか?」

蒼生「諦めたくはないよ。でも、相手が強大すぎる。練習時間も圧倒的に足りない… CIRCLEやGalaxyを借りたとしても集まるれる時間も無い。勝算が無さすぎる。」

六花「・・・」

チユチユ「なるほどね。」

六花・蒼生「!?」

急に後ろから声がして振り返るとパレオとチユチユがそこにいた。

パレオ「盗み聞きして申し訳ありません。緊急事態だつたと思いましてお話を聞かせていただきました。」

チユチユ「JBBFねえ。面白いじゃない。本戦に出場するのは貴方たちのバンドな

ら訳ないはずよ。」

蒼生「でも、優勝なんて」

チユチユ「練習時間が確保出来ればいいのかしら?」

蒼生「・・・え?」

六花「チユチユさん?」

チユチユ「貴方に私のスタジオを貸すわ。設備も申し分ないとと思うわ。まあアタシ達が練習しない時に限りね。」

蒼生「なんで、そこまで?」

俺はチユチユがそこまでする理由がわからなかつた。正直だいぶ困惑している。

チユチユ「貴方には大きな借りがあるわ。後、他のバンドにも相談してみなさい? 貴方はあなたが見てきた全てのバンドに大きなものを貸してきたはずよ。必ず力なになつてくれるはず。」

蒼生「でもそれで迷惑は・・・」

チユチユ「言つたでしよう。みんな借りがあるのよ。それに借りがなかつたとしてそれを迷惑がるような連中かしら? 少なくともアタシたちは違うわ。パレオもロックもそうよね?」

パレオ「もちろんですー♪」

六花「はい！」

蒼生「お前ら……」

少しずつ、希望の光が見えてきた気がする。もし、仮に全員が力を貸してくれたとして、市ヶ谷の家の倉でさらなる練習場所の確保、AfterglowとRoseliaに練習も見てもらい弦巻の力で平日の放課後でも集合できるだろう。パスパレも協力してくれれば大きなモチベアップになる。

チユチユ「そして、貴方のバンドメンバー。この勝負を断るほど薄情ではないでしょ？ならマイナスな考えは全て捨てなさい。あと、JBBFはガールズバンドパーティーが終わってからしばらく期間があるわよね？時間がある時は私達もサポートさせてもらうわ。」

蒼生「・・・色々すまねえ。力を貸してくれ、お前ら。」

チユチユ「sure！」

パレオ「はい♪」

六花「一緒にがんばりましょう！」

そして俺はささやかな希望を胸に家に帰った。母さんだけは起きていてすごく心配されたが今日は休みなさいと言われて自室に入れられた。翌日、全バンドから力を貸してもらう許可を得るのはそう時間はかからなかつた。

# ごめんよりありがとう

俺はやることが決まつたら早かつた。まず Wild Baby のメンバーに今の俺の状況を報告。皆力を貸して貰ると即答してくれて余計な詮索はしないでくれた。そして。ボピバ。経緯を話したら当然だがものすごく驚かれた。しかし市ヶ谷は有咲「・・・まあ、世話になつてるし、練習場所提供くらいなら、分かつた。好きに使つてくれ。」

と文句一つも言わず蔵を貸してくれるといつてくれた。Afterglow と Ro

selia にももちろん相談。

蘭「それ、本当に私達でいいの?」

蒼生「ああ、第三者からの意見つて大事だから。」

蘭「・・・わかった。」

友希那「私達も協力させてもらうわ。貴方には少なからず恩があるもの。」

と普通に協力を得られた。パスパレ?もちろん行きましたとも。

彩「モチベーション?」

蒼生「はい。これからうちのメンバーにもかなりの負担をかけることになると思うの

で、

千聖 「でも詳しくは何をすればいいの？」

蒼生 「あー、多分アイツらのことなんでバスパレの皆さんが視界に入るだけで元気100倍になりますよ。」

彩 「それはそれでどうなの？でも、うん！私たちにやれる事なら任せて！いつもお世話になつてるからね！」

とあやふやなお願いをしたにもかかわらず5人からOKを頂いた。ハロハピの所は

蒼生 「・・・つうわけでき、何とかならないか？」

こころ 「わかつたわ。黒服の人達！お願ひね！」

と、少々雑っぽい、というかあつさりしているが黒服の人達がヘリを飛ばして岐阜にいるヤツらを迎えてくれるそうだ。  
ここまで恐ろしくチユチユの言つた通りになつた。ただ、Bang Dream!が終わるまでは蔵もRASの練習スペースもあんまり取れないだろうから個人練習が多くなるだろうがかなり希望が見えてきた。ちょうどメンバーの指導も休みを頂いてたので練習時間は沢山取れた。そしてある日、CIRCLEのスタジオを借りて練習していた帰り、見慣れた青い髪の毛が見えた。

蒼生 「あ、ロック。」

六花 「あ、蒼生さん！何だかお久しぶりですね？」

蒼生「だな。・・・少し時間いいか?」

六花「はい、もちろん♪」

そのままロックの手を引いてある所までやつてくる。

六花「ここは・・・」

蒼生「・・・懐かしいよな。」

俺が連れて来たところはロックから告白を受けた公園だ。夕方なので人もいなくて夕日も差して少しロマンチックな感じになつていて。

六花「その、最近どうですか?」

蒼生「順調に言つてるよ。色んな人が協力してくれてる。CIRCLEとか、チユ  
チユや蔵の練習場が空いた時は集まつてやつてるし個人練習も欠かしてないよ。」

六花「・・・そうなんですね」

なんだか寂しそうだ。最近会える時間もめつきり減つてしまつた。寂しい思いをさせてしまつたかもしれないな・・・よし

蒼生「・・・ロック」ギュ

六花「ふわえ!?あ、蒼生さん!」

蒼生「寂しかつたよな?ごめんな?」

六花「いえ。私もちよつと甘え過ぎてたかも知れないです。ちよつと露骨でしたよ

ね  
・  
・  
・

蒼生 「そんなことないよ。俺も時間取れなくて、今は思いつきり甘えてくれ、な？」

六花 「・・・はい」 ムギュ

そう言うと思いつきり抱きついてくる。

蒼生 「このままもう少し話しよつか？ 六花は最近どう？」

六花 「そうですね、もう本番も近いですし皆で頑張ってますよ♪」 スリスリ

俺の胸元に顔をスリスリとこ擦り付けながら会話をする。正直めちゃくちゃ恥ずかしい。

蒼生 「そ、そ、うか。他のバンドとはどうだ？」

六花 「はい、前よりもだいぶ関係は良くなつたと思ひます♪ 最後にみんなで1曲歌うっていう話にもなつたんですよ？」 グリグリ

なんかさつきより押し付ける力は強くなつてない？

蒼生 「お、おう。ところでロック？」

六花 「なんですか？」

蒼生 「その、くすぐつたいんだけど？」

六花 「えへへ、ごめんなさい。いっぱい甘えたくて／＼＼

蒼生 「・・・なら条件がある」

六花 「え？」

蒼生 「それは……」

六花 「それは？」

蒼生 「俺にもやらせろーー！」

六花 「へ?!ひやあ、あはははははは、こしよばいですよ♪」

とこの後1時間くらいイチャイチャしてた。久々に身も心も満たされた気がする。

そしてその後……

六花 「お邪魔しまーす……」

蒼生 「はい、いらつしやい」

連れ帰つてしまつた。可愛すぎるから仕方ないよな。

蒼生母 「あら、おかえりなさい。ロツクちゃんもいらつしやい。ゆつくりしていく  
ね？」

影狼 「……帰つたか。」

六花 「え?」

蒼生 「……うん」

影狼 「いいのか？こんな所で遊んでて。私達にそんなことで勝てるのか？」

蒼生 「……勝つさ。今のうちに父さんも日本を堪能しておくといいよ。息子と過ご

せるのは日本だけなんだから。」

影狼「・・・言うな。その自身の根拠はどこから来る？」

蒼生「・・・さあね、勝てる根拠はないよ。ただ今俺は最高の環境とモチベーションに恵まれてるんだ。そんな状況で負けると思えって言う方が無理な話だよ。いこ、ロツク。」

六花「あ、は、はい。失礼します。」

影狼「むう・・・」

ロツクはペコリと頭を下げて中に入る。

六花「えっと、良かつたんですか？あの影狼さんにあんなこと言つて・・・」

蒼生「・・・良くなかつたかもね？でもまあ、いつかは当たる壁だからね。それに俺が言つたことも事実だよ。環境も才能だし、ガールズバンドのみんなが俺らのモチベ上げる為に頑張つてくれてるからな。」

六花「そう、ですか。蒼さんがそれでいいなら。」

蒼生「ああ、おいで？」

六花「はい♪ぎゅー♪」

部屋に入り再びいちゃつき始める。これはただのカンだが、JBBFが始まるまでゆっくり2人で入れる時間はこれが最後になると思う。

蒼生 「六花。」

六花 「へ？ な、名前……」

蒼生 「今はこつちで呼ばせてくれ。六花。」

六花 「は、はい。なんですか？」

蒼生 「愛してやるよ。」

六花 「……はい／＼／＼私もです／＼／＼」

蒼生 「なあ六花？」

六花 「はい？」

蒼生 「ずっと一緒にいような？ これからも。その日々。俺が守るから。」

六花 「……はい！ あ、あの、蒼生さん。」

蒼生 「んー？」

六花 「その、六花つてこれからも呼んでくれませんか？」

蒼生 「ん、なんで？」

六花 「その、ときめいちゃつたので／＼／＼」

・・・ああ、可愛い。ほんとにこの子は可愛い。

蒼生 「お、おう。わかつた。その代わり俺からもおねがい。」

六花 「えつと、なんでしよう？」

蒼生 「敬語」

六花 「え？」

蒼生 「敬語、俺と話す時はやめて？」

六花 「そ、それは恥ずかしいですよ／＼／＼

蒼生 「宇田川とか明日香にはタメなのに？」

六花 「わ、分かりましたよう／＼／＼

蒼生 「はは、これからもよろしくな？」

六花 「・・・うん／＼／＼」ぎゅ。

この一日でさらに六花と仲良くなれた気がする。そしてこの日を境にモチベーショ  
ンをさらにバク上げさせた俺は練習に思いつきりパワーをつぎ込むことが出来た。

# 流れる星に魅せられて

俺はたくさんの人達に支えられて練習を続けていた。今はR A SもポピパもB a n G D r e a m ! の追い込みをしているので今日はC I R C L Eで練習をしている。まりなさんにも事情を話すと

まりな「うん、そつかー。それならスタジオが空いてる時は言つてくれれば使つてもいいよ。頑張つてね！」

とC I R C L Eの使用許可をしてくれた。そして俺達は休憩がてら少し会話していった。

蓮 「それにしても、蒼生。お前本当に人間関係に恵まれたよな。」

海斗 「同感だな。まあ日頃から6バンドの面倒見てんだろ？いい意味で報われたんじやねえの？」

蒼生 「そうだな。俺はこんな事になるとは思つてなかつたし、仕事としてやつてたら正直驚いてるよ。」

天音 「でも、正直絶望的じやありませんか？だって、相手のスケールが・・・」

蓮 「天音、それ以上言うな。」

天音 「でも・・・」

蒼生 「いや、蓮。不安は吐き出せるうちに吐き出させておけ。絶望的なのは確かだからな。天音も、遠慮しなくていいからな?」

蓮 「蒼生・・・」

蒼生 「そもそもこんな絶望的な勝負の話を持つてきてしまったのは俺だ。文句くらい聞くさ。」

俺は淡々と話すがみんな少しブルーな雰囲気になつてしまふ。

海斗 「まあ、こんな感じになつてたら余計に勝てなくなるもんな! 気合入れてこーゼ

!」

天音 「・・・そう、ですよね。もう弱音は吐きません、頑張ります!」

蓮 「・・・そうだな。やるか!」

とは言つてもこのように最近は自分たちで士気を向上させることも多くなつた。一度挫折を経験しているのでそくならないためにみんなで意識するようにしていく。事実皆のモチベーションも上がるし技術も着実に上がつていつてる。が、まだまだあの領域に届きそうにない。

天音 「そういうえば蒼生さん? 近々 Bang Dream! の決勝戦でしたよね? 見に行かれないとですか?」

蒼生「もちろん見に行くぞ？それもしかも一応CIRCLEで働いてるから関係者のところで見れる。実質特等席だな。そして、お前らもそこに入れるようにしといた。」

天音「え、どうしてです？」

蒼生「いい刺激になると思つてな。俺も久しく練習は見てないが今のアイツらができる完璧に近い状態に仕上げてくるはずだ。3バンドとも決して実力は低くない。むしろ高いからな。それに、たまには羽根伸ばして思いつきり楽しむのもありだと思ってな？あんまり詰めすぎると精神的にも体力的にも宜しくないからな。」

天音「そういうことなら♪皆さんはどうしますか？」

海斗「モチのロンでいくだろ！」

蓮「ああ、行かせてもらうよ。ちょうど予定も空いてるからな。」

そのまま話の流れで4人で武道館に行くことが決定した。そのまま普段は学校。時間を作れれば練習。たまにB a n G D r e a m! 出場以外のバンドを見るという日々が続いた。そしてあつという間に決勝戦当日になる。俺は朝早くから手伝いのために武道館に着いていた。

蒼生「おはようございます。まりなさん、お久しぶりです。」

まりな「うん、久しぶり。今日はごめんねー？こんな早くから。」

蒼生「いえいえ、俺もだいぶわがまま言わてもらつたので。気にしないでください。」

まりな「そう？じやあよろしくね。」

そのまままりなさんに連れられて中に入る。今日ステージになるところまで連れていかれるとスタッフさん達の支持を受けつつテキパキと準備する。スムーズに行つたので予定の30分ほど早く終わった。ゆっくりしているとスタッフとしてちょうど今入ってきた六花が声をかけてきた。

六花「あ、蒼生さん！おはよう♪」

蒼生「おはよう六花。早いね？コンディションは大丈夫そう？」

六花「うん、バツチリだよ。それに、一応スタッフだから早めに来ないとって思つて。」  
 ちなみに六花呼び、タメ語の関係は今となつてはお互い違和感はなくなつていて。むしろ壁がなくなりさらに親密になつた気がした。最近になつてからかわれる回数が増えてきたし、気のせいじやないと思う、多分。ちなみに六花は今日は出場するんだから遅く来てもいいと言わっていたのだが六花自身が遠慮し、私も手伝えます！と定時通りに来たのである。

蒼生「つて言つてももう今できる準備は終わっちゃつたんだよね。照明とかは六花は今日できないでしょ？今は休んでて大丈夫だと思うよ？」

六花「うん、じやあ控え室で待つてるね？」

蒼生「ああ。つとそうそう、六花？」

六花 「ん、なあに？」

蒼生 「こういう事はあんまり立場柄言いにくいんだが、個人的に1番六花を応援して  
るから。頑張れ。どんな結果になろうと六花が最善を尽くせることを祈つてる。」

六花 「えへへ、うん！ ありがとう。」

六花の頭をポンポンと撫でると嬉しそうにニコッと笑つて控え室に向かつていった。  
そして入れ替わるように Wild Baby のメンバーが入つて来た。

蓮 「おっす！」

天音 「おはようございます。」

海斗 「はよー」 ネムネム

蒼生 「ん、きたか。みんなおはよう。海斗は相変わらず朝弱いなー？」

海斗は眠そうな目を擦りながら、神代兄妹は元気そうにこちらによつてくる。

海斗 「わりわり〜。始まるまでには覚ましとくからよ〜。」

蒼生 「当たり前だ。六花がやつてる時に寝てたりしたらもうひつでえぞ？」

蓮 「相変わらず彼女に甘々だな？」

蒼生 「うつせ。それより早く来たならちよつと手伝つてくれ。この後各バンドで色々

打ち合わせたりステージ色々合わせないと行けないから。」

天音 「分かりました。」

そのまま雑談、準備、出演バンド三組に最後に言葉をかけるなどやる事をやつていて  
とすぐに本番の時間になる。客席も満席。空席は全く見当たらない。今か今かとみん  
なが出てくるのを待ちわびている。俺も練習を見てない間、どこまでみんなが仕上げて  
きたか期待と楽しみ、という気持ちが湧き上がっていた。あと10秒で始まる。さあ、  
見せてもらおうか！